

風俗奇譚 1月号・昭和36年1月1日発行(毎月1回1日発行)・昭和35年8月30日国鉄東局特別扱承認雑誌第882号

風俗奇譚

1961
1月号

昭和36年1月1日発行(毎月1回1日発行)通巻14号
昭和35年8月30日国鉄東局特別扱承認雑誌第882号

特集 **ソドミニアとレスボス**
読切小説 **悦虐クラブの女**



〈男女性風俗の粒より結晶の探究〉

昭和36年1月号

定価 140円



足をしばつちやえ



シマウマをつかまえて

CODICIL ENAL



Article 325. Le crime de
castration s'il a été im-
-diatement provoqué par
un outrage violent à la
pudeur sera considéré
comme meurtre ou
blessures excusables.



西洋“お定”・動物版

風俗奇譚 一九六一年一月号 目次

(多色口絵) 血を好む大公妃……………A 筆(折込み)

妖美吊り艶姿……………(二) ころがし責め……………(二四)

盛装の緊縛……………(五) 吊りのバリエーション……………(二六)

妖しき訪問客……………(二六) ハリツケとさか立ち……………(二八)

艶縛 4 態……………(二八) 眼帯のおんな……………(三〇)

うずくまる小鳥……………(三〇) ベッドの上の縛姿……………(三二)

聞怨のポーズ……………(三二) 六尺をしめて……………(三四)

モデル 村上ユキ・高月まゆみ・さつきみち・井神せい子・舟木喜代子・児玉幹也

特集 ソドミアとレスボス

ビューティ・ビューティ……………獅々村 裕(五四)

ウールニングについて……………奥村世紀 男(五一)

レスビア 樹 氷の季節……………有川正子(六七)

有名ソドムの人びと……………羽井鯨亭(八〇)

有名レスビアンの群像……………真野 麗(八五)

男色殺人事件を推理する……………雨妙院一太(八八)

ほも禁 秘帖③ その愛術のすべて……………かびや・かずひこ(七二)

真 ふたりプレイ、オン・パレード……………(三五)

写 レザー・フェチシズム……………(四二)



空中緊縛・雪責め……………江馬 美久(四六)

線路しほり……………小田 利美(四八)

浣腸の和解……………木暮 元一(五〇)

花の木馬……………北 鶴 藤 恵(二四)

小説 悦虐 花……………潤(二〇八)

マゾヒストの手紙から⑦……………谷 貫 太(九六)

責められる女の羞恥……………宮原 静雄(二三四)

ファンタジック・エッセイ 耳輪が揺れる……………番場多計夫(二三九)

示威サディズムということ……………藤 川 潤(二五四)

女をいじめた思い出……………岡村 芳夫(二四七)

長靴をはく女ジェーン……………志乃田 藤美(二四〇)

女の肌をはうカニ……………千石 仙太郎(二五〇)

彫りもの 奇談……………トビック・ロイタリー(二一八)

☆読者サロン……………奥様の裸は高くつくものか?……………(二一八)

女の尻をなでてもワイセツでない?……………(二〇七)

悦虐クラブの女……………青山三枝吉……………(二七〇)





女を襲う動物たち

妖美吊り艶姿



妖美艶麗 肌をむかれて うしろ手に吊られた女 爪先だった苦しい姿勢で いったい
つまで耐えられるだろうか 呼吸はあえぎ乳
房が大きく吐息をつく（モデル・村上ユキ）



盛装の緊縛

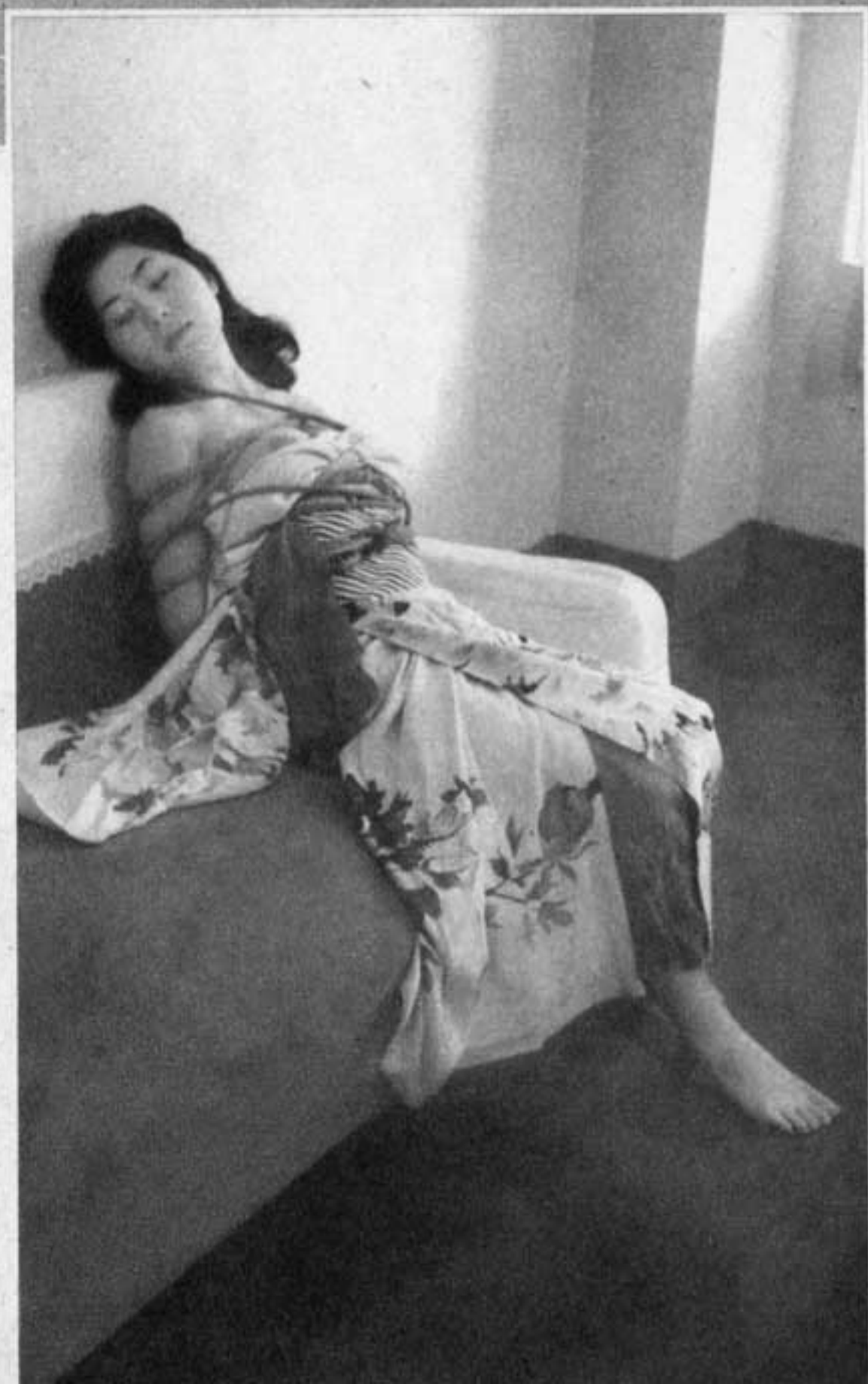
盛装の身を あわれ 縛られて サルグ
ツワをかまされて 女は 飛ぶことを奪
われた とらわれの小鳥 ひっそりとう
ずくまっているへモデル・高月まゆみへ





妖しき訪問客

訪れた美しき女客をとらえて 縛りあげた無残さ 思いがけない仕打ちに合って 彼女は華麗な緊縛の座につくへモデル・村上ユキ







艶縛 4 態

その姿ははなやかで 明るく
縛虐のア・ラ・カルト
〈モデル・さつき・みち〉



うずくまる小鳥

縛られて ひっそりと 植え木のかげにうず
くまる女は ものにおびえた小鳥のようだ
飛び立とうにも つばさをもがれ 宿命につ
なぎとめられて ただひたすらに 自由をね
がうのだろうか それとも かすかなエレジ
ーに身をひたして トレモロに 世をはかな
むのか ひとすじに〈モデル・舟木喜代子〉







閨怨のポーズ

寝巻き一枚のポーズで縛られて これは 閨のはじらいか あるい
は あきらめのうらみごとか なまめかしく あかりに ゆらいで



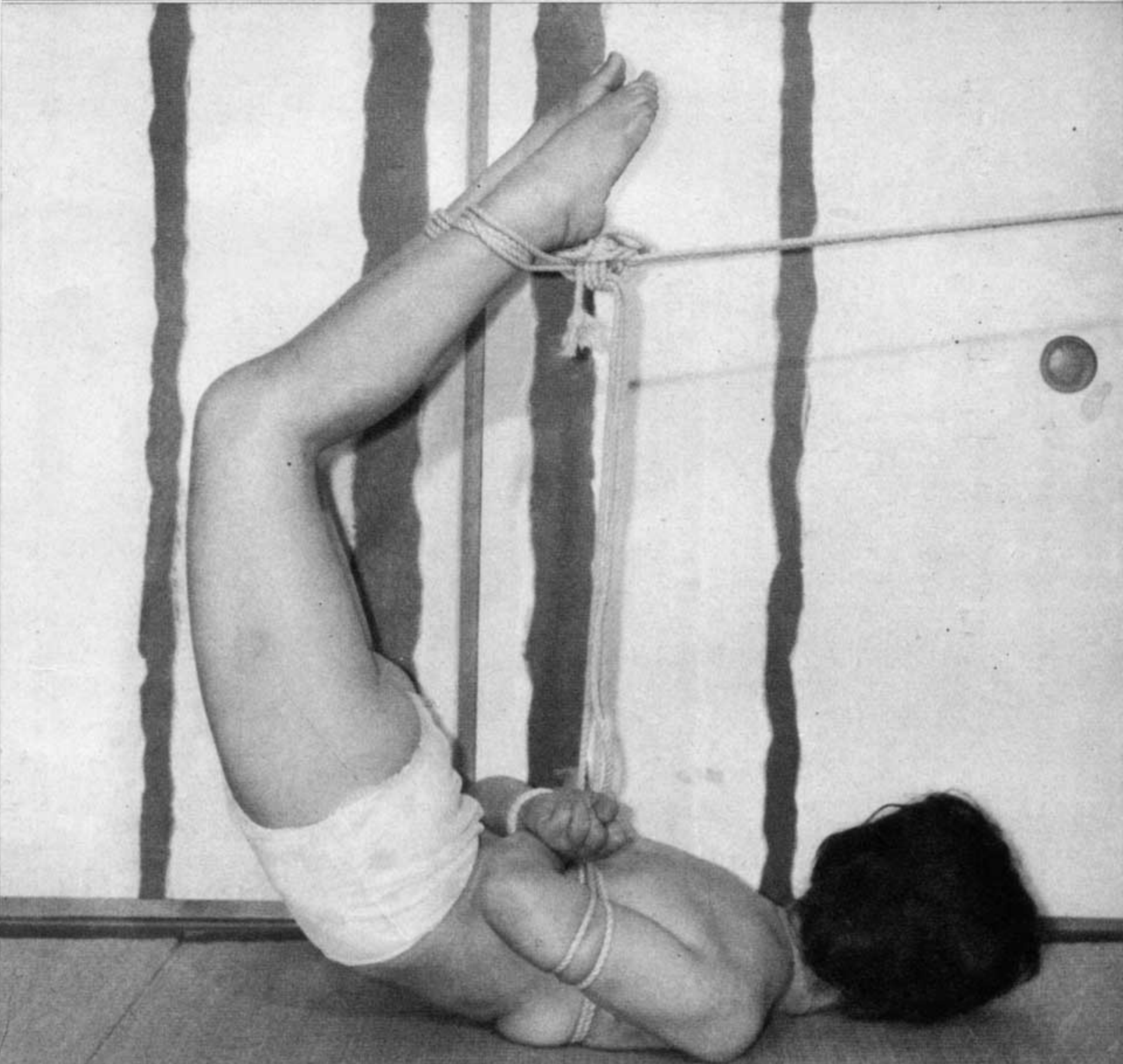
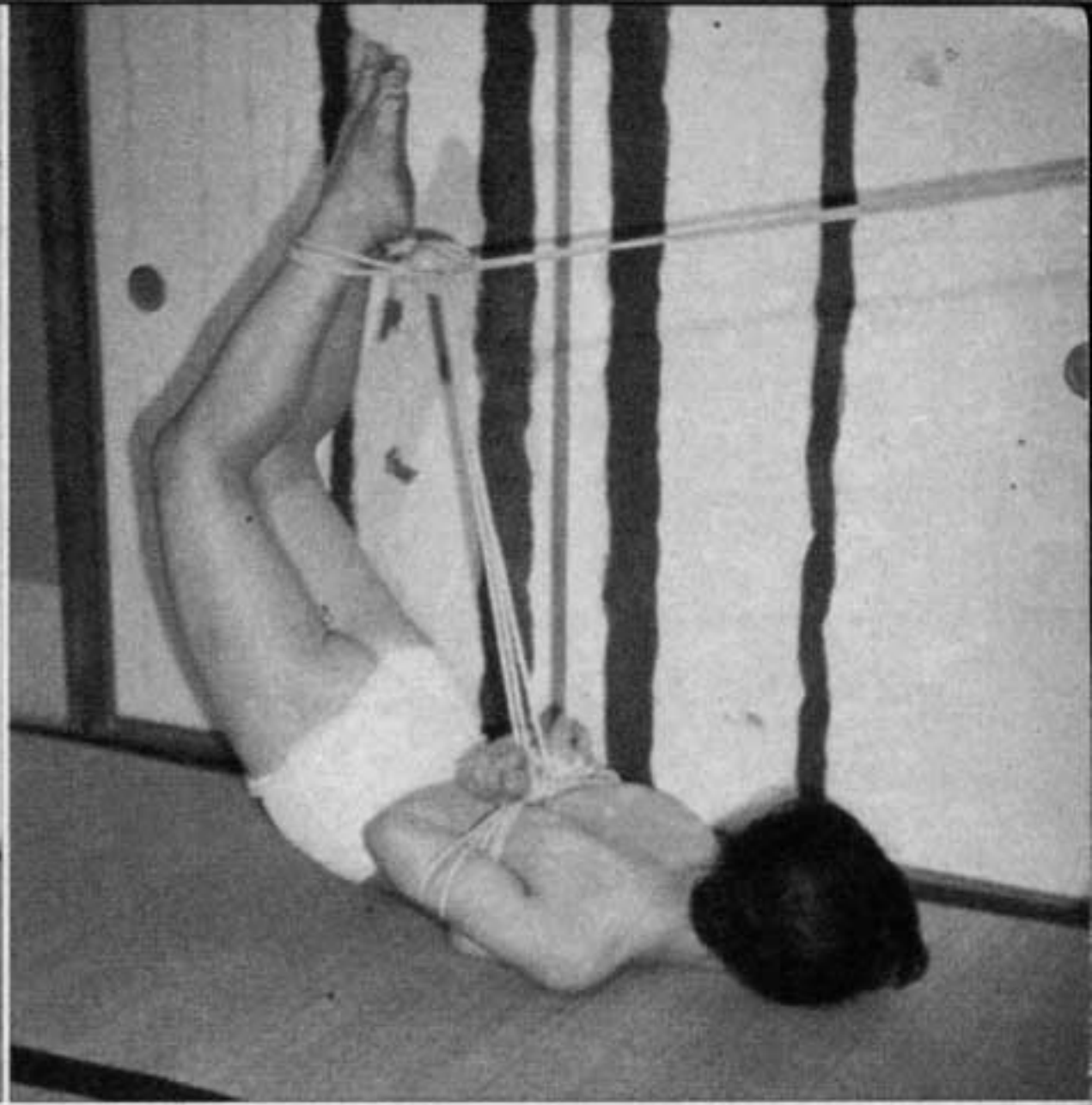
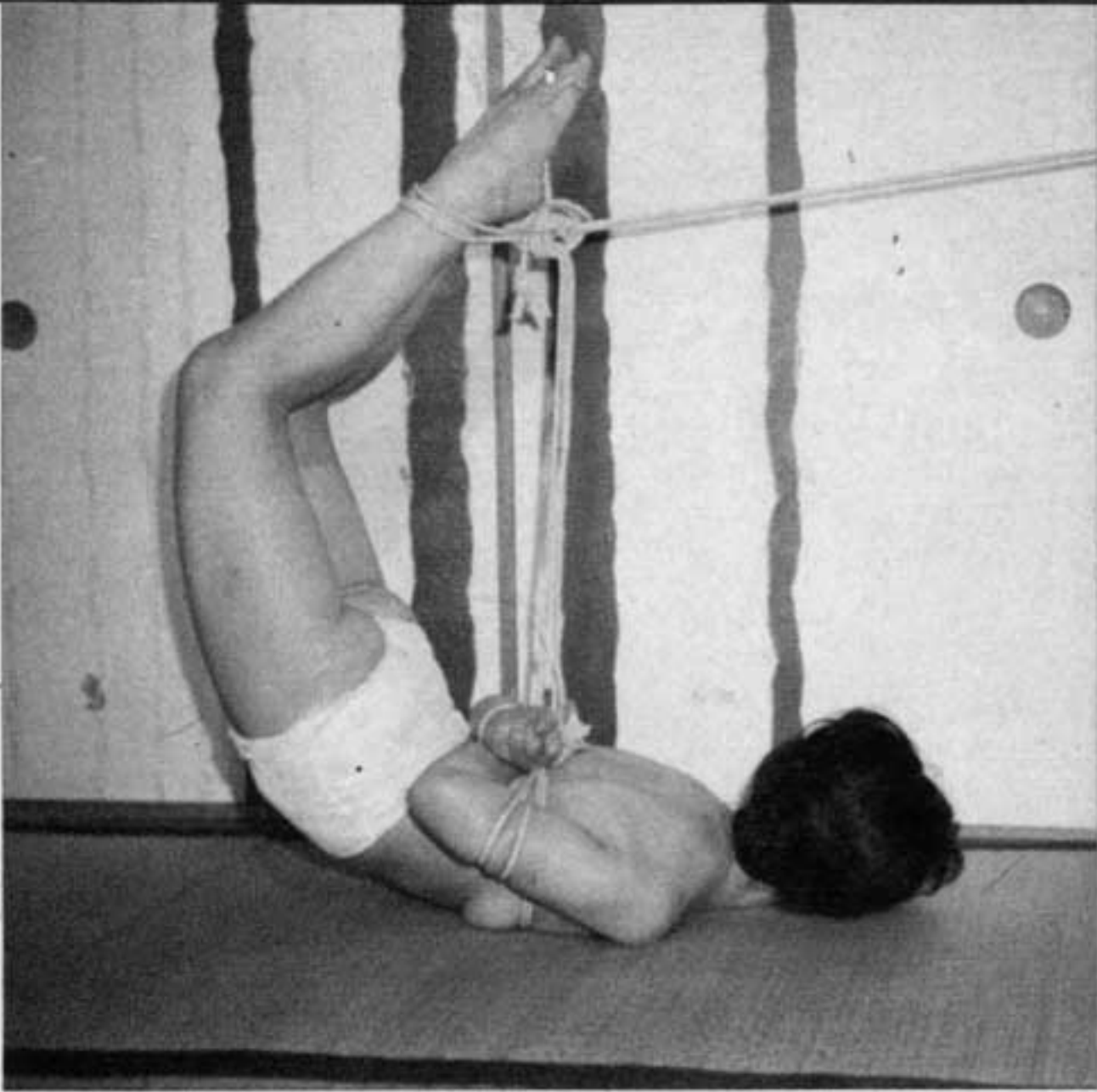


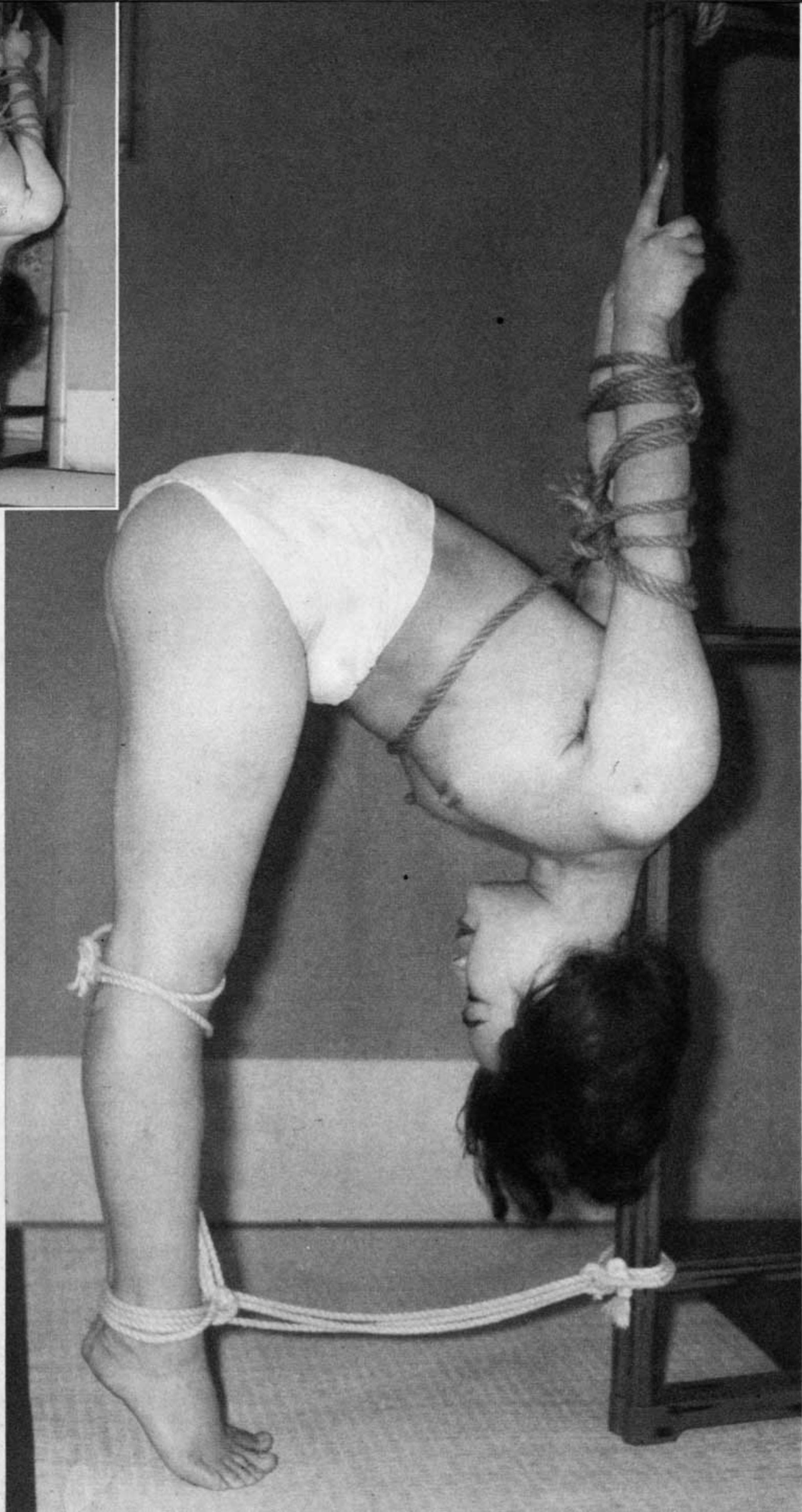
ころがし責め



しばらくして ころがされて ふみつけられて さて この加虐のなから湧きいでる 苦痛と甘美な感覚のない合わせつた複雑な官能 そこに 女の生理のヒミツが隠れているへモデル・井神せい子へ

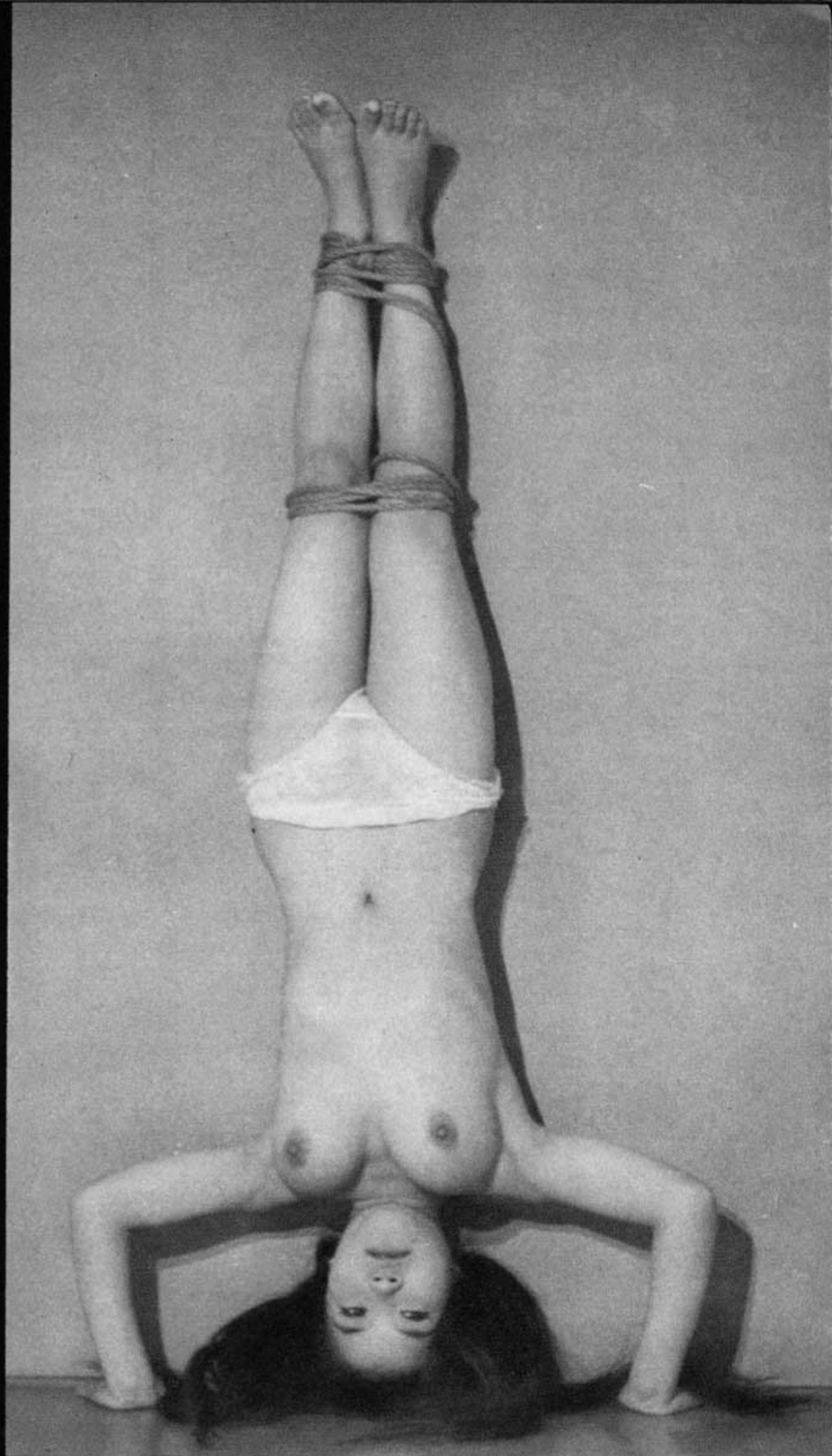






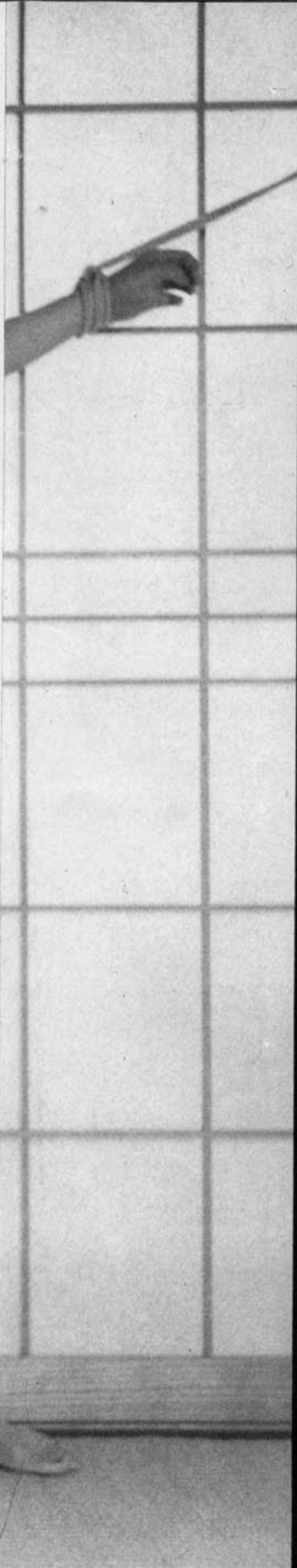
吊りのバリエーション

手をうしろ上に吊られるとからだは二つ折り 足を吊られればそり返ったエビだ



ハリツケとさか立ち

思いきり両手を左右にひっぱられた十字形のハリツケ 足を縛られてさか立ちの姿勢 どちらも 無防備な女のポーズだ どこから攻められても 落ちる

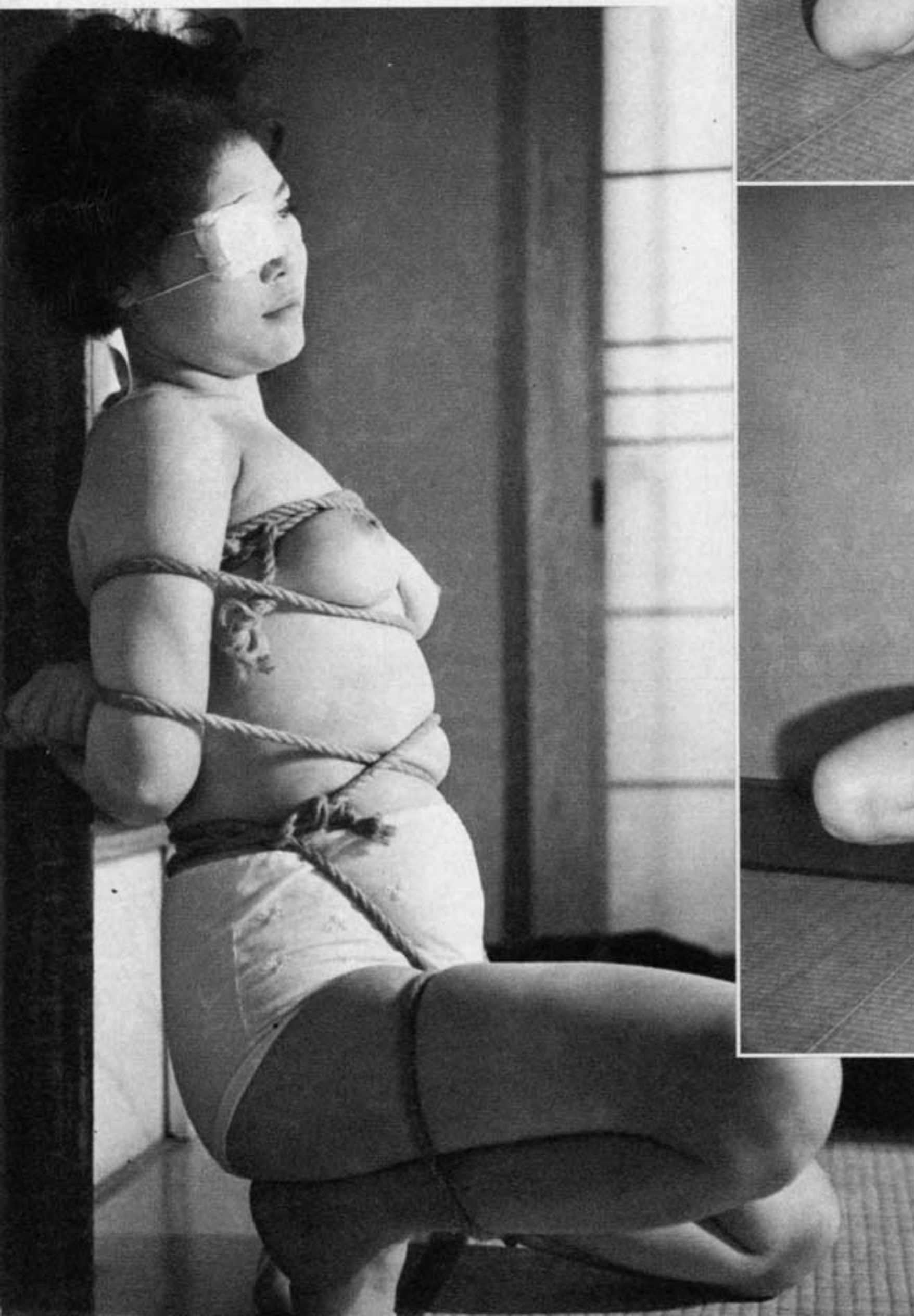


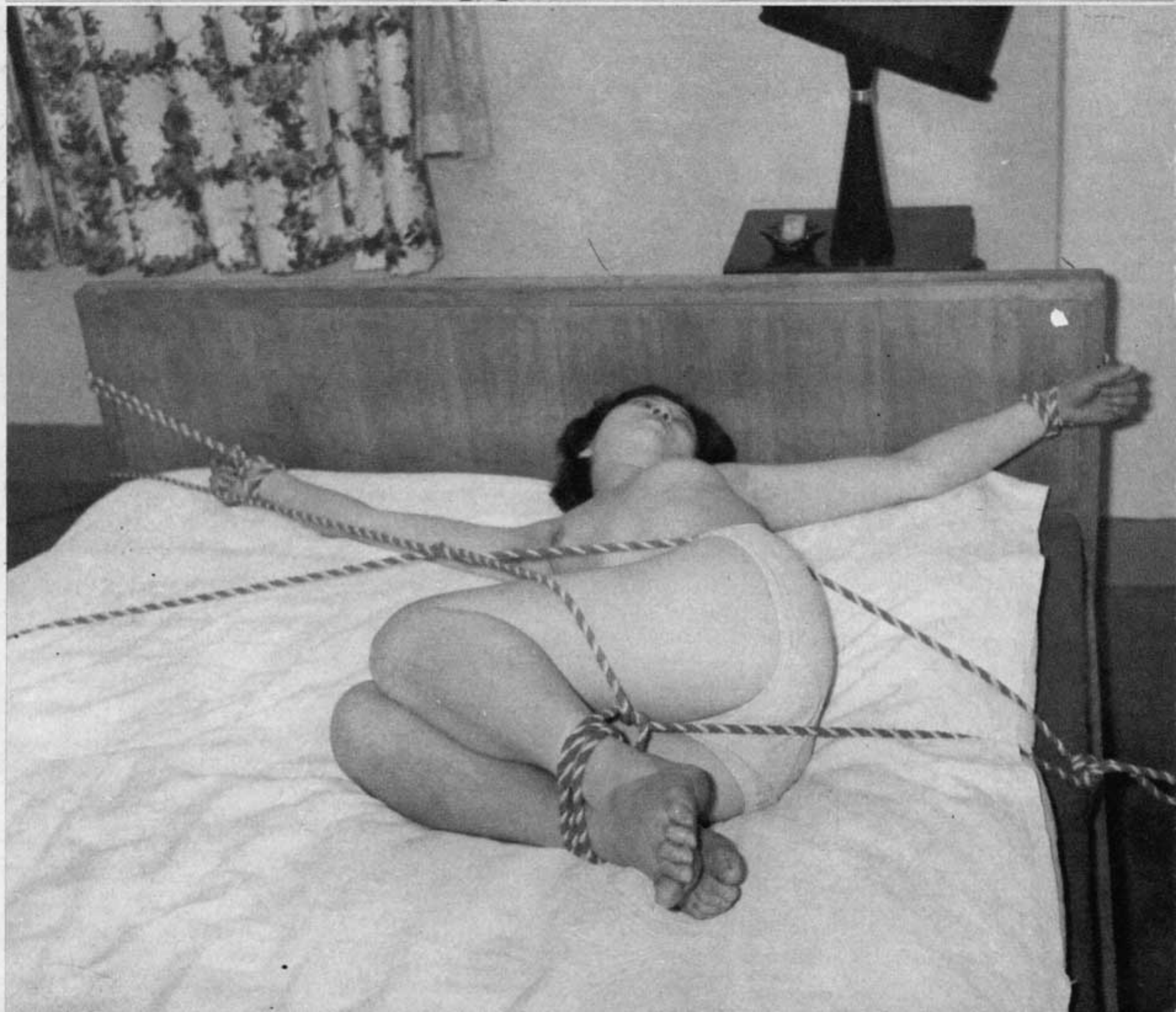




眼帯のおんな

眼帯の白が いたいたしく映えると
女の顔全体が まぶしげに光る ど
んな苦痛も 片一方の目に凝結する
と 甘く 陶然とした雰囲気をかも
しだすから とにかく奇妙なものだ





ベッドの上の縛姿

ベッドのわきには 縄をかける仕掛けがついていて 女を ベッドにペタリと 縛りつける 寝ながらのハリツケといったところだ そうかと思うと クサリで 縛りあげてベッドにつなぎ 両手は頭上で合掌し 寝るまへの悦虐の図

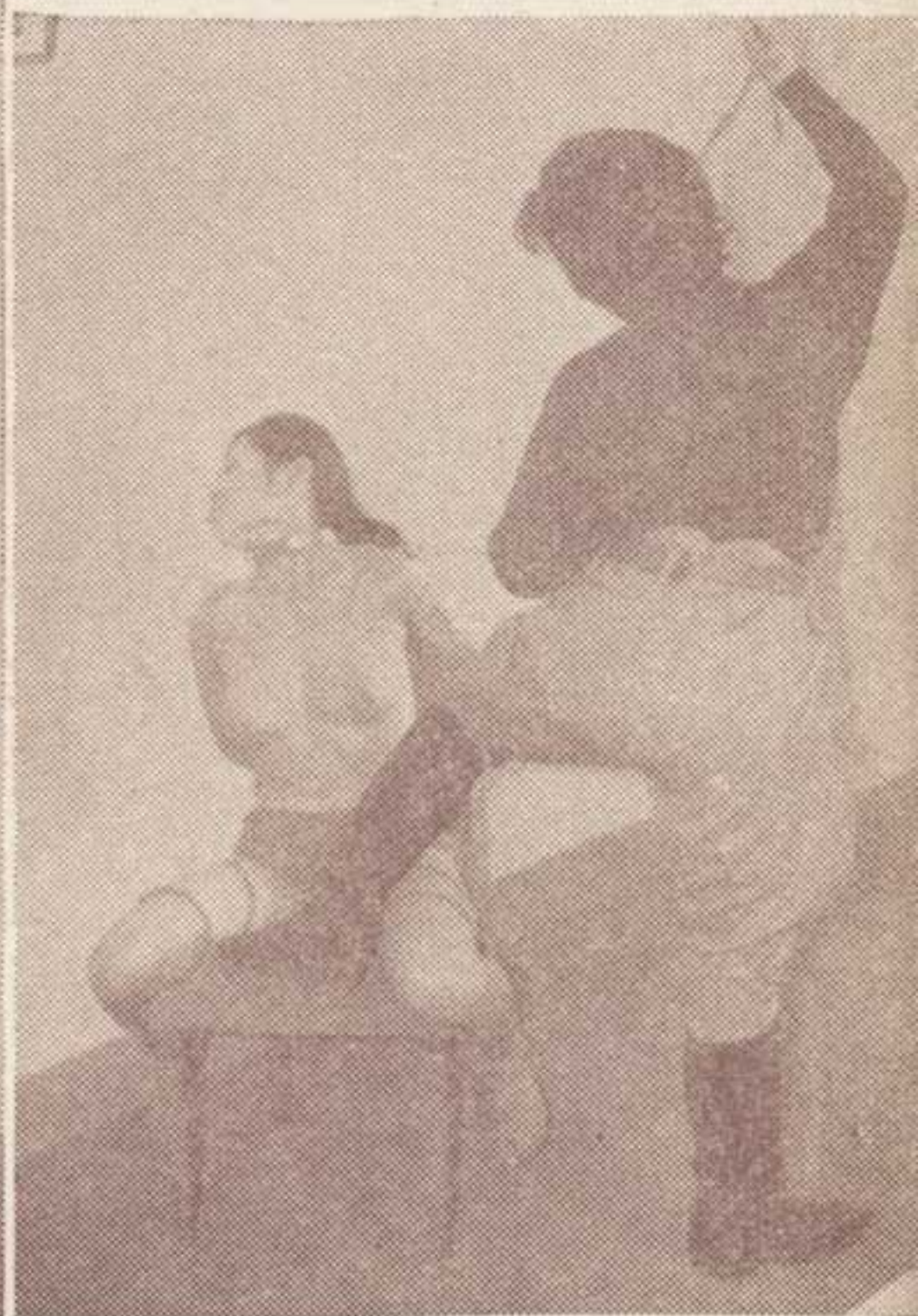


ふたりプレイ オン・パレード

同性が同性をムチ打ち 異性が異性をしいたげる そこに異様な雰囲気生まれ 奇妙な陶酔が湧きいでる それがこのプレイの秘密



ピシリッ！ ムチがふり下ろされると 犬の
首輪につながれたハダカの女の顔がゆがみ
白い肌には赤い火竜がつっ走る 髪をひっつか
んで引っぱられたり引っぱったりしている
ところから 官能が火をふき 法悦があふれる





レザー
フェチシズム



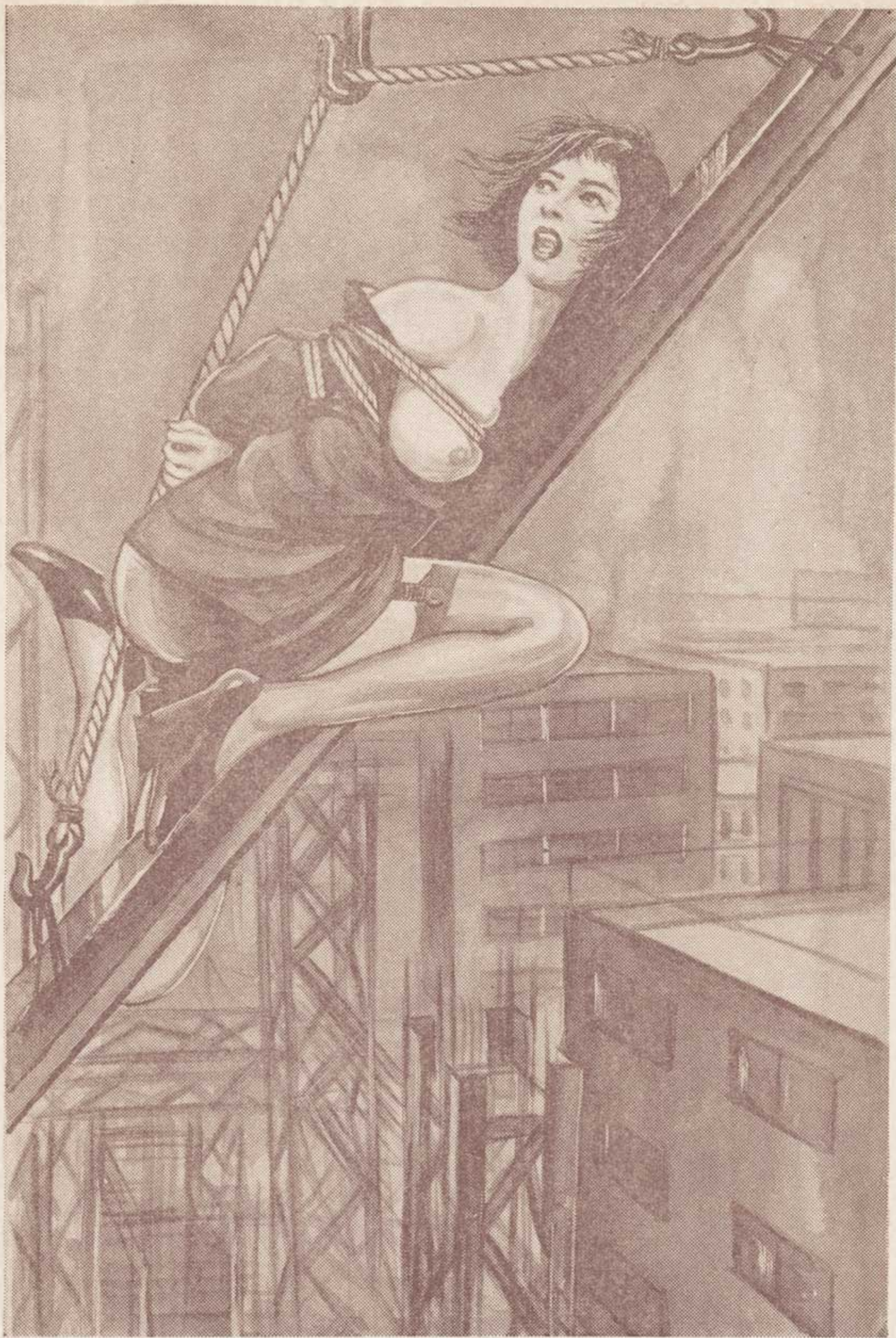
皮が夢幻の境地をさそう 皮が不思議なエクスタ
シーをよぶ 皮のジャンパー 皮のベルト 皮の
長靴 かくて 皮のフェチシズムが生まれるのだ





女の肌にまといつく皮 肌がにおい 皮がに
おう このレザー・フェチズムの妖美の世
界に住む妖精の ほのかにただようアトモス
フェア 美と艶と色とがミックスした雰囲気

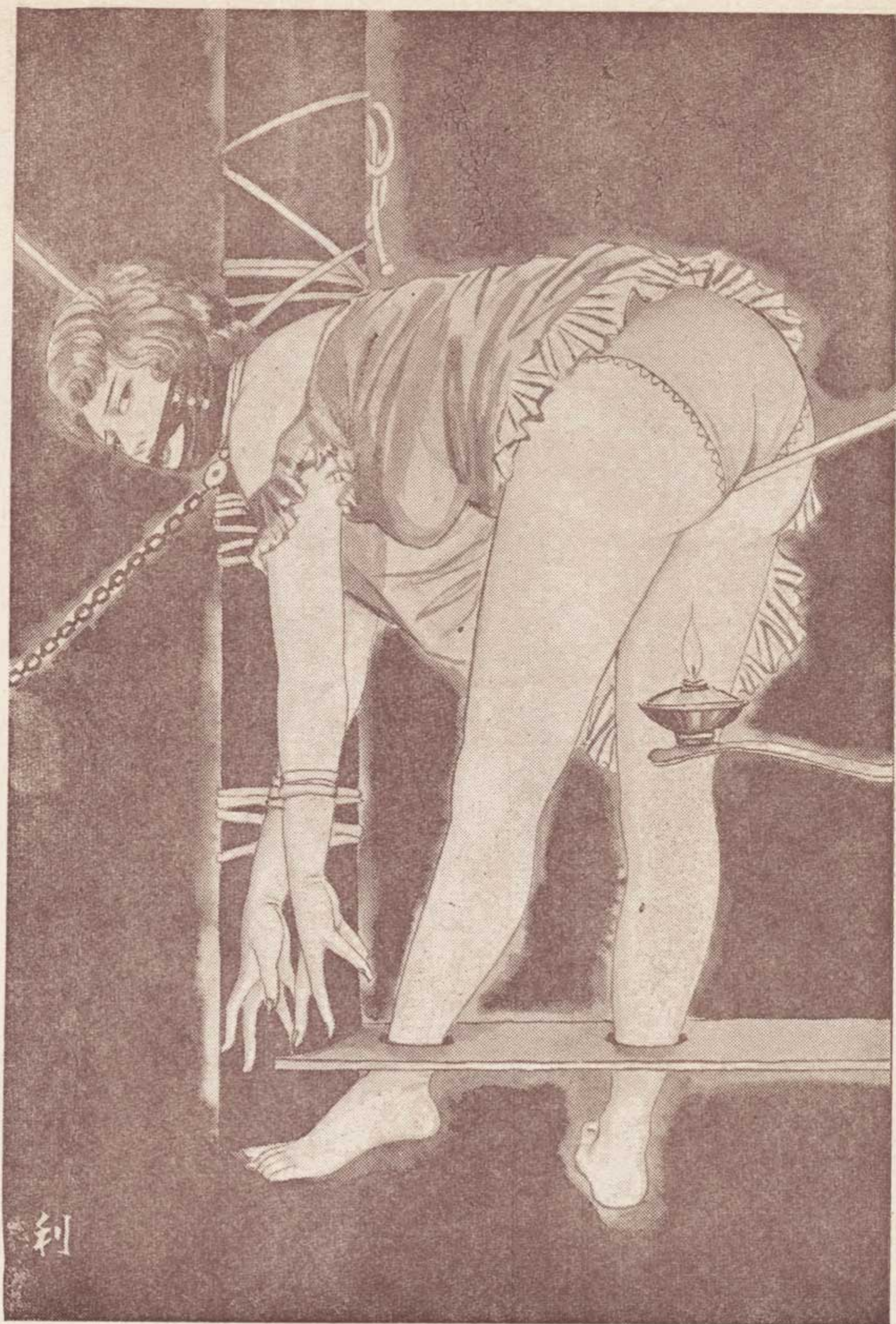




＜空中緊縛＞建築中の高層につき出た鉄骨に縛りつけられた戦慄恐怖の姿勢 江馬美久・え



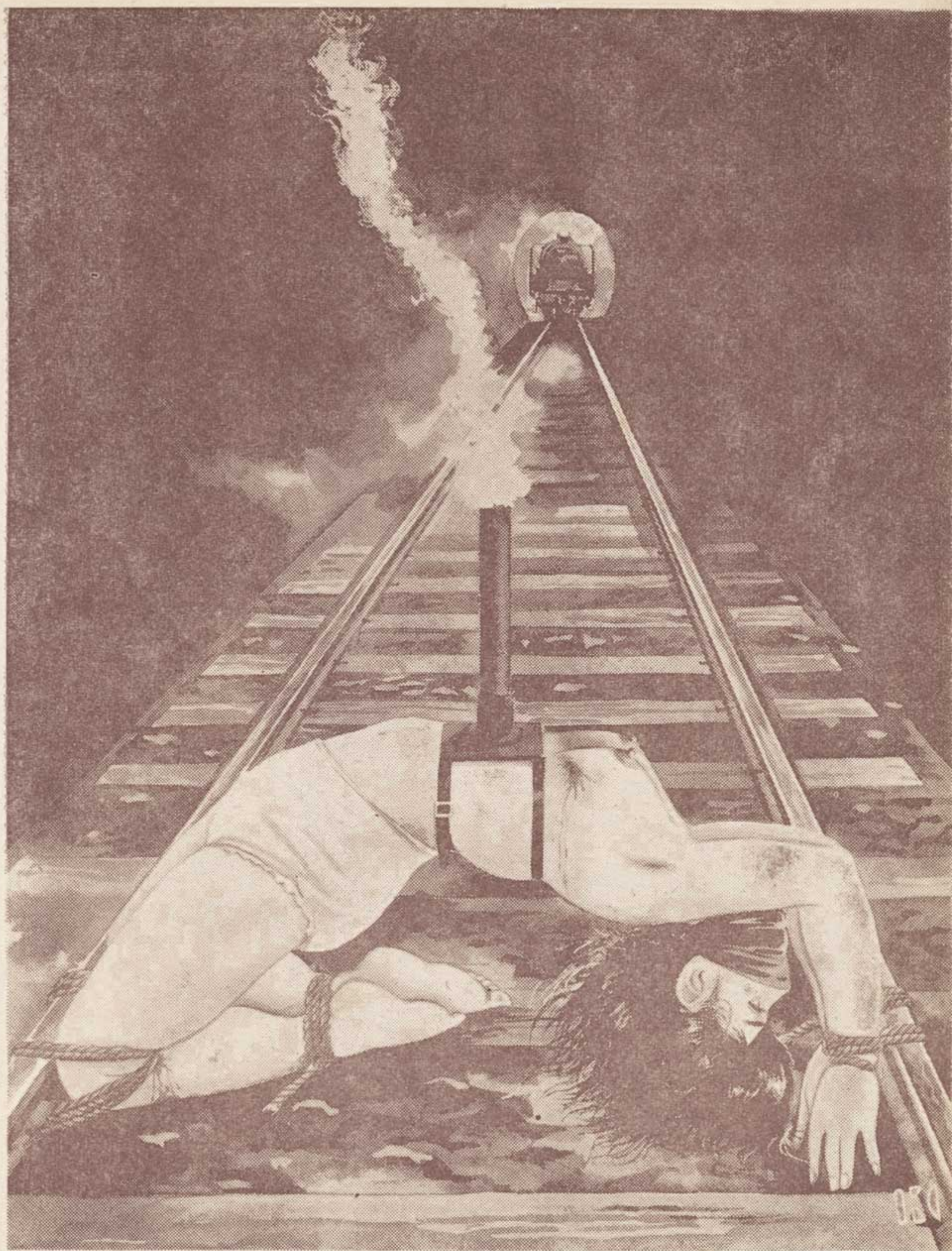
<雪責め>さかさ吊りで雪につけたハダカの上半身が 冷感と痛感をよぶ 江馬美久・え



利



＜クサリ拘束＞橋の下の狭い場所で クサリと鉄カセと顔をおおう嵌口具責め 小田利美・え



＜線路しばり＞汽車がせまる 発煙筒が白煙をふく 危機は刻一刻と近づく 木暮元一郎・え

譚奇俗風

1961年・1月号

特集

ソドミアとレスボス

男が女を愛し、女が男を愛するのはノーマルだが、男が男を愛し、女が女を愛することはアブノーマルだという。果たして、そうであろうか？ それはまた、反道徳なのだろうか？

ウーパールニングについて

奥村世紀男

生殖に役立たない性欲

人間は、正常な環境では、性的成熟期にはいって、はじめて性欲と愛が生じる。そして、性欲は肉体的であり、愛は精神的であるとする説もあるが、これはまだ、たぶん疑問を残す問題となっている。だが、これは、その基底において、異性に対する欲望という点を見落としてはなるまい。したがって、正常な状態では、男性は、その性欲や愛によって女性に魅力を感じ、女性は、同じように男性に魅惑を覚えるものである。

だが、一方では、男性でありながら男に、女性でありながら女に、つまり同性に欲望を感じる性向をもった人たちが、意外に多くいることは否定できない。

そういった人たちを、異性愛性欲、つまりヘテロセクシュアルな性欲に対して、同性愛性欲つまりホモセクシュアルな性欲をもつものと、ふつう言っている。

クラフト・エービングは、これを「倒錯 (Perversion)」とよび、自然の目的つまり生殖に役立たない性欲という意味をもたせている。だが、倒錯とは、そうした性欲、あるいはほかの誘因、たとえば犯罪の意図を喚起するかどうかということとは無関係であるのが本来で、そうなることは、おのずから問題を別にしなければなるまい。そうなれば、それが、生殖に役立たないというだけで、ホモセクシュアルな性欲を、反社会的と見るのは早計の感をまぬかれまい。

ペデラストとウールニング

ペデラストということばがある。同性愛性欲をもった男たちのことをいうのである。だが、これは、ギリシャ語からきたもので、本来は、少年愛好者ということである。古代ギリシャでは、ふつう、性行為があるかないかによって、少年愛好者あるいは青年愛好者とよばれたのである。

したがって、ペダステイとは、男性間の性行為の一つの方法つまり鶏姦をいうのであり、ペデラストとは、そうした人々のグループすなわち鶏姦するものたちを指すのである。

だから、ペデラストということばによって、同性愛性欲者を代表

させることは、少々冒険でありすぎる。

それに対して、最近では、ウールニングということばが、よく使われている。これは、ハノーバーの陪席判事ウルリヒスによって取り入れられ、クラフト・エービングなども、よく用いている。

この「ウールニング」ということばは、プラトンの「饗宴」のなかに見られるウラノスからきているもので、その文章のだいたいを次に挙げてみよう。

——エロスを離れてアフロディアはない。しかし、この女神はふたりで、年上のオフロディアは、母がなくて生まれたウラノスの娘なので、われわれは彼女にウラニア（天の娘という意味）という異名を与えた。もうひとりの、年下のアフロディアは、ゼウスとディオネの娘で、彼女にはパンデモス（万人向きという意味）と名づける。それで、前者のエロスはウラノスでなければならず、後者のエロスはパンデモスと名づけられる。

パンデモスのエロスの愛は、ふつうの人間を愛する愛であるが、これに反して、ウラニアのエロスは、人間のうちの女性的な面を選ばないで、ただ男性的な面を選ぶ。これは、少年に対する愛である。それで、この愛によって鼓舞された者は、男性に心を向けるのである。——

この章句をみれば、ウールニングということばが、ウラノスから由来していることは明らかであろう。それだから、これまたウルリヒスの提案によって、男性の同性愛性欲現象をウラニズムと称するようにもなったのである。

だが、わが国では、この原意をかえて、ペデラストを同性愛の男役、ウールニングを女役の意に用いているようだ。



動物にも同性愛はある

男性の同性愛者は、美しい女性に対して、その美しさを認めたとしても、性的リビドーを感じることは、全然ない。性欲を起こさせるのは、美学的観点から見た美とは、まるっきり違った美であるからである。

ときによって、美しい女性を眺めて心に満足を覚えることがあっても、性器に反応が起これなければ、性感情うんぬんということにはならない。

それでいて、そういう人たちの性器は正常で、ペニスもホーデンも、ふつうの形をもち、機能を示していることが、同性愛者の特色

なのである。

そこで考えられることは、その性器が、ウールニングにおいて、重要な役割をもっているということである。つまり、主として、ほかの男性の性器がウールニングを刺激するだけでなく、ほかの男性を想像することによって、自分自身の性器に起こる反応を感じるのである。

したがって、彼らのあいだでは、単純な愛情といったものは除外され、正常な男女間に感じあうような性欲的なことが、いつも問題となるのである。

それとともに、愛につきもののしつとがよく見られる。真の友情のなかにはしつとというものはつけ入る余地はないのだが、友情を排除するウールニングの場合は、いつもしつとがデンと腰を据えているのである。自分が魅力を感じている相手に対して、不信の目を向けるということは、よく見られるのが、なによりの証拠である。

男の同性愛者は、浮気っぽいということは、よく聞くとところだが、それも、友情で結ばれたものでなく、性欲という肉体的要因に基盤をおく結びつきだということを思えば、納得いくだろう。

裏を返せば、異性間の恋愛の場合と同じように、愛人を独占したいという願望や努力がすべてを支配して、ひょっとするとその愛人を奪うかもしれない第三者を、いつも、猜疑の目で眺めるものだ。

しかも、同性愛の感情は、人間ばかりでなく、動物にも見られると、ラムドールやクラウスがいつている。つまり、犬やサルにもみられるというのだ。ドイツのある同性愛者は、二匹のオス犬が、エジャクレーションするまで、お互いに摩擦しあっているのを見たとき報告している。

ティ・ビューティ

獅々村 裕



ビュー

一、夢

「しじみとしじみをこすりあわせると、すいっちょのようないい音いろがするのよ」

そう言ってフフとわらったのは月美のようだったし、また、星美のようにも思えました。

そのあと蟹助はすぐ、月美と星美がいっしょにフフフフとしのびわらいをする声をきいたように思ったのです。

「こいつら、そうだったのか。人にそだててもらった恩をわすれやがって……」

月美と星美は、ふたりだけの演技に酔っているようだ。互いの目に宿っている愛の光を確かめあうように、はるかなまなざしを送っている。鏡に映しだされた自分のからだに互いに触れあっているようなものである。

蟹助はくやし涙が出てくるのです。すると、もうひとつの声が、きこえてきました。それは、死んだ女の声でした。

「あんたのフトモモって、スバラしいわ。ドラムカンほどもあって、黒い毛がいっぱいはいえて……ああ、もういっぺん生きかえって、あんたの太股をツネってみたいな」

「月美と星美がね。あいつら、けしからんのだ」

蟹助は死んだ女に、にえかえるような胸のうちをきいてもらいたかったのですが、女はそれに答えようとせず、

「もうダメだわ。もうダメだわ」

うたうように言いながら、その声は、しだいに遠ざかってゆくので



した。

二、うつつ

蟹助は、死んだ女のことを思い出していました。

月美と星美にウラぎられたかなしみを、せめてそれでまぎらわしたかったのです。

「ドラムカンのような、あんたのモモツ玉」

女はタメいきまじりに、よく、そう言ったものです。

そして、蟹助がチュウをのんでいるあいだしゅう、蟹助のそばにべったりとくっついて、ふとももをいじったりなんかしています。

蟹助は蟹助で、じぶんのふとももをワザと見せびらかすように露出させ、それを平手でぴしゃぴしゃやりながら、チュウをやるのが好きでした。

そして女に、

「月美や星美も、むこうの部屋から呼んでこい。おれの太股をみせてやるのだ」

「あら、いけない。あの子たちはダメだわ。あの子たちに見せてはいけないのよ」

「おふくろとしていうのか。それともヤツカミか」

「とにかくダメですよ。それより、あたしにも、イッパイちょうだいな」

「月美と星美のぶんまで見るか。よしッ、このあまア!!」

蟹助は、

「野郎!!」

とさけび、いきなり足をあおって女をすっ倒すと、

「やい、どうだ!!」

ドラムカンのような太股の下におさえこんでしまったのです。

「すごいすごい。あたしの胴よりもふといわ」

女は、そうされて喜んでいましたが、そのうち、犬が飼い主におせじをつかうように、首をもたげると、毛でじゃりじゃりしている蟹助の太股に唇をつけ、そこから舌をおしだして、ペロペロなめまわしはじめたのである。

そのなめ方は、トウモロコシを、片っぱしから食べてゆくようにていねいで、のったりのったりあきもせず、すみからすみになたっています。その舌の先は、ビロードかグズもちの肌のようにネチっこくて、よく肌からみつぎ、肉がもってかれそうなくあいでした。

蟹助は、知らん顔をしてなめさせていましたが、どうにもくすぐったくなったとみえ、

「くすぐってえねあ。やめろったら、このあまア!!」

しかし女は、なおさら熱心になり、股のつけ根のあたりまでなめあげてくると、こんどは内側に首をつっこんで、クフン、クフンと鼻をならしたりするのです。

「わっ、くすぐってえ」

蟹助はびっくりかえってしまいましたが、そのはずみに、女の胴を柔道の胴じめみたいに両股ではさみこんでしまいました。

「野郎、おれをくすぐったがらせたバツだ。しめあげてやるから、かくごしろッ」

「アレエ」

悲鳴をあげたが、容赦はするものか。

くうっ、としめあげた。

「げえーっ」

しかし、ちょっとゆるめると、女は、あかんべえをするように目の玉を上にあげたまま、赤い舌をペロリと出してみせる。

「この野郎」

また、くいーっ、としめる。

「あっ、あれーっ、かんにんして、あたし、そそうしちゃうわ」

死にそうな声を出す。そのくせ、ゆるめるとまたあかんべえです。

おもしろがって、そんなことをくりかえしているうちに、蟹助はいくらか疲れたので、女を両股ではさんだまま、

「あーあ」

と、上体を畳に投げたが、そのとき、ちょっと股の力がゆるんだとみえて、女は、

「あっ」

というまに、からだを下のほうにズラせると、蟹助の股間をおそったのです。

「あっ、なにしやがるんだ」

さげんだときは、もうおそかったのです。

背筋から脳天へかけて、ずんときた。

蟹助は夢中で空をけて上体をタッとおこすと、イソギンチャクのように彼のからだに吸いついている女の頭を、うしろ髪をひつつかで、グイ、とひきはなしたのです。

女の顔は涙と鼻汁と唾液でぐしゃぐしゃにぬれていました。そうされても、まだ口をパクパクやっています。

蟹助は、人さしゆびと親ゆびで輪をつくると、女の鼻の頭を思いき

りピンとはじいてやったのです。

女は顔をひんまげ、きつくとじたその目からは、またあたらしい涙がポロポロとあふれだしましたが、それでも必死に忠誠をちかうふせいで、森の石松のように片目をあけると、ニッコリわらいかけるのです。その鼻の穴からちようちんが一つ出て、ふくらんだところでパチンとわれたのが、あわれでした。

そして、あるときのことです。

そんなわるふざけのあげく、蟹助はとうとう女を死なせてしまったのです。

例によって、女の首を股ではさんだまま、

「そら、気つけグスリだッ」

コップに半分ほど残っていたチュウを、いきなり女の口を割って、つぎこんだのです。

ガチガチと歯がコップのフチにふれる音がして、液体はみるみる吸いこまれてしまったが、それは刃物のように、まっしぐらに女の気管をおそったのでした。なにしろ、首をしめつけられ、胴はねじ曲がったままの不自然な姿勢のままそうなったのだから、たまったものではありません。

「カーッ、カッカッカッ」

せきこむと見るまに、七転八倒のことばそのままのくるしみで、医者と呼びにかけつけるまもなく、女は悶死してしまったのです。

それに、蟹助としては、医者と呼びにゆこうにも、女が必死の力でしがみついてくるので、身動きもできなかったのです。にぎりしめた女の指のあいだには、いつむしりといったのか、蟹助の太股の毛が七、八本、しっかりとにぎられていました。

三、十三 膝小僧

「おかあさんが死んだ。おかあさんが死んじゃった」

と言って、月美と星美は泣きました。

キッチンと両膝小僧をそろえ、両手を目のところへあてて泣いているところは、いかにも氣だてのよい姉妹のようでした。そのとき、ふたりとも十三でした。

しかし、蟹助がよく見てみると、ふたりとも目に手をあててオイオイ声を出してはいますが、涙なんかちっとも出てはいなかったのです。泣きまねをしていたのです。

「こいつら、よくもこうしらじらしいまねができるもんだ」

蟹助は、空おそろしいように思いました。そして、スカートからハミ出しているふたりの膝小僧が、いつのまにかすっかり肉づきがよくなっているのを見て、

「あっ」

と声を出さんばかりにおどろいてしまったのです。

蟹助は、まだ戦争がはげしかったじぶん、防空壕の中で、ふたりの女の子をひろったのです。

ふたりは、いっしょにいたわけではありません。蟹助は、べつべつのところで、ふたりをひろったのですが、それがおなじ一日のできごとだったというのは、なにかの偶然だったでしょう。

「なんて日だろう。ふたりも女の子をひろうなんて」

蟹助は、ふたりの手をひいてあるきながら、そう思ったものです。しかし、それが愛らしい女の子ということ、なんとなく将来につながるなめかしい幻想がふくらんできたのは、やはり蟹助という男は異常だったのかも知れません。

蟹助は、両方の手に女の子の手をひいて、焼け跡から焼け跡をあるいていましたが、どうかしたはずみに、女の子のちいさな手やその指が、蟹助の手のひらのなかでピクッ、ピクッとうごくのでした。そして、汗ばんだまま、ねっとりからみついてくるように感じられるのです。すると蟹助は、成熟した女からなかなめかしいことを誘いかけられでもしたように、思わずギクリとして立ち止まるのでした。

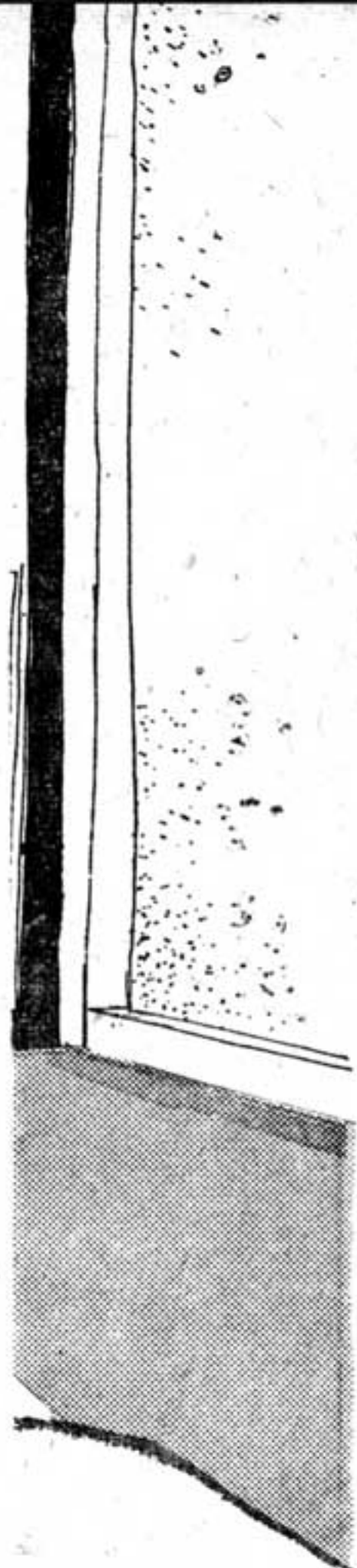
「あれから十年ちかかったが、はやいものだな」

彼は、女が死んだ空虚さの中で、ひとり寝床に横たわりながら、月美と星美の膝小僧を思いだしてみた。月美と星美というのも、彼があとで、ふたりにつけてやった名前なのです。

「こりゃあ、うっかりできないぞ」

蟹助はなんとなく、そんな気がしてきました。

ふたりがゼツタイに彼にそむかないよう、また、ふたりを彼の好みの女に育てあげるよう、しっかり仕込む必要があるとかがえたのです。





いまなら、肉体も精神もあるていとやわらかいから、かなり思いきったことができるかもしれない。そして、その晩、彼はねむらずにかんがえたあげく、ある一つの方法を考えついたのです。

「よしっ」

と彼は、思わず声に出して叫びました。

四、くさくてみにくいもの

蟹助の教育がはじまりました。

「女というものは、いやしく、けがらわしく、そしてあらゆる点で劣っているということ、少女のうち、からしっかり頭にたたきこまなければならぬ。それには……」

彼には一つの発想がありました。

まず月美と星美に、女の肉体のもっている劣性、そのおぞましき、といったものを、即物教育で思い知らせる必要があったのです。

「どうして、それをおしえようか」

そこで彼が思いついたのは、彼女たちに、アクロバットのよう、ある基本的な体型を仕込むことだったのです。

まず仰臥させる。それから、足をそろえて高くあげさせる。つづいて、上げた足を、ぐっと上体のほうへ深く折り曲げ、要するにエビのような深い角度で、からだをふたつに折りたたむ練習をさせるのです。からだのやわらかいふたりの少女にとっては、それはそうむずかしいことではありませんでした。しまいには、まるで開いた本をとじるように、上体と下肢がぴたり密着するようになったし、そのバリエーションで、股をひらいてそのなかへ首を深く曲げこんだり、その逆に、からだを弓なりに背中の中へへらせ、倒立したまま、そりにそって、ついに両足が床へつく。そのあいだから顔を出す。軟体動物のようなアクロバットのあれもできるようなになったのです。

蟹助は、二人にそんな奇妙なかつこうをさせたまま、

「いいか、たくあんやツケモノはおもしろがっているほど、おいしい味が出てくるものなのだ。おまえたちも、百万べんもこの体操をやるがいいのだ」

そんな訓辞のようなことを言うのです。

月美と星美は、股のあいだから顔を出して倒立した奇形的な姿勢のまま、それをだまっていっているのです。

こうした奇妙な体位を、蟹助が月美と星美に要求するのは、いま言ったことのほかに、もう一つの目的があるのです。

彼はそれによって、女の肉体の暗いにおいのみなもととなっている個所を思いしらせ、女として生きてゆく以上、どうしても、その暗いにおいから脱けだすことはできないのだということを、少女たちに知らせて、完全な屈伏と忍従の精神を、そこからみちびき出そうとして

いたのでした。

「いいか。この姿勢をわすれるなよ。これによって、おまえたちはじぶんのからだのしくみを知り、くさくてみにくいものが自分そのものだということを、ハッキリ心にきざみこむのだぞ。わかったな」

それはまさに、蟹助らしい教育のやり方でした。そして少女たちは、毎朝の日課として、このアクロバットをやらされ、じぶんたちが雌性という劣性からどうしても脱けだしきれないあわれなきものであることを確認したうえで、

「いただきます」

といって、朝げのはしをとるのでした。

五、就寝儀式

なかんずく奇妙なのは、蟹助がまいばんのように彼女たちにしている、一種の就寝儀式ともいうべき風変わりな奉仕でした。それは、まいばん寸分のくもらない順序で行なわれるので、それが終わりにちかづくころは、ふたりの少女も、そして蟹助じしんも、一種の条件反射の作用から、はげしい睡魔におそわれ、一直線にねむりのなかに落ちてゆくのがつねだったのです。

その、就寝儀式のプログラムはこうです。

まず、蟹助が半裸体で、シーツの上に仰臥します。死んだ女が、毛の生えたドラムカンのようなと言う太股が大きくひろげられ、八の字に投げだされています。それを、天井あたりから俯瞰した光景として想像してみると、いっそうのこと壮観です。

やがて、両手にちょうす鉢のようなものをささげたふたりの少女が

しずしずとあらわれ、それぞれ蟹助の足もとにひざまずく。月美は右、星美は左というぐあい、ちゃんと、うけもちがきまっているのです。

蟹助がきもちよさそうにタメ息をつき、なにかムニャムニャと言葉にもならないようなことをつぶやくと、それを合図あひすのように、ふたりの少女は、蟹助の足の上に上体をかがめるようにして、ある作業をはじめめるのです。

それは、水虫の治療なのでした。

彼の水虫は、かなりひどいので、足の指股をひらくと、白く皮膚のうじゃじゃけた患部が露出して、そこからムツと、独得の、鼻を刺すようなにおいがたちのぼってくる。少女たちは、その指股のひとつひとつをひらいて、治療をほどこすのです。

「どんなぐあいかな、きょうは……」

ふたりの指が、足指にふれると、蟹助は天井を向いたまま、たずねます。

するとふたりは、指股のぐじゃぐじゃした部分をピンセットのさきでつついたり、そこへ鼻をちかづけてクンクンにおいをかいだりしながら、

「きょうはとてもひどい」

とか、

「きょうはよほどいい」

などと、それぞれの所見をのべるのでした。

治療というよりも、それはもう多分に儀式化しているので、たっぷりと時間をかけて行なわれるのがつねでした。早い話が、蟹助が足指をいじらせながら、スヤスヤと寝息をたてはじめるまで、つづける必

要があったのです。

しかし、そこはよくしたもので、はじめてから二十分もたつころになると、蟹助は、きまったようにねむくなるのです。

すると、ふたりの少女も、ぐうっと何かにひきこまれるようなねむけにおそわれ、蟹助の足指に手をふれたまま、コックリコックリとはじめめるのです。

まったく正確な条件反射の作用が三人をとらえ、ねむりのなかにつれこむのでした。

それでもふたりの少女は、蟹助の足にひたいをぶっつけそうになったり、水虫の部分の刺すような臭気でハッと正気づいたりするのでした。そして、そんなとき、ふたりの少女は、もうすっかりスヤスヤと寝息をたてている蟹助にむかって、脚本でも朗読するような機械的な調子で、次のようにくりかえすのでした。

「おゆるしてください。あたしたち少女は、いやしい、けがれた、ひくいものです。それではおやすみなさい」

六、二つの命がふれあった

月美がおねえさま、星美がいもうと、というような秩序が、いつかふたりのあいだでもできあがっていました。

ふたりは学校にも出されなかったもので、それほど世間のことは知りませんでした。それでも、年齢にふさわしいチエは、ひとりで身につけていました。ふたりとも、十五歳になっていたのです。

おもしろいのは、ふたりが、じぶんたちのからだの秘密を知った、その経路でした。

じぶんでじぶんのからだをいじったのではなかったのです。相手がもっている、じぶんとおなじ部分に触れてみた、それは同時に触れられることでもあったのです。そして、びっくりしたのです。鏡に映しだされたじぶんのからだに触れてみるようなものでしたが、鏡とちがうことは、それによって、からだのいろんな部分に、ある、たしかに感覚がよびさまされ、あつい血がよびさまされることだったのです。

ふたりに、そうした、あたえ、あたえられる感覚のよろこびをおしえた最初の器官は、乳房だったのです。

ふたりの乳房は、まったく同じような形、そしておなじ発育状態をしめしていました。しじゅう蟹助の監視の下におかれているふたりも、寝室でだけは、ふたりだけの自由がありました。その自由をたのしむように、ふたりは上半身をムキだしにしたまま、むかいあって寝ていましたが、ある夜、ふとしたはずみに、おたがいの胸のかたい果実に指をふれあってみたのです。

まったくおなじ形をしている、ということが、そんな親近感をさそったのでした。

そのかたい、クリクリした感触をたしかめあったふたりは、「ウフフ」

首をすくめて、おし殺したようなわらい声をもらしました。ちよっと触れ合っただけで、すぐ手をはなし、じぶんの胸をだきしめるようなしぐさをしました。

しかし、相手の指先によって知らされたその異様な感覚は、ふたりがかつて経験したことのないものでした。それは、本能的な罪のかんじをもってはいたが、つづいて二人をおなじ行為にかりたてずにはお

かない、つよい、しびれるような索引力をもっていたのです。

いったんひっこめられた手が、また、そろそろと相手の胸にむかって動きはじめます。それは、二つの地点を同一時刻に出発し、やはり同じ時刻に相手の出発点に到着することを申し合わせた二つの隊商のようでした。

手はゆっくりと、少しずつ、シーツの上をうごいてゆきます。それは、一瞬の誤差もゆるさない正確さで、同時に相手にタッチ・インするのでなければならなかったのです。

ふたりは少しずつ手を動かしながら、じーっと枕に頬をおしあてたまま、まばたきもせず目と目を見合っていました。そして、一センチ、二センチと、指先がちかづいてくるにつれ、おのずと呼吸がたかまってくるのです。

「あ」

ふたり同時にちいさくさけんで、まるで土踏まずに五寸釘を踏みぬいたように、グッと上体を硬直させました。触れあい、そしてより強く触れたのです。

「ムフフ」

という、ウメキ声ともつかない声が、ふたりの唇からもれたのは、それからしばらくしてからのことでした。

しかし、二人の触れあいは、そうながくはつづきませんでした。くうーっ、ともみあげる感覚の頂点で息がつまりそうになり、たがいに振りきるように、相手の胸をつきはなしていたのです。全身がワッとさけび出しそうになって、とても、触れあっている状態にたえられなくなっただけでした。

そんなことをなんとかくりかえしているうちに、二人の官能はだん

だんだん大胆になり、目はギラギラともえてきたのです。そして、なんど目かのとき、二人はキリキリともみあげる陶酔のクライマックスで、わっとなげんでたがいの胸をつきはなすかわりに、

「おねえさま!!」

「星美ちゃん!!」

乳房と乳房を、音を立ててはげしく打ちつけあっていたのです。

七、蜜のサカズキはのまれた

いったんセキを切った官能の奔流は、もはや制止しようもありませんでした。

ふたりは、たがいに乳房をおしあてがい、もみあうようにしていましたが、もっとひとつに溶けあいたいはげしい希求にかりたてられ、いつか唇と唇、歯と歯、舌と舌を夢中でからみあっているのです。誰におしえられていたのではなく、いまはそうせずにはいられたかったのです。

とはいいながら、それはお世辞にもグット・リファインされたキッスとは言えませんでした。だって、星美ったら、まるでアゴがはずれたみたいに、

「ウワオ」

なんてヘンな声をだして口をおしひらき、おねえさまにしがみつくんですもの。

おねえさまの月美は月美で、おなじように口をひらいたまま、そこにおしつけたのですが、もっとうまいカラミあいをしようにしながらも、唇や舌はやたらにすべったりコロンだりして、ときどき、スポッ

とぶざまな音をたてては、すっこぬけたりするのです。

だけど、おたがいに後頭に手をあてがい、夢中でひきつけあっているうちに、とうとう唇と唇が、うまくからんだようでした。そして、おたがいの内臓がひっぱり出されそうになるほどよく吸いあい、その部分を通じて感触された粘膜のなまあったかいかんじは、まるで甘ずっぱいクダモノのようであり、全身的に拡大されてゆくのです。

そして、からだのおくふかいところからしほり出されたツバが、おどろくほど多量に相手の口腔のなかへ流しこまれ、いまやふたりは、ツバをのみあうことによって、火と燃える一体となったのです。ツバはあふれて、ふたりのホオやアゴをぬらし、白い糸をひいて粘着するのです。

「星美!!」

「おねえさま!!」

そうしながらも、ふたりは熱にうかされたようにウス目をあけて、くるおしく相手をみつめあいます。こんな美しいもの、こんなすばらしい相手、まったくおなじ姿かたちをもち、蟹助に強要される女という暗い宿命をもったものでありながら、こんなにもスバラしいよろこびをあたえてくれるものを、どうしていままで知りあおうとしなかったのでしょうか。

気がつく、ふたりの足はすでに夜具をけって、もつれた四本のナワのようにキリキリとからみあわされており、おたがいの内股の感触と熱が相乗作用をおこして、火のようにあつくなっていました。そして、もっと強くいっしょになろうとして、はずかしい力をこめあっていたのです。羞恥は完全にけとばされていました。そして、いまこそ蟹助の呪縛はとけ、ふたりは、声を出して泣きたいような、命のかぎ

りの解放感をあじわうのでした。

八、二人は消えた蟹助の前から

そのことがあってから、ふたりの肉体はまったく二つのものでありながら、いつでも一つに溶けあえるようになりました。すきなときに、じぶんの官能を呼ぶようにして、たがいの官能を呼びあい、ひとつのものとして陶醉することができたのでした。

そんな、ふたりのあいだのこまやかな交感、ひとりでに外にじみ出すものがあり、それは蟹助の目にも触れずにはいませんでした。

蟹助が夢のなかで、月美と星美の愛のことばをきき、嫉妬と、それからじぶんの飼育計画が挫折した口惜しさで男なきに泣いたのも、このころのことでした。彼はその夜、さらに夢のつづきで、死んだあの女の頭が、じぶんの股のあいだから、まるで月が昇ったり沈んだりするように出たり入ったりし、メロンのようにつめたい舌で股の内側をなめられるところを見て、思わず両股をしめあげたのですが、むろん、そこに現実には女の頭がはさまっていただけではありません。彼自身の、内股と内股がふれあっただけでした。



しかし、彼は、ナルシスのように、そのことによって陶醉の発作を起こし、そのあたりをつめたくぬらしていました。そして、その尾をひく陶醉のなかで、双頭のヘビのようにからみあう月美と星美の裸身をマザマザと見たのです。

それいらい、蟹助の調教はさらに凶暴なものとなりました。

彼は月美と星美をじぶんの思い通りの従順な動物に育てあげ、そしていつの日かは、死んだ女のように、ふたりをじぶんのたくましく黒毛のはえた太股のトリコにし、その足下にのたうたせたいと思ったのです。しかし、その計画は、いまや挫折したのです。彼は狂気のように調教を強化し、ふたりの性根をたたきなおしたいと思うのでした。

しかし、いままでならとにかく、すでにあまい蜜酒をのんでしまったふたりには、とてもすなおにそれに従うことはできませんでした。蟹助は、必死になって、ふたりに、女体のみにくさ、けがらわしさ、そして地をほうガマのように、すくいようないその生理をたたきこもうとしたのですが、逆にその生理のすばらしさを知ってしまったふたりには、いままでのような調教はなんの意味もありませんでした。それはかえって、男性の横暴といやらしさを思い知らせ、ふたりをひとちかづけあう結果になったのです。

そしてある日、ふたりは、手を取り合ったまま、家を出てしまったのです。

九、四ツんばい蟹助

蟹助は、狂ったように、ふたりのゆくえを捜しもとめて歩きました。



た。一年たち、二年たつが、いぜんとしてわかりません。しかし、あるとき、蟹助は、ふたりらしい一組をついに発見したのです。

それは、浅草のうらの、いかがわしいショウをみせるうちでした。

そして、そのショウを演ずる一組に、蟹助は、マザマザとふたりのおもかげをみたのです。しばらくみないうち、すっかり容姿も変わったふたりは、別人かと思まかうばかりでしたが、長年育てた蟹助にしてみれば、それを見そこなうことはなかったのです。

ふたりは、うす暗い次の間にひしめいている男たちを黙殺して、ふたりだけの演技に酔っているようでした。たがいの目に宿っている愛

の光をたしかめ合うような、はるかな目つきの意味を客たちは知らなかったにちがいありません。それは、男たちに対するふたりの復讐だったのです。

ふたりをそれとみとめた瞬間、蟹助は、

「あっ」

とさけんで、立ち上がっていたようです。

しかし、その異常な行動は、その場所を護衛している若い者たちに発見され、苦もなく外へつれだされてしまったのです。

蟹助は寂しいところにつれていかれると、男たちから袋だたきにあい、地面にのびてしまいました。大きく股をひろげ、ガマのように突っ伏している蟹助からは、もはや、あのニクニクしいような男らしさは失せていたのです。

そのとき、彼をもっと困惑させるできごとが起りました。ひとりの若い男が彼の背後にちかづいたかと思うと、蟹助はとつぜん、えもいわれぬ疼痛で全身をさしつらぬかれたように思いました。

その肉質の凶器がなんであるかを察するまでには、そう長い時間はかかりませんでした。そして蟹助をさしつらぬいたその若い男は言ったのです。

「おれは、オヤジのようなゴツい男をこうするのが好きなんだ。おれの名は山口二矢っていうんだよ」

まわりの男たちがどっと笑いくずれました。

蟹助は、じぶんの男性の誇りがいっぺんにくずれおちたみじみな気持ちで、うんうんとうなりながら、地面の上をのたうちまわるのでした。

ハさしえ・江馬美久V

ニューフォトのセクシードレス

今、評判の当社のおしゃれ下着類各種

(例一)ベビードール型



(例一)

生地……ナイロンオーガ
ンディー
色……赤・黒・ローズ
サイズ……大・中・小
ナイロン透き通りパンテ
ィ付き

¥1,900 (〒100)

(例二)

当社独自のデザインにな
るビキニパンティ

生地……サテン、前レー
ス付き ¥500 (〒30)

(例二)ビキニパンティ



30円同封お申込み次第、各種ドレス・下着類のカタログ及び直接焼付け写真送呈

東京都杉並区大宮前6-412 ニューフォト社洋品部

樹氷の季節

——レスボスの果実をつんで——

有川正子

〈1〉

ほのかに町の灯を映した夜空は白んでみえ、ゆったりと柔らかい雪が降っていた。

公会堂の階段を下りたとき、九時の鐘が、雪で静かになった町の上に流れていた。私は、凍った舗道にうっすらと降り積もった雪を靴先でけりながら歩いていた。

「今夜もいっしょにいていい？」

私は、かたわらの、黒いストールで白い頬を半ばかくしている少女に聞く。少女は立ち止まり、私を見上げてうなずいた。

「じゃ、ヌプリに行こうね」

私は、やさしく笑った。

新しい年を迎えたばかりの夜の町は人通りもたえず、私たちが入った店も相当混雑

していた。壁際に並んですわってからも、私たちはほとんど話さなかった。

私たちはいつもこうなのだ。二人が必要なのは、愚かしいまでに幾度もくり返す愛の誓いだけにすぎない。

私は、シートにおかれた治子の指を握った。ウェイトレスがコーヒーをはこんできたときも、その指をはなさなかった。

彼女は、触れあっている私たちの指をみたくもしたくない。いつか、彼女が、

「あの人たちおかしな関係よ」

と同僚に言っていたということを聞いた。ふと、その時の彼女の、輝いたであろう目の色を思い返していた。

……たしかに私たちはおかしな関係なのだ。私たちは夏に知りあった。白い病舎の

一室で、私たちは愛し始めた。夏の夜明けは早く、そして何よりも美しかった。私たちは、次第に明け方のあかるさに染まっていくなかに空をみていた。夜が明ければ別れなければならなかったのだ、いつまでも黎明の時がつづくことを願っていた。

私の腕のなかで、治子はやさしさのこもった目で私をみた。そして、夜の情熱をひきとめるようにつぶやく。

「もう一度抱いて……」

やがて、朝の早い患者の足音に、治子はするりと私の腕から抜け出て笑っている。「おとなしく寝なさいね、私の患者さん。悪くなってもしらないから」

私は、まだ薄暗く、消毒液のにおいのたちこめている廊下へ出る。治子は朝の処置に忙しくなる。

——午後、検温器を持って治子が入ってくる。まっすぐに私のベッドに。

私の病名は肺炎であり、右胸の痛みはいつまでもとれなかった。そして、毎週調べる血沈は、快方に向かわなかった。

治子の白い指が私の手首をとっている。

検温器とともに小さな紙片が私の手のなかに残る。白衣のすそをやっとつかんで、私

は、治子をひきとめ、小さな握手を送る。室の外に、その靴音が遠ざかるのを、私は耳をすまして聞いていた。やがて、検温器を集めにきたのは、夜勤の看護婦にかわっていた。

へ2

夕暮れを涼む患者たちが、浴衣がけで向かいの病棟から出てきた。小さな子供たちが大声で窓の下を通りすぎる。病棟から続いている治子の寄宿舎に行くため私は、七時を過ぎてから、病室をでた。

暗い、あけ放された窓から、夜気と月の光がしのびこむ。レコードが鳴っている。私たちは淡い光のなかでみつめあう。私の腕のなかに投げ出される少女の軽い身体、そして長い接吻、私はびったりと寄りそい、治子の胸をまさぐり、無意識のうちにブラウスのホックに手をかける。

だが、治子は、私のその手をおしもどした。ふと、みじめさが私を涙ぐませ、抱いていた治子の身体をはなした。

治子は、悲しげに目を落としてしばらくとまどい、決心するかのように私の手を取り、自分の胸におしつけた。治子の体温と

動気が、私の身体に伝わってくる。私は、その胸に顔を当てた。それから、治子の首筋へ唇をおしあてた。

一瞬、治子は身をすくませ、私の頭を抱えた。それは、私の行為を拒絶したのか強めるためにしたのか、判断できなかった。

治子は、細い指で私の髪の毛を神経質にまさぐり、私が齒をたてるたびに、その指先が止まり、肩をふるわせるのだった。私は、そりあとの堅い治子の首筋に唇を当てることをやめなかった。

私たちの愛撫はいつも、月の光かランプの灯のもとで行なわれたが、治子は真夏の日の光のなかで私の胸をみたと告白した。「先生といっしょに検診にまわったときみたの。ゆるして……」

「あんたもみせなくては……」

「いや。みてはいや」

「どうしていやなの」

治子は、その夜、幾度かのためらいのち、ほの暗い灯影のもとで、ほんの一瞬、白い美しい胸を私にみせた。そして治子は、激しく私の夜着をはぎ取った。

私は狼狽のため、小さい声をあげた。治子がこんな動作をするというのか……。

私たちは、初めて裸のまま抱き合った。

へ3

どこかで間違っていると、私は思った。

軽い後悔と痛みが、次第に広がって、私は暗く燃える二人の宿命を憎んだ。危険で孤独な私たちの間柄は、夏の終わりから急速に現実味を帯びてきた。私は、褐色の落葉がススキで細くなった野道を一面に埋めるころ退院したからだ。

見送りにてた夜勤の看護婦と話をしていると、寄宿舎につづく薄暗い廊下に、治子を認めた。私は、苦しさのために、そのほうに背を向けた。木枯らしの夜の退院は、私にふさわしいのかも知れない。

私は、自動車に乗り、すでに点灯されている病棟と寄宿舎の窓を見上げた。二階の端の治子の部屋からも、淡いオレンジ色の光がこぼれていた。

私は、治子の部屋に通じる広い階段を思い出した。それは、ひそやかな私の過去につながる階段であり、そして、この階段を駆け登るのは私一人でなければならない。

私たちが夏の夕暮れにひとときをすごした白いベンチが、落葉に埋もれて池の端に



あった。何度かいっしょに、暮れていく町をみていた、あのしあわせは、木枯らしのなかのベンチとは遠いものであった。

私は、白い大きな建物から離れることのほうに胸が痛んだ。白い建物——それが治子そのものだったからだ。それ以外の治子を想像できたらうか。

そして夏のような日々を求めることは、もう出来なかった。いまはもう、雪の季節

だったから。

へ4

二人の靴の下で堅い音を立てる舗道は、寂しく冷たかった。町と境の山ぞいの峠は、私たちの別れの場所だった。町を出て治子は、私をその峠まで送った。

自動車のヘッドライトが峠下の曲がりくねった道から登ってきた。私たちはそのと

き、そのあかりに照らされる雪と、氷で凍ったまわりの木々をみるのだった。

その輪がだんだん強くなるとき、氷の花はいっせいにそのなかできらめき、木々をそよがせた。すべての世界は、二人から遠ざかり、ヘッドライトに照らし出される灰色の雪の群れと樹氷の木々だけが、私たちの存在のなかの自然だった。そして、この孤独に満ちた季節は美しく厳しかった。

透明な空気は、すぐ細かい粉雪に乳白色に変貌させられる。この季節が、私たちをとらえたのは、静寂さと、疎外された安らぎと、その美しさだった。

その世界に入るためには、なんらかの犠牲が必要だった。たとえば、激しい心の痛みとか孤独とか、そういったものが……。私たちは、峠でも別れることができなかった。終バスはすでになく、町のさわめきも、ここまではとどかなかった。病院まで治子を送るはずだったが、治子は私からはなれなかった。

私たちは、雪明かりであかるい雪道のまんなかで立ち止まり、抱擁した。白みかけている林は静かで、かすかに天塩川の流れがひびき、雪道は限りなくつづいていった。

私たちは、原木をきる農夫が入る細い山道にふみ入っていた。

「帰らなくていいの？」

私は、恐れと興奮のために震える語尾を隠すために、ほほえんでみせた。

私たちは、降りしきる雪の中で激しく抱き合った。大粒の雪が、私たちの頭や肩を打ち、降り積もった。

二人は、お互いの愛が周囲を犠牲にし、そのカセのなかに個性を埋没し、生活を破壊していく現実をみた。

私たちは、新たに出発しなければならなかった。それは、樹氷の山道にふみ入ったときにきまった。私たちは、不滅の愛など信じられなかった。だから、新たに生きることも、このまま消滅するほうが容易に思えた。その誘惑は、強く私をとらえた。私は、怠惰のためにさらけでる醜い敗北をおそれていた。

寒さは痛みとなり、やがて感覚が麻痺しだした。白夜だった。氷の花の重なっている樹間に、二人は横たわった。祝福されない恋を無にするために……。

幹だけになった落葉樹やカエデの先端から、白くばさばさになった美しい樹氷の花

が、二人の上に積み重なり、やがて地上の苦しきから脱して、北国の夜をたいぎそうに走りぬける上り列車の汽笛をききながら、明けゆく冬の空の淡青色のなかに、私たちの無限の愛が飛翔していくのを、私と治子はみていた。

翌日、別々に病院に運ばれた治子と私は、それから会っていない。以前の生活は、雪のなかで無理にたちきらせたが、そのことが、二人の恐れていた醜い敗北の姿であったか、再生への痛みであったか、私にはもう思考する勇氣は失せていた。

〈5〉

私には、治子に告白しなかった、もう一つの思い出があった。それもまた、夏のことだった。治子のいる病院を退院して、治子と思うように会えない日々を送っていたころのことであった。

踊りの輪の外には、浴衣がけの家族が多かった。明滅するやぐらの上の灯が、黒々とつづく校庭のわきの森を照らしていた。

太鼓と村人の盆踊り歌は、時が立つにつれて高まり、誰もがこの晩夏の宵を楽しみ、

深く味わっているようにみえた。

私には、やはり、この素朴な情景と、粗野な盆踊り歌が必要だった。

それからもう一つの理由——私は、夕暮れに乗った汽車のなかで、東京の女学生だという女性と隣り合わせになり、北海道の素朴な雰囲気に触れることが目的だときかされた。私は、自分が村に行くということとを告げると、自分も行きたいものだ、その人はいった。私は、バスの時刻をみせ、電話番号を教えた。

期待していたことが始まりかけるような予感がした。人々のなかに私を見いだした彼女は、何度も私をみかえしたのち、やっとなにに微笑した。その表情は、この人を少女のように可憐にみせた。私たちは、しばらく輪の外で、踊りをみていた。彼女が、ときどき放心したように、踊りから目をそらせ、黒い林に見入るのをいぶかしんだ。

「あの森に何かみえますか」

「え？わかってしまったんですか。仕方ないわ。白状します。わたし、あの森に入ってみたんです」

「夜なのに、どうして？」

「ここにきて踊りをみているうちに、そう

「う気がしてきたんです。どういったらい
いかしら、木にさわってみたいんです」

「いいですよ。案内します」

「あの森にひかれたように、あなたにもひ
かれたんですわ」

「あなたは森をじかに触れたいとおっしゃ
る。私もふと、そういう気がしたからで
す。そばにいますと、それほどに親密になら
なくなるんですよ。木々にしても、人にし
ても……。気をつけて、足もとに……」

「ええ……すばらしいわ、草や木のおい
がぶんぶんするわ。ぬれているのね、夜露
なのね」

「洋服につくとぬれて重たくなりますよ」

「ねえ、ゆめみたいよ。こうして北海道の
森を歩くなんて、夜に!!」

「私も初めてですよ。こんな夜には」

月は中天に昇り、彼女がもたれた大木
は、白ちやけてみえた。

しばらく時が流れた。私は、完全に世界
から疎外された二人を感じた。乱暴に彼女
は、私の上半身を抱いた。その唇は、私の
ひたいに触れ、そして唇に重ねられた。

大木を背に、私たちは、長いあいだ、そ
のままだった。何度も、やさしい接吻がく

りかえされ、私たちは幹をずり下り、芝の
上に横たわった。私の胸から首筋へ、彼女
の顔はおしあてられ、彼女は、くすくす
んと鼻をならして、次第に激しく私を愛撫
しだした。

彼女は、私の上に上体をかぶせたまま、
私の耳もとで話した。

「こら、男の子、汽車のなかでみたときか
らわかってたんだ。わたし、寂しかった。
今夜だけでもいい、うんと愛してね。北海
道の自然のなかですごしたこの夜を、忘れ
ないよ。あなたを……」

「何もいうことはないわ」

「あなたは、愛する人にいわない？ 今夜
のこと。わたしのこと」

「そんな人……わたしにはいない……」

「うそだ……きいたら嫉妬するね」

「人のことを、そうむやみに探索するもの
じゃない……」

「いや、わたしのことだけ考えて……ね」
私たちは、疲れきって草の上に寝そべっ
た。踊りのざわめきはまだつづいていた。
いつはてるともしらず、暗い林のなかにこ
だましてきた。私は、愛の充溢とともに、
むなしさをかみしめていた。それとともに

涙ぐみたいような感傷が、私の胸をよぎっ
た。忘れられた、過ぎた夏への回顧……。

しかし、治子に対して背徳の行為をした
という悔いは、もうよみがえってこなかっ
た。そして、月光のなかで、私のなじんだ
ことのない一人の少女の顔が、蠱惑的に私
をみつめていた。

私は、もう香気を失った夏をとりのぞき
たかっただけだ。

それは、今まで、ぬぐってもぬぐっても
消えない重たさで、私の生活全体を圧して
いた。しかし私は、次第に脱皮していくだ
ろう。私は、かたわらのひとにやさしく微
笑した。北国の夜の森をみたいといい、触
れたいといったその人の願望を、単純だと
私にはいえなかった。私の、消毒液のエー
テルに浸化されたひと夏の思い出は、もう
私自身の手でとりのぞくべきだろう。

北国の冬は早い。晩生の盆がすぎると、
あたりの野一面に秋が立ちはじめ。やが
てくる北国の冬は、私の傷痕など、と思
いにたち切ってしまうにちがいない。

「あしたの汽車は何時？」

私は、森のほの暗い道で彼女に聞いた。
その返事はもう私の耳にとどかなかった。

ほも 禁秘帖

③

その愛術のすべて

かびや・かずひこ

求愛術

ホモ通念の破壊から

私のもとによせられるソドミアの書信のほとんど大半が、愛の相手の得がたいことをなげている。これは、かれらに共通する悩みなのである。

この理由は、異性愛の場合とちがって、たとえば、Aなるホモの男が、自分の知人のBなる男を好みの対象だと思っても、そのBが、おのれと同じホモの性向の人かどうかかわらないという懸念が、Aの心を支配し、とうていプロポーズにふみきれず、遅疑逡巡のまま、思慕の心をおさえてしまう、というところから来ている。

つまりは、大多数のソドミアは、みずからのホモの性向にインフェリオリティ・コンプレックスをも

っているため、同志「かどうかかわらない相手に、自分のその性的嗜好をムザムザと知られたくないからにほかならない。

この点は、私もむりはないと思っている。が、このままでいては、いつまでたっても堂々めぐりで、ソドミアは永久に相手を得られないなげきをくりかえしているほかあるまい。

そこで、私がすすめるとすれば、ソドミアの求愛術は、こうしたソドミアの通念、すなわち、同性愛にたいする劣等感と、ハムレット型優柔不断性の破壊、克服にはじまると思う。

勇気をふるって、思慕の相手に当たってみるのだ。精神分析学者のフリッツ・ウィッテルスもいっているように、「同性愛は高等な愛情である。友情、事業の協力、その他等々、広い意味の同性愛なくし



ては、社会は、存続しえない」というような強い理念をもつて。

こんな例がある――

それは、私の知っている、Fという、ある中年の医師の告白だが、彼がハルピンの病院に勤務していた二十六歳のときのこと、自分の下宿の隣に住むシヨークルという初老のソ連人と知りあいになった。

十一月のある夜、Fは、シヨークル夫妻に招かれて、その家を訪ねた。シヨークルは、ペチカの前の長イスにFとならんですわり、コニャックをすすめながら話をしていたが、夫人が席をたったすきに、いきなり、Fをだきしめると、

「ぼくは前から、とっても君が好きだった」

というや、Fに接吻した。堂々たる、しかも積極的な求愛である。

これにたいして、老人愛的のところのあったFは、シヨークルの愛にこたえ、それ以来、二人は歡をかわすようになったのである。

シヨークルは、前々から、Fがこの道の「同志」であることを、カンでよみとっていたのかもしれない。とすれば、そのカンが適中したわけだ。

がもちろん、こんな例ばかりはない。人間のはかないカンだから、はずれる場合だっても、もちろん多い。ホモと思ったあいてが、いわゆる正常な人だったというケースである。

しかし、そんなときでも、それをもう一押しすれば、「奇跡」があらわれない場合がないでもない。

これも、私のもとにときどき訪ねてくる、ソドミアのある若い商店主Kの告白であるが、二年ほど前の店の定休日に、品川へ海釣りに行ったときのこと、彼は、雇った船の若い船頭に一目惚れしてしまった。

その日はそのまま帰ったが、情熱家のKは、どうしてもその船頭を忘れることができず、次の休日のとき、ふたたび品川に出かけて、船頭に、自分の思慕を打ち明けたのである。

が、船頭は、男同士のいろごとなど自分には理解できないといって、Kの求愛を断わった。しかしKは、あきらめず、二度三度と熱心にかきくどいた。積極的な行動にも出た。すると相手に、応じるような反応が現われて来た。Kは、ここを先途と執拗に（せんどうしつぱう）くいさがった。船頭はついに、Kの熱情的な強烈な求愛の前に降服し、Kの意のままになった。

以来、二人は月に一、二度くらい会っては、交歡しているが、今では船頭はそのことに大きなよろこびをもっているらしいとのことである。

おもうに、なんびともがもつ同性愛的素因が、その船頭の心内にも潜在（かんざい）していて、それがKのあたえた契機（かきげん）によって開眼（かいげん）され、しだいに強められたとみていいだろう。

アルベルト・モルは、「同性愛者にとって、真の



愛の理想は、正常な同性を意中の人にすることだ」という意味のことを言っている。

とするならば、あいてがたとえノルマルなセックスの同性であっても、おそれることなく、堂々と攻撃的求愛ですすんでこそ、ソドミアの理想境がひらけるといふものだろう。

交会態度

——これこそホモ独特のもの——

次に、ソドミアが相手と結ばれ、交情をつづけていくうえに重要なヨコの面、すなわち肉体面について、分析を加えてみよう。

数年前、私は、この国における男子同性愛の実態を調べるために、書信あるいは面接によって知った千余のソドミアのうち、もっとも信頼するに足る人びとに、十項目ほどの調査表を送り、一五五名の回答を得たが、そのなかの「あなたの同性愛傾向は受動的か能動的か」という項目の答えをかけると、

能動的でもあり受動的でもある	五八名
能動的	五四名
受動的	四三名
計	一五五名

となっている。

第一位の能動受動両面的の傾向については、わかりにくい人もあると思うので、説明を加えると、こ

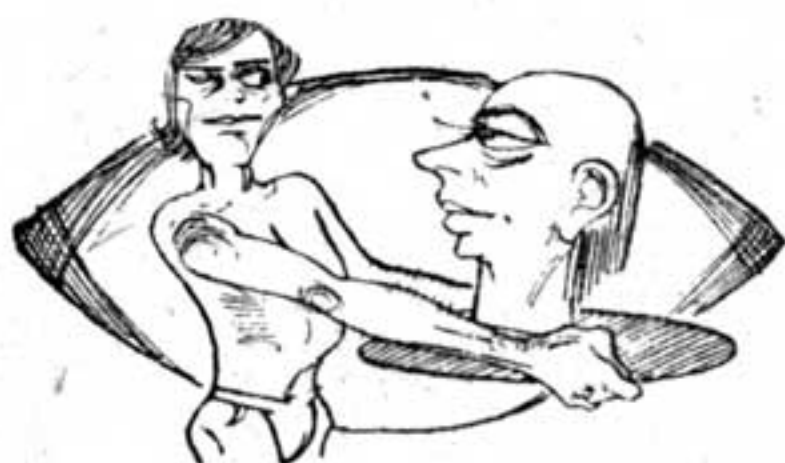
れは、いろいろに分けられ、その一つに「相手によっていずれにも変化する」というのがある。

これは、たとえば、相手が男性的（能動的）である場合には受動的になり、女性的（被動的）である場合は能動的になるというもの。また、年長者にたいしては受動的に、年少者には能動的になるというもので、そのいずれも、前者からは被征服の快を、後者からは征服の快を味得しようという心理であることは、いうまでもない。

その二は、主として交会における場合であるが、「同一相手と相互的に能動受動する」というものだ。この傾向は、戦前にはほとんど見られなかったことで、いわば戦後派的傾向といえよう。そしてまた、これこそが、ヘテロ・セクシュアリティ（異性愛）にはみられない、ホモ独特の交会態度ともいえる。

というのは、男性と女性との交会では、男性は終始能動的態度であり、女性は終始被動的態度を持する。だから、男は攻撃することの快しか知ることができないのだが、同性愛におけるこのような交会態度では、双方が能動被動を兼ねているから、その両者の快を双方ともに味得できる、というわけだ。

が、ここには、わかりやすいように、一方をペデラスト（能動的）のポジションに、他の一方をウーリング（受動的）のポジションとして、説明している。



愛技の一

弄根ということ

「昨年の夏休みの幾日かを鎌倉にすごしていたときのことです。ある日、ぼくは、やはりそこに遊びに来ていた年若い一外人と、文学の話から知りあいになり、その夜、誘われるままに、その外人の泊まっているホテルへ遊びにゆきました。二人はさかんに文学談をたかかわしました。と、そのうちに、その外人は、ソロソロとぼくのほうへ手をのばして来て、ぼくのズボンのジッパーをはずすや、手をさし入れて来たのです……」(二十二歳の大学生の手記から)

ホモにおける交歓は、さいしょ、この弄根からはじまり、また、これがもっとも普遍的に多く行なわれているようである。

それは、あいての Phallus にたいする一方的なそれと、相互的なそれとの二法に大別される。

そしてまた、前者においても、ペデがウールにたいして行なう場合と、その逆の場合とに分かれるが、一般ソドミアのあいだでは、こうした一方的な弄根は、だいたい、さいしょの交会の場合にかぎられ、二度目の交歓あたりからは、相互的弄根へ移行していくようだ。

この愛技の心理は、たがいに愛する者の秘所をおのがたなごころに所有し、あいてを愉悦させている

という快と、自身もあいてから所有され愉樂していることの快と、ルストの度合いが倍加されることである。愛していることの悦びと愛されていることの悦びとが、渾然一体となって融合したものなのだ。

とくに女性的情念の色濃いウールニングにおいては、ペデよりもファルロス・ナイドが強烈なだけに、この愛技における悦びは大きく、かれらの手記とか語る会話のうちに、それが最大級の賛辞でたたえられていることでもうなずかれる。

ペデがウールにたいする弄根は、ペデラストイーとともに、同時にならびおこなわれることもすくない。フランスの詩人ピエール・ド・ヴェランジエーの「艶情詩集」のなかには、同性交歓のそうした場面のさし絵が、いくつか掲げられている。

愛技の二

親愛と情熱の最高表現

弄根に次いで、ソドミアのあいだにかなり多くおこなわれている技法は Fellatio であろう。これは、あいてにたいして親愛と情熱を示す最高の表現といつてよい。

Fellatio はどちらかというと、ウールニングがペデラストにたいして行なう場合のほうが、その反対の場合よりも多い。いうまでもなく、ウールニングにおいては、前項にも述べたように、ファルロスに



たいする愛慕の念が強烈だからである。かれらの愛情は、かかって美しく完成されたファルロスに凝結されているといってよい。

この愛技は、以上のように一方的におこなわれるだけでなく、両者交互に、あるいは同時におこなわれる場合もすくなくない。そして後者の場合は、いわゆる Sixty-nine のポジションでなされる。

こうした Fellatio において、あいてがエジャクレーションする場合、その Same を嚥下することもある。これはソドミアにとっては、あいてにたいする親愛とともに、自身の悦びとなるのである。

愛技の三

A ナイドのあれこれ

男色の風がさかんであった支那でも、古来、これを「尾姦」といい、あるいは「鶏色」と異名したように、往昔における同性愛行為は、ペデラスティすなわち Attia にたいする行為が、代表的なものであったようだ。

が、現今のソドミア——職業的男娼の場合は除いて——のあいだには、後庭にたいする行為はきわめてすくないらしい。私の手もとによせられているたくさんの同性愛者の書信や手記をみても、それは十指に数えるほどしかない。いな、ヒップナイド、アヌスナイドのこともほとんど記されていない。その

大半が、ファルロスナイドに貫かれている。

これはつまりは、P 感覚が「オス」の感覚であるにたいし、A 感覚を「メス」の感覚と見るところから、現今のソドミアは、男のなかに「男」をもとめているといつてよからう。

それと、も一つは、なんびとにも共通するところの Anus にたいする汚穢視、それが、しいて A 行為をさせているというふうにも思える。このようにすくなくペデラスティの例から、一例を拾いあげてみると——

二十五歳のペデ傾向の学生で、その手記によれば、八歳くらいのとき、自分より十も年長の自家(商店)の店員が好きになってしまった。いつもいっしょに寝ていたので、その店員の眠っているスキをうかがっては、子供らしいいたずらをしていたが、ある夜、あいての睡眠中に、その後庭にいたずらし、それが非常に快を覚えた。

成長して、中学、高校と進み、ホモの相手を得たのだが、相互的な弄根ではものたりず、どうしても Attia の魅力に抗しかねて、あいてを誇ってはペデラスティしていた。

「人一倍 A 狂崇癖の強いぼくは、今でも、道ゆく人のなかに、自分の好む男性をみた場合、ほかの人のように、相手の P を考えるのではなく、相手の A を想像して、思わずエキサイトしてしまうのです」



云々と、かれは語っている。

さて、ペデラスティイはふつうペデからウールへおこなう場合が多く、それは Ricken のポジションでなされることが、もっとも多い。

「芳町でだかりあうのは不首尾なり」(筆者注——芳町は江戸時代に男娼屋のあったところ)と古川柳にもあるように、往時の陰間^{かげま}における行為も、一般にこの背後のラーゲが用いられていたらしい。

この心理を分析するならば、A 行為を好むペデラストには、ヒップナイドまたはアヌスナイドの者が多く、一方、ウールニングにはナルシズム的なでん部の展覧性が強いことに由因すると思われる。

一方、中国における相公^{シャンゴン}、現今の日本の男娼、および一部のソドミアのあいだには、ペデラスティイが両者向きあいのポジションでおこなわれる。

この心理は、ソドミアの場合についていえば、互いの表情をうかがうことのできるポジションこそ、法悦感をいや増すという所以^{ゆゑん}でもあろう。

中国の相公^{シャンゴン}は、この場合、絹布などなめらかな布を腰の周辺に巻いておのが P をおおいかくし、相手客にその存在を少しも感じさせないときいている。

が、それは、男娼を女性の代償物として、好奇的にその色を買う者にはよいが、真のソドミアの場合には、そうした偽装はもっとも嫌うところであって、双方の Rute があらわにされていることこそ、望む

ところであるこというまでもない。

次に、Atter にたいする行為として、ペデラスティイのほかにも、ごくすくないが、浣腸に興味をもっている者がある。これも、ペデラスティイの場合と同じく、ペデは相手にたいして浣腸することを好み、ウールは相手からそれをされることに快を覚える。

前記の二十五歳の学生は、この浣腸マニアでもある。かれは、相手を得られないときは、鏡に自分のからだを映しながら、みずからの Atter へ浣腸して、鬱を散じるといっている。

ペデであるかれは、この場合、ペデ的な一人二役を演じているのだ。すなわち、鏡のなかの自分を別人と擬して、鏡の前にすわった自分が、その別の男性にたいして浣腸するという空想のもとに、満足すると解せられる。

また、これと反対に、浣腸されることに興味をもつ者の例では、病院勤務の薬剤師で、二十三歳のウールニングがある。かれのいうところによると、数年前に、通りがかりの二人の外人から略奪されるように自動車に乗せられ、ある家につれていかれて、一人がかれの身体をおさえつけ、他の一人が浣腸器をもって、むりにかれの後庭を攻略してしまった。

そのときの被虐的な快がヤミツキとなって、以来、同性から浣腸されることに興味を覚えるようになったというのである。



愛技の四

弄丸の意義するもの

あまり普遍的にはおこなわれていないが「弄丸」ともいべき Hodensack にたいする愛技がある。

この愛技においては、ウールニングが能動者となり、ペダラストが受動者となることが多いが、その能動者であるウールニングにとっては、第一に、相手ペデの「男性」の根源——Rute 以上に重要な根源を、おのが掌裡に把握している喜び、第二に、相手の生命を扼しているというスリル感、第三には、相手から生命を与えられている、それほどに信頼され愛されているという幸福感等々が大きな心理的刺激となって能動者に快をもたらしと私は思惟する。

一方、受動者にとっては、それとは逆の、おのが生命を「与えている」喜び、「それほどに信頼している」幸福感があるわけである。また、強烈なものではないが、感覚的な快美も伴っている。

以上の分析からみて、この愛技の根本の意義は、Hodensack そのものにあるのではなく、そのなかの Testis すなわち睪丸にあると明言できよう。

愛技の五

その他の二法について

女性においては、乳房は、第二性器といわれている

る。しかし、男性におけるその部位は、なんの快美感もないのがふつうであるが、ウールニング傾向の者のなかには、同性からそこに触れられると、明らかに快美を感じるものがあることを、かれらとの会見やかれの手記などによって、私は知っている。したがって、ホモの交歓においても、きわめて数すくないが、ウールニングの乳部にたいする愛技がおこなわれている。

このようにウールニングは、女性の乳房のようではないが、比較的その部位が豊かに膨張し、乳嘴も大きく長い。その乳嘴に愛撫が行なわれるのである。

能動者すなわちペデが、かれらウールの乳嘴を指頭でもてあそぶ。あるいはそこに接唇する。すると受動者の乳嘴は堅く立ち、興奮するのである。

また、これが他の技法とともに——たとえば、ペダラストーとともに、あるいは弄根とともに、並び行なわれるときは、能動者にとっても快を覚えるわけだ。

次に、これも異性愛の場合と同じような、愛咬、くすぐりその他の愛のテクニクも、ホモの交際のさいに、前戯的におこなわれている。

もちろん、これもペダラストがウールニングにたいして行なうのが大半である。

男性愛好者としても有名な、フランス象徴派の詩人ヴェルレエヌなども、ウールニングである美少年



アルチュル・ラムボオやリュシアン・レティノワとの愛撫行為において、こうした愛咬その他を行なったことが、記録にしろされている。

交 際 法

精神愛を緊密に

以上、男子同性愛における愛技の代表的なものについて述べて来たが、もちろん、こうした肉体的な面にだけ終始してはならない。

同性愛の交際途上において、このようなセックスの行為をヨコの面とすれば、それとともに、タテの面たる精神的愛情が堅くつながれていることが肝要である。それでこそ、真の「同性愛」といえる。

私の知るかぎりにおいて、セックスの行為だけで結ばれたソドミアの交際は、泡沫うぶかたのようにはなくまたたくまに破れている。そして、そのような者は次から次と、セックスの相手をもとめて、彷徨ほうこうしている。それはまさに、町の裏道を、食をもとめてさすらい歩く、浮浪者のかなしいすがたにさも似よう。よき相手と会い得て、その人と長く交際をつづけていこうと望むならば、たがいの精神的愛情を緊密にすべきである。それがあってこそ、両者の愛の交歓も、その悦びが、いっそう倍加されようというものだ。

そして、さらに望むらくは、そうした同性愛の精

神的愛情を善用する、すなわち昇華するのだ。たとえば、古代ギリシャにおける同性愛は、一種の人格形成の手段であった。有益な教育方法でもあった。また、西郷隆盛と僧月照とは、たがいの同性愛を政治のうえに昇華した。

いな、そんな古い例をもちださなくとも、私の知るソドミアのなかにも、同性愛を教育のうえや事業のうえに善用している者が、数は少ないが、見られないことはない。

その一人から寄せられた手記の末尾の一節を掲げて、この稿の結びとしよう。

かれの名をK・Tという。ウールニング傾向の三十二歳の青年、福岡県在住。

「H（筆者注—K・Tのホモの愛人、四十二歳、ペデラスト）はいま事業が成功して、小さいながらも一石炭商会の専務の位置にしております。私も、彼の会社に勤め、彼の望みどおりに、つとめて男性的にして、彼への小乗的な献身を、仕事のほうに転換し、大乘的見地から彼の仕事の補佐を、はりきってやっています。

そして家にあっては、彼は気のむくまま、ときたま私と同床に枕しては、ナイーブな方法で愛撫してくれます。彼は、私に絶対の信頼と愛情をよせておられます。私も彼が女をからかったりしても、今は平気となりました。

著名ソドムの人びと

——近代から現代までの展望——

羽 井 鯨 亭

(1) 外国

——ワイルドからコクトオまで

古来から著名人の男色者、もしくは男色趣味の者はすくなくない。ギリシャの昔でいえば、大哲ソクラテスやプラトン、支那の古代でいえば漢の高祖や唐代の詩人蘇東坡、日本の上古では在原業平、大伴家持などなどの名が挙げられるが、ここにはそういう古い昔のことはおいて、ずっと降った近代から現代における有名男色者、男色趣味者を展望してみよう。

まず洋の西からみるならば、近代におけるホモの代表的人物として、「サロメ」「ドリアン・グレイ」などで知られる耽美派の

作家オスカー・ワイルドがクローズ・アッブされる。

ワイルドには美少年趣味があり、かの下獄の主原因となったクイーンズベリ侯爵の子アルフレッド・ダグラスとの同性愛をはじめ、町の無頼なかずかずの少年たちをも愛していたのである。

つづいては、フランス象徴詩派の始祖ポール・ヴェルレーヌがいる。かれは、同じ象徴主義の年少詩人として知られるアルチュール・ランボオ（『地獄の季節』「よいどれ船」などの作者）と親しむや、妻をも家をもすてて、ランボオと同棲したが、のちにランボオとのあいだに不和を生じて、少年をピストルで傷つけ、監獄に送られた。

二年の刑をおわって出獄後、リュシアン・レティノワという十七歳の美少年と知り、たちまち男色関係におちいった。ヴェルレーヌにとって、同性愛の耽溺は、それ自体の追求でなく、かれの必須な美学的鍛練であり、一種の奇抜なビューリタニズムのあらわれだったのかもしれない。

アンドレ・ジイドが同性愛者であることも、よく人に知られている。かれは、生前から、その作品を通じて公然と自己のホモを告白していた。そのため不当の非難と攻撃を加えられ、ひとの知らない苦しみを味わっていた。

しかも、その死後、かれの全作品は、男子の同性愛を描いているからという理由で、

三島由紀夫(左)とアンドレ・ジイド(右)



ローマ法皇庁から禁書の処分を受け、追放されたのである。

ジイドのホモの傾向は、「自分はペデラストである」とかれ自身告白しているとおり、少年愛好型だ。かれは絶えず、少年の肉体をもとめつけ、七十三歳の高齢になってもなお、十五歳の少年と性的交渉を重ねていたことが、かれの日記にしろされている。

ジイドによれば、心理小説の大作「失われし時を求めて」の作者マルセル・ブルーストも、徹底的な男色家だという。ブルーストは自分の男色をすこしもかくさないどころか、むしろ露出症的に、それを自慢しているふうがあったということだ。

そしてまたブルーストは、「悪の華」の詩人ボードレールもまた、男色家だと確信している。

現代では、同じく、フランスの異才ジャン・ジュネが、すこぶる堂々たる露出症的男色者だ。しかも、かれは男娼だった。乞食で、泥棒でもあった。

そうした背徳、悪徳のうえにデンと腰をすえて、ジュネは、りっぱな同性愛の文学をかいた。

十余年前、当時重罪を犯して、終身囚として刑務所につながれていたジュネは、獄中で、自伝小説ともいうべき「花のノートルダム」「泥棒日記」「バラの奇跡」の三つの長編を書きあげたのである。

このとき、ジャン・コクトオやサルトルなどを先達とした全フランスの文化人が、ジュネ放免の請願書を大統領に提出し、それが成功して特赦令が發布され、ジュネは自由の身となって今日におよんでいる。

そしてそのコクトオもまた、映画俳優ジャン・マレエとの同性愛関係で知られているように、男色趣味濃厚の人である。

そのほか、フランスの映画監督、歌手などには、枚挙にいとまないほど、この傾向の者がいるが、それを語ってはいは長くなるから、次に移ろう。

(2) 日本近代

——よき時代のホモの人たち

日本の近代および現代における著名人の同性愛者をみわたしてみると——

大正六、七年ごろから、昭和初期にかけて、オペラ——といっても本格的なものではなく、浅草式のそれだが——が東都の興

行界を席捲したことがあったが、このオペラの関係者に、男色趣味の者がすくなくなかった。

そのうち有名な人では、演出者の伊庭孝があった。

かれは、政客星亨^{ほしとる}を暗殺した伊庭想太郎の子である。父の血をうけて、狂熱的なところがあり、一座の美少年俳優北村猛夫を熱愛していた。

オペラ界のウールニング型では、北村のほか、テノール歌手の二村定一、舞踊家の沢マセロ（のちに「カオル」と改名）がいた。

そのころ筆者は、ペラゴロとして、またジャーナリストとして、沢マセロと二、三度会ったことがあるが、かれの私生活の会話や態度は、まったく女性的であったことを覚えている。

喜劇の曾我廼家五郎一座に男色がさかんであったことは、知る人ぞ知るである。座長の五郎が、精力的なペデであり、座の女形桃蝶その他がウールであった。

文学者では、ロシア文学者として有名な片上伸が、相当高度な同性愛であることが、文壇スズメのあいだにうわさされてい

た。大正十二、三年ごろのことである。

当時、かれは早大教授であったが、教え子の一美青年を寵愛していたというのである。その教え子は、今はドイツ文学者として有名な人だ。

大正期から昭和初期にかけて、異色のある作品をかいていた綿貫六助が、ちょっと変わったタイプの男色者であった。

軍人出の人で、体軀^{たいく}の堂々としたペデ的風貌^{ふうぼう}ののだが、じつは受け身型のジェロントフィリア（老人愛）だったのである。

しかも、頑丈な体つきの百姓じいじタイプを好み、糟糠^{そうこう}の妻女と離別して、愛人の老爺と同棲するまでの狂熱ぶりであった。そうした自己のマニヤックな同性愛を、かれは、作品のうえに、包むことなく披瀝^{ひれき}している。

こうした点は、さすがに、真実を探索する作家であると、脱帽せざるを得ない。

ペデ型の人としては、菊池寛が多分にこの趣味をもっていたことは事実らしい。かれ自身、随筆かなにかで、自己のそうした傾向を、かれらしく簡単率直にしているように記憶している。

かれが生前、膝下に集まる若い作家や作

家のタマゴを愛していたことも、かれのそうした傾向に基因していたのかもしれない。

菊池寛とともに思いだされる芥川竜之介が、やはり美少年趣味をもっていたことは、前に本誌で記されていたので、省くとして、次にかわったところで、歌人釈超空（折口信夫）が同性愛者であったことは、あまり人は気づいていない。

生涯独身をとおしていたかれが、おのが養嗣子（氏名失念）にたいしてホモ的な熱愛をそいでいたことは、その著「近代悲傷集」における、養嗣子某を悼^{いた}むかずかずの短歌をみれば、はっきりとうかがうことができる。

画家には、ホモ感覚が鈍いのか、昔から男色趣味の人がすくないが、そのごく少数のなかに、ひとところ少年少女雑誌に艶麗な口絵やさし絵をかいて人気のあった高畠華宵がいる。

かれは美少年愛好家で、かれの描く絵は、少年の絵であろうと少女の絵であろうと、すべておのが愛人の美少年をモデルにしたものであったといわれる。

そうしたかれのホモの愛情は、画面にも

にじみでていたのであろう、その当時の少年たちが、華宵描く画中の少年にたいしてホモ的愛慕をかんじたということは、多くの人びとから思い出ばなしとして、よくきくところである。

このほか「槐多の歌へる」の作者である画家村山槐多の少年愛、偉大なる民俗学者南方熊楠のホモ、実業家大倉喜八郎の衆道趣味、新派の女形河合武雄のウールニング愛などなど、その名だけを、つけ加えておこう。

(3) 日本現代

——その男性感覚をみよ

さて現代にとぶと、これはまた多士済々である。

まず作家では。稲垣足穂、今では文壇の起アウトサイダーのようになっているが、ひところは、ハイカラなこのみの、そして変ったテーマの短編をさかんにかいて、異才視されていた人だ。

かれのホモは、少年を対象としたヒップ・フェチズムである。かれのある作品のなかに、半パンツをはいた少年が歩きたびにゆれうごくヒップの線の微妙さを、感覚

的にとらえた詩がさしはさまれていたことを覚えていいる。

この異才、今は京都宇治市の、文字どおりのアバラ家で、仙人のような生活をしていいるということである。

次いでは、三島由紀夫の名を逸してはならない。

「仮面の告白」「禁色」「秘楽」とつきつきに同性愛を主題とした秀作を市場に送り、作家的位置が確定されとともに、男色趣味者としても定評づけられた形のかれである。

なかでももっとも好評を博した「禁色」は、いまだに同性愛、のあいだでは、あたかも、斯道のバイブルのように熱読されている。

かれは「禁色」の主人公悠一のモデル勇ちゃんと、銀座のゲイ・バー「フランスウィック」で知りあった。ふたりの仲は、あきっぱい三島にしては、わりあい長くつづいたらしい。

結婚前のかれは、銀座や新宿のゲイ・バーへよく姿を現わしていた。そして、かなり多くの少年を相手にするが、一回ないし二回の関係で、はなれてしまうということ

である。

学生作家大江健三郎もまた、男色をテーマとした小説をかくことが好みのようだ。筆者の知っているだけでも、「喝采」「芽むしり仔撃ち」「戦いの今日」など、そのほかにまだあるに違いない。

これらの作品のなかで、大江は、男色の心理や生態をかなり適確に描いている。かれが男色者ではなくとも、男色趣味をもっていることは疑うべくもあるまい。

このほか、邱永漢、江戸川乱歩、五味康裕、富田常雄などが、かなり膏肓に入ったホモ趣味家として挙げられる。とくに乱歩の男色文献のコレクションを、尊重すべきものだ。

画壇では、二科の大御所東郷青児と、さし絵の岩田専太郎が、この道の愛好者であるときいているが、これは筆者の「カン」としても、うなずかれるような気がする。

責め絵の画家伊藤晴雨となると「男遊びをほんとうに味得したら、女遊びなどバカらしくてできない」といっているほどの男色の実行家だ。

つぎに、芸能界をながめると、まず歌舞伎界では中村歌右衛門があまりにも有名で

ある。

筆者は、かれがまだ児太郎といった子役時代、先代の歌右衛門とともに、葉山の鍵屋旅館に泊まっていたかれと、偶然に泊まりあわせて会ったことがあるが、そのころ（十三歳）のかれは、旅館の若い娘の乳房を指先ではじいたりなど、なかなか早熟な茶目で、ホモのケなどけぶりにもみえなかった。

ところが、それから数年を経た福助時代には、阪東好太郎（？）に失恋して家出騒ぎを起こしたのをはじめ、つぎつぎとホモの相手をかえて、今では、名実ともに、チピカルなウールニングとなっている。

その歌右衛門の私生活は、ほとんど「女性」だという。

そこまで徹してこそ、はじめて、舞台におけるあの名演技となって現われるのだらう。

この人や片岡我童などは、典型的なそれで、歌舞伎畑には、このほかに、すくなくからぬ同性愛者がいることは、いうまでもない。

歌謡界では、作曲家古賀政男がホモ愛好家として、その名が高い。

かれの初期の作曲で、一世を風靡した「影を慕いて」は、そのころのある夜、かれが新宿だかの街頭で、おのが好みのタイプのひとりの青年を発見し、その影を追いつたことによって、ヒントを得たということである。

歌手では、藤山一郎、高英男などがウル型のホモだときいている。

だが、二、三年前、シスター・ボーイ歌手として人気をわかせた丸山明宏となる、いささか自己展覧的な男色者といつてよからう。

丸山の性傾向については、いろいろにうわさされていて、ある人は、かれを男色女色の二刀流の使い手だといい、ある人は、かれの男色は演技であって、ほんとうは女一本槍なのだともいつていた。

ところが、また一方では、女色こそ演技であって、かれは男色家なのだという人もあった。

いずれにしても、かれがその以前に、池袋の「グレイ」というゲイ・バーでボーイを勤めていたことは、その店のマスターがいつていたのだから事実だろう。

映画界では、なんといつても、よく人に

知られているのは、松竹の名監督木下恵介に第一指を屈する。

かれの「男性感覚」がいかに鋭く、細密であるかは、かれの作る映画をよく観察すれば、瞭然（りょうぜん）する。

いわゆる「木下学校」で育てられた男の俳優には、ホモけのあるものが多いといわれているのも、筆者にはじゅうぶん首肯できるのである。

おわりに、風変わりなところで、落語界であるが、昔から「道楽のさいごは男道楽である」といわれている意味から、女道楽のかぎりをつくしたような者の多い、しかも、すね者の落語家には、男色趣味の者がいないことはない、筆者はかねてから思っていたのであるが、名品桂文楽には、そのにおいが多分にあることを、やがて発見したのである。

彼の場合、その語る落語（はなし）のなかで、また、ラジオの「しろうと寄席」におけるかれの審査ぶりのうちに、それをみいだしたのである。

また翁家さん馬が、斯道の、なみなみならぬ愛好者だときく。好漢、大いに自負すべし。

有名レスビアンレズビアンの群像

真野麗

いずれも男装好み

レスビアン・ラブを実践した著名な女性を挙げるにあたっては、なんといっても、まず、サフォールの名を逸してはならないでしょう。

このギリシャ時代の女流詩人は、いちどは結婚したことがありましたが、夫と死別してからは、自分の広い屋敷を開放して、女性だけの私塾をつくり、そこはまさにレスボスのクラブとなったのです。

彼女の女弟子にも芸術家がすくなくなく、そのひとりに、ピリチスという詩人がいます。このピリチスが、愛人の若い娘の秘所をたたえた詩に、次のようながあります。

そこに泉の水が流れている。

しずくがぼたりぼたりとしたたり、泉はこんこんと湧き出る。

そこにあるこの門は人間への降り道、南にひらく門こそ不死への入り口である。

このように、彼女たちのレスボスは、精神愛だけでなく、肉体愛をも享楽していたのでした。それは、あいての肉体にたいするクニニリングスで、いうところのサッフイズムの語は、ここから生まれたのです。

ちなみに、サフォールもピリチスも、レスボスにおけるM型であったことは、いうまでもありません。

だいたい、女性同愛者は、男性分子Mが多いため、男装あるいは男装に近い服装を好みます。ずっと降って近代をみても、イギリスの女流作家ジョージ・エリオット（サ

イラス・マナー」その他の作者）、フランスの女流作家ジュールジュ・サンド（『魔の沼』『アンジアナ』などの作あり）など、いずれもその容貌、体格、態度がM的であっただけでなく、つねに男装を好んでいたことが知られています。

サンドはまた、同性愛だけでなく、異性愛のほうも可能だったらしく、フランス浪漫派の詩人であり劇作家・小説家でもあるアルフレッド・ミュッセ（詩集『夜の詩篇』戯曲『戯れに恋はすまじ』などの作者）と熱烈な恋をしています。

ミュッセの作と伝えられている艶本「ガミアニ」に、レスボスの肉体的な事柄が随所にえがかれていることも、サンドとの恋愛と思えばあわせると、興味深いものがあります。



左からジョルジュ・サンド、小月冴子、川路竜子

一説に、この小説は、サンドにたいするミュッセの復讐だともいわれています。というのは、一八三四年、ふたりがヴェニスへ旅行したとき、ミュッセは熱病をわずらったのですが、その病中、サンドが、あるイタリア人と通じたというので、ミュッセは愛人をすてました。すてられたサンドはくやしきから「ミュッセは性的不能者だ」といいふらしたので、ミュッセは、その復讐のため、この艶笑小説の主人公ガミアニをもってサンドらしくみせかけようとしたというのです。

乳房と乳房あわせてみたし

日本の昔におけるレスビアンの有名女性を、私は寡聞にして、ほとんど知りません。ただ「後選集」に読人知らずの

いづこにも身をば離れぬ

影しあれば

臥す床ごとに独りやは寝る

という和歌の前書きに、「定めたと、女友達のもとより戯れて待てる女も待らず独り臥しをのみすければ」とあるのなどをみると、当時の貴族階級の女性のあいだに

は、同性愛がすくなくなかったものと推察されます。そのころの雲上人に男色が流行していたように……。

近代では、次のようなレスビアンの記録があります。

明治三十年ごろ、中村小町という評判の女性がいきました。今でいえば、ヌーベル・パークの有名さだったのでしょうが、この小町という女が、男装をして、夜ごとに花柳の巷に豪遊し、つぎつぎと多くの芸者と関係するだけでなく、そのうちのもっとも気に入りの一芸妓をみうけしてめかけに囲ったということが、当時の新聞に掲載され、たちまち奇人伝中の人物にまつりあげられたのです。

この小町は、もとは、あるイギリス人の洋妾だったのですが、莫大な手切れ金をとって、これと関係を絶ってからは、本来は同性愛者だったのでしょう、女でありながら女性を愛するようになり、もっともその相手を得やすい花柳界に出入りして、柳橋や新橋などの芸者と歡をかわしていたのでした。

彼女のよそおいは、頭髮だけは女のままですが身には若い柄の男のきものに、白博

多の男帯をしめ、黒ちりめんの羽織りを着流し、脚にはりんずの股引きという、りゅうとした当時の通人姿で、ふところにはいつも九寸五分の短刀をのんでいたということです。

女からみれば、ほれぼれするような男ぶりだったのですから、多くの芸者たちが好んで小町と関係をもったのも、あながち金銭だけのためではなかったでしょう。

次に現代になると、まず作家の吉屋信子が挙げられます。彼女が売ரிだしたさいしょの小説が、レスボスを扱ったものであること、独身をとおして、しかも男性とのうわさがすこしもないこと、その風貌、身なりがM的であること等々、女史がまぎれないレズビアンであることを裏づけています。

池田みち子も、「第三の性」「肉体の履歴」などの女子同性愛をテーマとした小説をかいていますが、そこに描かれている女同志の愛の心理や生理、すべてレスボス愛者でなければうかがい知れないようなツボをつかんでいる点をも、彼女がすくなくとも、この道に趣味をもっている者であることは、疑うべくありません。

ついで、これは有名とはいえないかもしれませんが、「秘帖」という歌集の作者で、湯浅真沙子という女性がいます。もっとも今は故人となっているのですが……。

この人の短歌でみると、彼女は、異性愛にたいしても激しい情熱家ですが、同性愛にもかなり深い経験があり、そして、関心をもっているようです。その二、三をしるしてみますと、

かの子おもへばひしといたきてその肌
合せてみたり乳房と乳房も
お姉さまとしたふその子の髪撫ては

じめて口にふれしかの宵

「知つてゐるでせう」と言へどいらへ
なき妹に罪なることを教へけるかも

おわりに、芸能界をみますと、水の江滝子と丹下キヨ子との同居生活には、興味深いものがうかがわれ、また、松竹歌劇の川路竜子、小月冴子などの男役スターが、女性ファンのあこがれの的であるだけでなく、昔から少女歌劇の楽屋内には「デベ」と称する同性愛がおこなわれていることは、あまりに周知のことでありましよう。

代理部ご案内

▼本格鞭打プレイ (略A12)

三枚一組三〇〇円
本誌のみがなした赤裸々な人間本能の極致!

▼墓地の悦虐 (略A5)

三枚一組三〇〇円
連れこまれた墓地、絶叫する女の断末魔!

▼全裸緊縛ポーズ (略A9)

三枚一組三〇〇円
初めて公開した全裸悶絶の女の妖しき悦虐姿態

▼渾姿ふたりプレイ (略B20)

三枚一組三〇〇円
好評の男性渾緊縛プレイを新たに加えた嗜虐の桃源境

▼水責め・湯責め (略A11)

三枚一組三〇〇円
全裸のモデルをあくことな
く浴室にて責め抜くポーズ

▼野外縛り (略A7)

三枚一組三〇〇円
人気のない森閑とした雑木
林にくりひろげる緊縛痴態

女の尻をなでても ワイセツでない？



東北地方のY県H温泉に近い一帯の村々は、昔から夜這いや野合の淫風が吹き、全国でも著名な春情地帯であるが、H温泉町に新しく赴任してきた若い署長さんは、断固としてこの淫風の改善に乗り出した。たまたま、部落のTという青年がつぎのようなワイセツを行なったという理由で告訴された。告訴状によると、

第一、昭和〇年〇月〇日ごろ、同村の郵便局事務員であるC子さんの美貌と、フツクリと育った肉体的ポリュームに淫情を感じ、T子さん方において、彼女が縁側でお針仕事をしている間、そのお尻

を手で数回なで回した。

第二は、その日、TはC子さん宅を辞しての帰途、精米店の若妻D子さんの家に立ち寄り、初々しい白い素肌を、腰のあたりまで着物をまくりあげて風呂場の掃除をしていたD子さんのお尻を、これまた同様に数回なで回し、キヤツというD子さんのヒメイに飛び出した。

第三は、こうなると、なんとなく中絶したようなムズムズした気持ち、とにかく夜風に冷やしながらと、歩いているうちに、またまた自宅付近のE子さん宅で、風呂場の戸を開いたまま掃除中のE

子さんの色っぽい姿に止めを刺されたような思いで、これまた数回お尻をなでて逃げたのである。

以上のようなT青年の三つの行為が公然ワイセツとして告訴されたのであるが、さて「ワイセツ」という言葉を法律上の用語では具体的に定義されていないので、その観念の内容は、社会通念によって決められるよりはかたはらない。しかし、裁判所は、このT青年の告訴については、全く無罪であるという判決を下したのである。

——すなわち刑法第一七四条に、「ワイセツ」とは「いたずらに性欲を興奮または刺激せしめ、かつ普通の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反するものをいう」(昭和二六・五一〇最高裁)のであるが、その行為についていうなら、ゆえなき性器の露出、性交の状態、またはこれに類する性的姿態を、露骨な表現によってこれを示すことにあるといえよう。

ところで本件の被告人(T青年)の行為は、前段認証のごとく、いずれも単に臀部を着衣の上からなでたというのであって、反良俗的行為ではあるが、上記性的行為とは目しがたく、社会通念上これをワイセツ行為とはいえない。つまるところ、被告人の所為は公然ワイセツの罪を構成しないといふべきものであるから、刑事訴訟法第三三六条前段により、被告人に無罪を言い渡すもの……と判決を下した。

果たして、名判決かどうか？

悦 虐
小説花
の
木
馬

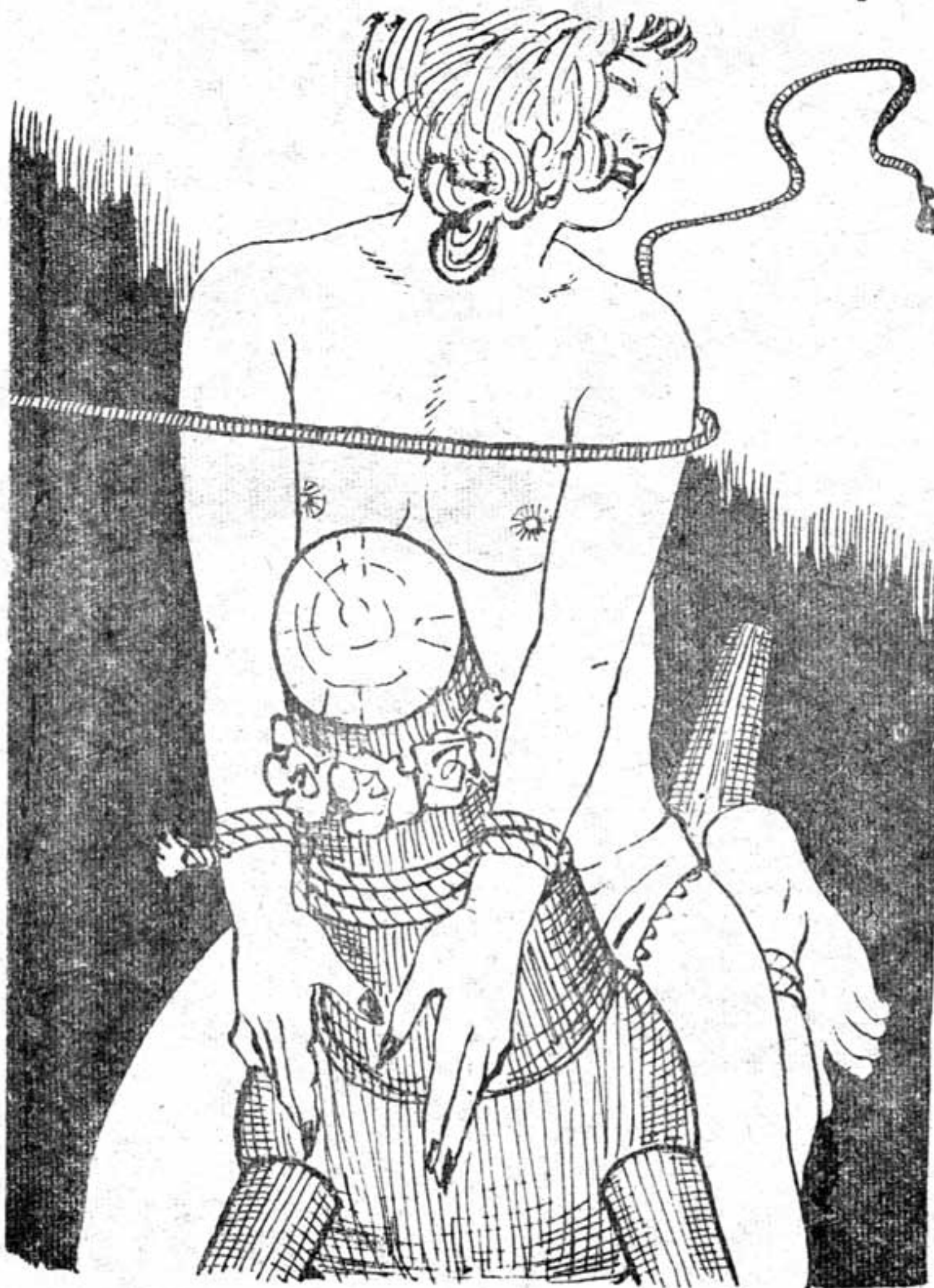
北

潤

耳をかむ

窓の外へ、とっぷり、夜が沈んで来ていた。
冷たい、凍るような冬の夜は、これから白
いものを降らして来るようだった。

浴室の窓に、美奈子は、カギを掛けた。湯
をつかうあいだ、窓を少しあけて、湯気を、
外へ逃がしていたのだ。細目にあけた部分か
ら、暗い木立ちの闇をすかして、向こうに、
張の事務所の灯が見えていた。張が待ってい
ることだろう、と美奈子は気にかかって、シ
ャボンを塗り込める手つきも、せいていた。
上気して、桃色に色づいたからだを、廊下
へ出して、タオルでふき上げていくあいだに、
たちまち肌は冷えて来て、持ち前の白い肌
に、もどりだしていた。肌が、絨ぬいのようなの



だ。

鏡台の前での化粧は、かなり念入りにした。二十八になる子持ちの未亡人の、いきいきとした、つややかな美しい顔だった。

化粧を済ますと、美奈子は、ベビー・ベツドの木枠に手を突いて、二歳になる娘の寝顔をのぞいた。それから、玄関へ向かった。

細い暗い道をたどって、むさくるしい平家建ての張の事務所へ着くと、戸をあけるときに、木谷美奈子の胸から、娘の顔が消えた。

張は、土間に突っ立って、四角なブリキカンをストーブ代わりにして火を焚いていたが、その炎の上を飛び越えて来て、あらあらしく美奈子を抱き寄せて、その形のいい耳をかんだ。

右の耳から、次に左の耳を――。

「ああ」

痛さに、美奈子はうめいた。

「なぜ、ひどいことをするの」

と、叫ぶように、言った。

「辛抱するんだ、奥さん」

張は、細い目を光らして、言った。骨太な手が、美奈子のアップに結った髪を、乱暴につかんで、引いた。たわわな黒髪が、さんばらに、乱れとけた。

利



「私を好きか？」

髪を握って、美奈子の顔をぐいとあお向けにさせて、張は言った。

「好きだから、来た。――そうだな？」

「……………」

意外な仕打ちに、美奈子は言葉がすぐに出ない。

「答えなさい」

張は、髪を吊り上げた。

「痛かったら、正直に、答えなさい」

「は、はなして――」

髪が、根ごと抜けるような苦痛だった。

「答えますね？」

美奈子は、うなずいた。

「好きです……」

「よろしい。あなたは、正直です」

しかし、髪はまだ離してくれない。そればかりか、美奈子はそのまま、中二階へ通じる階段口へ、引きずられて行ったのだ。髪の毛

を手綱代わりにされてひっ張られながら、狭い急な階段を登らせられるとき、木谷美奈子は、悲鳴をあげた。

そのための教育

下の事務所よりも、なおいっそうむさくるしい、火の気もない寒い二階の小部屋で、彼女が初めて経験する、恥ずかしい、そして苦痛な、一種の私刑に、美奈子はあえいだ。が、しかし、それが、張に対して胸に持つ好意以上の気持ちで、美奈子は、根底からなくなることはなかった。

まだ、張を好きだと思ふ気持ちが、胸の底に消えずにあった。

しかし、張の礼儀を心得たうえでの甘い言葉は、決して信用ならない、とは思った。

「未亡人のあなたを、夜分にお誘い申してはどうかと、ちょっとためらいますけど、奥さんさえかまわなければ、今夜、私の家にレコ

ードをお聞きにいらっしやいませんか」

今ではもうなかなか入手できない、クラシックの名盤を、たくさん揃えて持っている、というその言葉に、美奈子は心が動いて、「ぜひ、聞かしてください」

と答えていたのだ。三国人の水道工事屋である張が、音楽の、しかもクラシックの愛好者であることに、美奈子は、さして意外な感持たなかった。

張の瘦軀長身と、画家のような長髪と、考え深そうな細い目は、常日ごろ外で出会ったときにも、何か芸術家風な印象を美奈子に与えていた。

音楽が好きだと言っても、少しも疑わずに、美奈子は、仕事ぶりを眺めながらうなずいていたのだ。張は、美奈子の電話によって、彼女の家の台所の水道を直したのだった。蛇口を取り替えて、簡単に終わった仕事だった。

レコードを聞きに行くのに、美奈子はわざわざ湯を浴び、念入りに化粧して、出かけて行った。

けっきょく、レコードは、美奈子呼び寄せる張の口実に過ぎなかったが、美奈子にしても、その最初の気持ちにおいては、レコ

ドのことは、格好の口実であったことはいない。

張を慕う気持ちが根にある以上、昨夜、あの非常なひどい仕打ちを受けたのにもかかわらず、美奈子の女の心は、彼の来訪を拒否することは無理であった。

午後、彼から電話がかかって来て、

「今からお伺いします」

そう言われて、来てはいけない、と美奈子は言えなかったのだ。

曇り空の広がる寒い道を、張はやって来た。玄関で出迎える美奈子を、張は、きのうの最初のときと同様に、あらあらしく抱き寄せて、形のいい薄い耳たぶを、口にかんだ。右の耳から左の耳へ、張の齒が移るのを、美奈子は、声をこらえ、おとなしく受けた。左の耳たぶは、いっそう強くかまれ、すると美奈子はもう、こらえきれなくなって、声を放った。

「昨夜、言ったはずだ。あなたを教育する、とね。辛抱なさい。奥さん」

張の武骨な手が、美奈子の腰から、格子縞のストラックスを脱がせにかかった。はずれたホックを、美奈子が押えようとすると、それは、張の手を上から押えることになった。

「教育です」

「玄関で……」

あまりむごいわ、と美奈子は強く張の手をつかんだ。華奢な手だ。どう強くつかまれても、張は、痛くもない。

美奈子の居間へ行くことを許したかわり、ストラックスをみずから脱ぐことを、張は、美奈子に命じた。部屋の隅に行つて、うずくまって、美奈子は赤い格子縞のストラックスを脱いだ。

張の部屋には、張の手製になる責め木馬があり、昨夜、美奈子に対して、それを使っているが、ここには、むしろそんな特殊なものはない。畳の新しい小奇麗な六畳間だ。

壁を向いて、そのままじっとうずくまっている、この美しい婦人を、さて、どう責めるべきかと、張は思案するふうだった。あせることはなかった。木谷美奈子は、ともかく、こうして、自分の教育を、二度、迎えようとしているのだ。

くわえ煙草で、おもむろに張が近寄って行く、と、美奈子は、むきだしのお尻をいっそうちぢこめるようにし、黒いセーターを着た、丸めた背中中、いっばい、羞恥の情をあらわした。

尻に、昨夜の、細竹で打たれた痕が、薄青い筋をひいて幾すじも交錯している。

びしっ！

柔らかな肉部を素手打ちしたひびきが、静かな部屋のひと隅でたった。

衝撃で、美奈子は、前へのめり、壁に頭をぶっつけた。彼女の両手は、無意識に畳にひらいて突かれ、二度、頭をぶっつけないように、姿勢を支えた。

びしっ！ びしっ！ びしっ！……

つづけざまにぶたれていきだすと、白い臀部は、炎症の赤みをしだいに濃くにじませた。

美奈子は髪がくずれて、乳房のあたりへ垂れ下がり、乳首をなぶるようにそれは騒いで揺れた。

美奈子は細身ながら、その乳房は豊かでおおきい。黒いセーターのなかで、おおきな乳房も、騒いでぶるんぶるん揺れていた。

「痛い——」

唇から、こらえていた苦痛の聲が、こらえきれずに、ついにもれだした。それでも、しかし、まだ、昨夜の細竹の尻打ちにくらべたら、苦痛は薄いほうだった。

「辛抱なさい、奥さん。どんな女でも、この

教育の初めはつらいのです」

張は、煙草の火が唇をこがしそうになって来ると、美奈子の黒いセーターへなすりつけて消した。

毛糸の燃えるにおいがした。

「酒がありますか？」

美奈子は、涙声で答えた。

「ぶどう酒でしたら……」

「結構です。グラスを二つ添えて、持ってきてください」

「ズボンをはかしてください……」

「きょうの教育は、まだ終わっていません」

「ああ……」

壁に手を添えて、美奈子は立ち上がった。

しびれがきれたときのような立ち方だが、むろんしびれがきれたのではない。

それはもっと痛ましい立ち方であり、歩き方だった。

「グラスは二つ」

と、その美奈子の無残なうしろ姿へ張は浴びせた。

グラスが二ついったのは、美奈子にも、飲ませるためだった。キッチンから銀盆に載せて、美奈子が運んで来ると、

「注ぎなさい」

美奈子のひとみは、涙でいっぱいだった。

その涙の目で、二つのワイン・グラスへ赤い液をなみなみと、彼女は満たした。

なみなみとなったのは、二度とも手が震えたからだ。

「手にとりなさい」

言って、張は、次にこう命じた。

「木谷美奈子の教育のために乾杯——さあ、そう言うのです」

「木谷美奈子……」

とまで言って、美奈子は、なみだで声が詰まった。

グラスのなかへ、涙がしたたり落ちそうだった。

「言えませんか……」

「言え！」

「はい、き、木谷美奈子の……教育のために……乾杯——」

「よし。乾杯」

ひと息に、張は、グラスをほした。

「どうして飲まない？」

と、張は美奈子の背中へまわって来て、むりやりに、あおらせた。唇からあふれた赤い酒が、白いおとがいからのどへしたたり、黒いセーターのえりもとまで濡らした。そのセ

ーターを、張は、美奈子みずからの手で、脱がせた。

それで、昨夜の張の部屋でのとくとそっくりの姿に、美奈子は、なった。

白い裸体を、急激に寒気が襲った。

「今度は、腹とももを打ってあげよう」

張が、ジャンパーのポケットから、皮の細いムチをとりだして手に垂らすと、美奈子は、その瞬間、めまいを覚えた。何本もの、さまざまな種類のムチの陳列を、張の部屋で見たときと、それは同じショックだった。そのなかにあった細竹の竹ムチで、きのうは打たれ、今は、皮ムチで打たれる……美奈子は、張の手に垂れさがるそのぶきみな刑具で、見るのもおそろしい。かたく、目をとじてしまった。

そうして、意志をひきぬかれた人形のように、白い裸体が畳に仰臥すると、ムチ鳴りたちが、まず、腹部へ、びしーっ、とムチは巻きついた。

「ああッ——」

雪のようにまっ白い肌理に、赤い血のすじが走った。

びしーっ……今度は、太股が打たれた。

「ああッ——」

と、張が三のムチを振り上げるすきに、突然、美奈子は身を起こし、無我夢中で、ふすま口へめがけて走り寄った。白い裸形が、廊下へ逃がれた。

「やっぱり、縛る必要がある……」

張は、ひとり言を言って、それからゆっくりと、美奈子を追い詰めにかかりだした。

木馬に縛られて

木谷美奈子に対する、張の三度目の教育は、それから五日後に、彼の事務所の中二階で行なわれた。

『張水道工事務所』という、いささか風変わりな板看板が表にかかっているので、事務所と呼んでいるのだけど、実際は、家と言わなければならない。中二階の、人が見たら怪しくぶきみに感じるに違いないひと間の部屋で、三十二歳、まだ独身の張が、毎日ひとりで寝起きしていることには相違なかった。

その夜、張は町で酒を飲んで来て、酒くさい息で、木谷家へ電話をかけた。つくえの上には、買って来た翻訳小説が二冊ほうり出され、彼はつくえの端に腰掛けて、足をぶらんぶらんさせながら、高声で美奈子に命令していた。

「子供を寝かしつけたら、参ります」
何かものうげな遠い声を、美奈子は出した。

電話線を伝う、それはひ弱な、美しい声だった。

三十分ほどして、美奈子は、むさくるしい張の家へあらわれた。

高尚な感じのする黒いモヘアの外套を、えりを深く立てて着て来ていたが、その下には、張の命令どおり、この前の、えび茶地に赤い格子縞の入ったスラックスをはいていた。

耳かみをされると、美奈子は激しくうめき、黒いうるんだひとみで、張の顔をみつめながら、外套をとった。黒いセーターが出た。これも張の命令で、着て来たものだ。

「どうしてか……」

と、美奈子は言った。

「ひどい目にされながら、あなたが憎めないのです……どうしてか」

笑って、張が、つくえをアゴで指した。外套を、そこへ置き、という指図だ。やがて、その外套の上に、白い華奢な手が、スラックスと、ついで白い下着を重ねて置いた。

「皮ムチで打たれた痕が、いつまでも、とれ

ません……」

なるほど、いささかむごたらしい白いお尻のムチ痕だった。あるとき途中で逃げ出したのがいまいました、とっつかまえると、荒縄で手足を縛り上げ、張は苛酷なまでに皮ムチをふるったのだ。

「——今夜は、あんなにひどく打たないで」

という美奈子の声は、寒さでふるえた。さっきの電話の声も、この今の声も、少女のように、妙に可憐にひびく声だった。黒いセーターと裸の腰の姿のせいで、そうひびくのか。美奈子のえり足は羞恥で赤かった。

張が、急に厳肅な声をだした。

「私は、あなたを最近代人に教育すること、このうえない光栄と感じています」

「……………」

「上れ」の声で、木谷美奈子は、狭い急な階段を登りだした。

うすよごれた部屋へはいると、木馬の置き場所が変わっていて、中央にそれがでんと据えられてあるのが、まっ先に目についた。壁に並ぶムチは、前の通りだった。

また、めまいを覚えそうになりながら、美奈子は、ちょっと、細竹のムチを目でさがすようだった。

「木馬に、感謝をこめて、キスなさい」

張は、小さな瀬戸火鉢の残り火をかき立てていて、その上で手をあぶりながら言った。

「ひざまずいて、木馬の胴に！」

裸のなめらかな膝を突き、美奈子は、祈るようなかがめた姿勢で、木馬の冷たい木肌へ紅をつけた。

ムチがうなって来て、びしっ、と尻に鳴った。

「感謝の気持ちが出ていない！」

美奈子は、今度はしゃぶるように口を押しつけ、よしと言われるまでそうしていた。

大きな丸太造りの冷たい木馬の背中に、またがり乗って、うつぶせに腹ばい、堅い平首を両のかいまで抱きしめたとき、木谷美奈子のからだのなかを、にわかに、一つの熱い血潮がはしった。それは、一種歓喜に似た感情だった。

ムチ打ちの苦痛を、この自分のからだに甘受したい、迎合の、積極的な感情であった。

木馬の上の美奈子の腰を、太い麻のロープが巻き締めだした。木馬の胴ごと巻き締めて行く縄だった。

白い皮膚が、すりむけ、よじれるほどに、強く、強く、張は縄をかけて行った。

四すじの縄目が、そうして白い腰と木馬とを一つに合わせ、美奈子の臀部は、木馬の上にしっかり固定された。

「これでよし」

張は、息をはずませて言った。

「覚悟はいいですか」

と、からかうように笑って言った。

「あなた……」

美奈子は、張へ顔をねじり向けて、

「おたずねしていい？」

「なんです？」

「……好きですか、あたしを？」

壁に並ぶムチのなかから、太めの皮ムチをはずしながら、張は答えた。

「愛や恋、そんなものは、最近代人にとってはよいけいなものだ。邪魔なものです」

びしーっ！

「あッ——」

火のように熱い打撃が肌を襲って、木馬の首っ玉に、ひしとばかり彼女はしがみついた。

次は、さらに猛烈だった。

「あッ、ひどいッ——」

「三回目の教育です。前よりも激しくなるのは、当然です、奥さん」

そして、びしーっ！と打つのだ。

「ひーっ」

びしーっ！

「ひーっ！」

びしーっ！

「ひーっ！」

「ありがたいと思うのです」

びしーっ！

「ひーっ！」

木谷美奈子は、狂ったように、カン高い悲鳴をあげつづけた。外には、いつか、木枯らしが吹き狂いだしていたが、そのすさまじい風音よりも、なお、この木馬の上の美しい半裸の女の声は、凄烈にひびいていた。

初めてのキス

二月の末になった。

きびしい寒気は、三月を間近にすると、幾らか衰えて来だしたようだった。ある日、わ

りに暖かな気温になると、木谷美奈子は、幼い娘を抱いて、タクシーに乗って、じつにひさしぶりに町へ出向いて行った。

町の繁華地帯に、Dという大きな洋画専門館があるが、美奈子は、その洋画劇場の社長だった。これは、夫がなくなって、自動的に、妻である彼女にその地位がふり当てられたのだ。とはいえ、実際の経営は、亡夫の弟が代わって腕をふるってくれるから、美奈子は、彼に任せきりで、家において、育児に専念すればよい身分であった。夫がなくなったとき、子供はまだ彼女のお腹のなかにいたのだった。

劇場の事務室のソファで、義弟は、美奈子に言った。

「若くて美しくて、惜しいですよ」

再婚をすすめるのだった。すると、美奈子の胸のなかには、反射的に、張の顔が浮かんで来ていた。

(張となら、よろこんで、あたしは……) 彼女は胸の中で言った。

義弟がじっと顔を見ているので、笑って首を横にふって見せた。

「残念だな。いや、怒らないでくださいよ。」

じつは、ある人から相談を受けましてね、身分の立派な人だから、私も内心乗り気になっていたんですよ」

「まあ……」

と、美奈子は、また、しろい歯をこぼした。

「——そうですか」

義弟は、がっかりしたふうだった。

「親切な気持ちはうれしいんですけど……」

美奈子は、気の毒になって、そう言いながら、ふと、あらぬことを思った。もし、この彼が、張からあの猛烈なムチ責めをされるあたしの姿を見たら、いったい、どう……？と。

社長である美奈子は、客のあいだにまじって、映画を一本見てから、また、大型の外車のタクシーに乗って家へ戻った。劇場へ来たついでに、デパートでものぞいて見たい考えだったのだが、なにかしらおっくうになって、劇場を出ると、その場ですぐに、車へ手



利



を挙げたのだ。張に、会いたいのかも知れない。

家のなかへはいるとすぐ、まだ子供を抱いたまま、美奈子は張へ電話をした。

張の「教育」は、そののちずっと四日置きごとに、正確に繰り返されている。次の「教育」まで、きっちり、なか四日は休ませてくれるのであった。二日前に「教育」がっているから、きょうはその日ではない。

ところが、張は、ひさしぶりに町へ出てみましたというだけの、他愛のない美奈子のおしゃべりを聞いたあと、言った。

「奥さん、今夜、特別に教育します」

「——今夜ですの？」

「そう。夜になったら、私のほうから迎えにあげます」

と、張は電話を切った。張の命令には、たとえどんな小さなことでも、忠実に、美奈子は服従しなければならぬ。それは、犬のようには厳格にしつけられているものだった。だから、この場合も、美奈子は、もう黙って観念するよりほかなかった。

木谷家を、夜のとぼりがやがて包んだ。

美奈子は早目に食事を済ませ、ベビー・ベッドに子供を寝かしつけておいて、居間でラ

ジオを聞きながら、張の訪れを待っていた。

黒いセーターと、赤いチェックのスラックスをはいた、スタイルのいい彼女の横で、ガス・ストーブが燃えていた。

玄関がひらいた音がした。

急いで、美奈子が部屋を出て行った。

「ああ——」

といううめき声が、玄関でするのは、例によって、形のいい耳がかまれているのにちがいない。

張の腕は、美奈子のからだを軽々と抱き上げて、居間へ運んで来た。どさっと畳にほうり出されて、美奈子は四つん這いに這った。

ストーブのまん前に頭が行って、あぶなく、髪の毛をこがすところだった。

しかし、ガスの火よりも熱いムチ打ちが、この、しなやかな、うつくしいからだを、これからまた、イケニエにするのだ。張が、美奈子をおお向けにひき寄せて、その小さな花のような唇を吸った。

初めてのキス！

歓喜が、ほのおのように、美奈子を包んだ。五体が、燃え上がって行くようだった。

木谷美奈子は、ほのおになった。

「愛していると言って！」

張の首に、激しくまだ腕がからんでいた。

「愛してるよ！」

「たずねる」

と、張は言った。

「あなたのからだをムチ打たない私を、あなたは愛することができるか？」

「愛せない！」

「正直に答えなさい」

「誓って 愛せないわ！」

「ムチ打ち、しいたげてくれるから、愛せるのだな？ 最近代人たる新しき愛で、どうだ？」

「はい！」

「美奈子」

と、張は、彼女の名前を言った。

「愛してる」

と、言った。

「ああ！」

美奈子は火のような息で、

「もう一度言って！」

「愛してる」

「ああ！」

今夜こそ、ベッドの上で、あたしのからだを抱いて、と火の息で美奈子は言った。

二つの豊かな乳を、張の胸に押しつけた。

「ベッドへ運んで……」

しかし、見よ、張のひとみの静かに澄んでいることを。

「愛してないのね……」

ちいさく、美奈子はつぶやいた。

「愛してないのかわ……」

「奥さん」

張はしずかな声で言い、美奈子のからだを畳へ突き放した。声音はしずかだが、あくまでも「教育」の乱暴さがあった。

「窓から私の家を見てみなさい」

なぜ、そう命令するのか、美奈子は見当もつかなかったが、

「見ます」

と答え、窓へ寄って行った。

カーテンをめくって見ると、暗い木立の向こうに、張の家の中二階の部屋の灯が、奇麗な桃色に見えた。部屋に、何か飾りつけをしたのだろうか。

「クリスマスのようなかわ……」

と、美奈子は言った。

「カーテンも新しく変えたのね？」

「そうです」

まうしろで、張の声が答えた。

と同時に、美奈子の尻はぶたれた。

花を飾つた木馬

もう、およそひと月ほどになる張の教育期間のうちで、浣腸をされたのは、美奈子は今夜が初めてだった。

「今夜は、今までのどれよりも、最も激しいムチ打ちを加える。だから」

そ、そうをおかさない用心のために、浣腸をしておく、と張は言つて、行なつた。

はげしく襲う便意の苦しさに身もだえる美奈子を、張は押えつけ、その尻を叩きながら、容易にトイレへ立たせなかった。

「あつ、あつ、あつ」

「まだ早い。辛抱」

よし、と離されると、美奈子の白い脚は、だ、だだと、廊下を音高く踏み鳴らして、トイレへ向かつて急いだ。ばたんと、ドアをあけ、ドアをしめるゆとりもなく、しゃがみ込んだ。

トイレを出たとき、その廊下の窓から、美奈子は、張の家の桃色の灯をふたたび眺めた。

そのなかで、何か祭典でもあるような、奇麗な、あたたかいともしびの輝きだった。

夫がなくなつてのち、よくこの廊下の窓や

湯殿の窓から、木立ちの向こうの張の家を、自分が眺めていたことを、美奈子は思った。

いや、夫が生存中にも、眺めていたようだった。すると、私は、夫が病臥中のときから、あの家にひとり住んでいる張に、心をひかれていたのだろうか、と、美奈子は思った。すると、自分の心が自分で、何か、そら恐ろしいようだった。

美奈子が居間へ戻ると、張は、やはりしずかな瞳の色で、煙草をすっていた。

「ああ、生き返つたみたい」

と、美奈子は言いながら、張の前に来てすわつた。まだ半分もすつてない煙草を、張は、その美奈子の胸になすりつけて消した。黒いセーターが少し燃え、毛の焼けるにおいがたち、あつい灰が白い太股へ降つた。

「熱……」

と、美奈子の顔がゆがんだ。だが、その眉を寄せる表情も、美貌なだけに、また格別な美しさがにじむのだった。

「さ……」

張が、まだ何も言わないのに、美奈子は、すすんで四つん這いになって、ムチを迎える姿勢になった。さっき、彼女は、「愛してないのだから……」と張に言った。しかしいま、

彼女は、その自分の言葉を、心のなかで取り消していた。

と言うことは、張の愛を、心のどこかで、美奈子が信じていることであつた。

「さ、あなた、打つて」

と、彼女は、畳にひたいをすりつけた格好で、張をうながした。

張はムチを持って来ていない。

「起きなさい」

そう美奈子に命じて、彼がジャンパーのポケットから取り出したのは、麻の細引きだった。

「縛るの？」

「手をうしろにまわしなさい」

木谷美奈子が、うしろ手に堅く両手をくくり上げられて、家の玄関を出ると、その裸の下肢は、たちまち、身を切るような寒さに襲われた。

「ひどいわ、ずいぶん」

さすがに、美奈子は張を恨んだ。この恥ずかしい、寒い、裸の格好で、張の家まで道中しなければならぬのであつた。

「さあ、歩きなさい！」

張はうしろで細引きを握り、その縄尻をくるくると振りまわして、牛か馬かを追い立て

トピック・ロータリー

「奥様の裸は高くつく」ものか？

近く封切られる「奥様の裸は高くつく」には、ごらんのとおりの緊縛シーンがあつて、久々に動きのある緊縛感が見られそうだ。まだ試写会前で見ていないのが残念だが、鑑賞の手引きに、ストーリーを載せておこう。

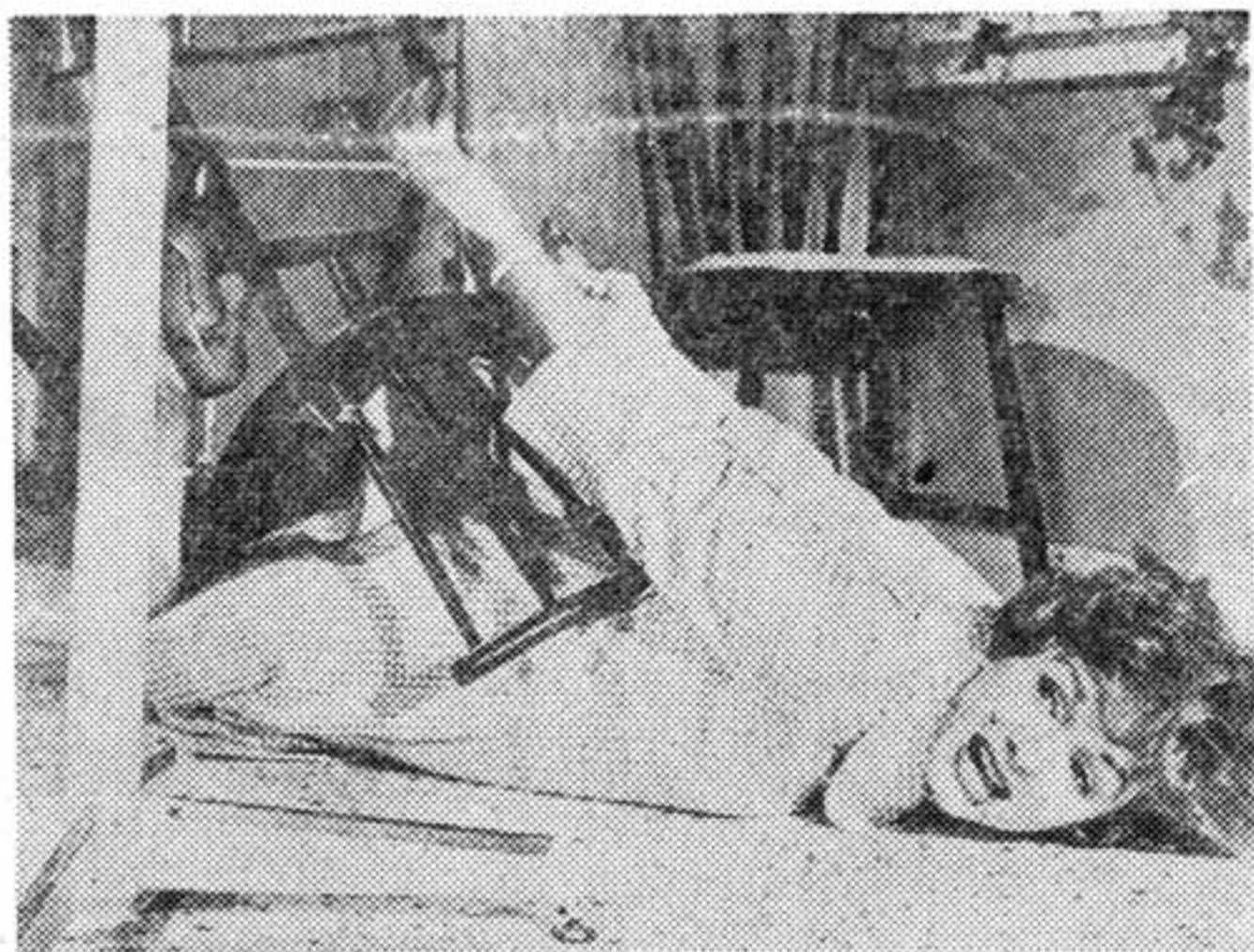
ものがたり

エリオット・ナッシュ君はテレビ・ドラマの作家兼プロデューサーである。

怪しげなミステリー・ドラマばかりを作っているわりに売れっ子で、郊外には気の利いた住宅をもち、妻のネルと二人で住んでいる。ネルは毎夜ブロードウェイで踊り、劇場のハネルのを待ってエリオット君が迎えに行くという寸法で、双方とも大変な甘くてセクシーな夫婦である。ところがある日、とんでもない電話がかかって来た。

「すっ裸の写真があるぜ、お前のワイフのな。二千ドル出しな。いやなら雑誌に売りつけるだけの話よ。……」

びっくりしたエリオットは悪友の地方検事ハローにこのことを相談した。しかしあくまでも自分のことではなくミステリーの筋書きとしてだが……。



ところがハローの答えはいとも明確に非情なものであった。第一にヌード写真を発表させること。第二に金を渡すこと。第三に脅迫者を殺すこと。そして脅迫者のダンの要求は二万五千ドルになつてしまった。陽気なネルはエリオットのそんな苦勞は少

るように、びしっ、と美奈子の腰を打った。

「ああ、もし人に出会ったら、あなた……」

門を出て、いよいよ道を歩き出すと、美奈子は、思わず泣き出しそうな声で言った。

夜分は、めったに人通りのない、寂しい道だけれど、もし？　と思うと、これは堪えがたい、恥ずかしい、心理上の残酷な責めであった。

「前を向いて。顔を挙げて！」

絶えず、びしっ、びしっ、とむき出しの寒い白肌を打ち据える縄尻は、さして痛みはないが、強烈な羞恥で、美奈子の心はきりきり痛んだ。

しかし、その道中は、あいだに幸い人と出会うことなく、張の家へ着いて、終わった。

「ああ、神様」

美奈子は、しんそこ、蘇生したような気持ちで、なんとなく冗談めいて、そう言った。

縛られたまま、すぐに、中二階の部屋へ上らせられた。

すると、その部屋は、クリスマスのように綺麗な飾りつけがされていた。美奈子が、桃色の窓の灯に感じたことが、不思議に当たっていたのだ。

ネオンのような色電灯が輝き、花が置か



しも知らない。庭内にガゼボ（見晴らし台）を造るといってはしゃいでいる。なんとか家を売って二万五千ドルを支払っておきたいが当分それも不可能になって、ついに第三の計画である脅迫者の殺害を決心した。得意のスリラードラマを地でゆくつもりである。

さて、決行の夜、エリオットはダンを呼んだ。定刻の十時エリオットの前に暗闇から一人の訪問者が近づいた。一発、エリオットのピストルが火を吹き黒い人影がフラ

フラとよろめいた。エリオットは夢中になって死体をガゼボの下に埋めた。翌日セメントが流し込まれガゼボの工事完了を祝って悪友のハローを呼びネルと乾杯をした。しかし突然スコールがやって来て激しい雨水がガゼボの土台を洗い始めていった。エリオットは、さすがに落ちて着かなかったが、ハローはネルを相手にごきげんであった。

「ダンという男を知っているかね」ネルは平然と答えた。

「私その男に脅迫されたの。たった一回ヌードモデルをしたために。だけどいつてやったわ、雑誌に出せば劇場が満員になるって……」

ハローは愉快そうにいった。

「そのダン・シエルビーが昨夜殺されたのさ。死体はホテルで発見された……」

ハローの言葉にエリオットはびっくりした。昨夜確かにピストルで殺したはずのダンが……すると誰を殺したのか……

れ、あのむさくるしい部屋のおもかげは、すっかり一掃されていた。木馬と並んで、ベッドが置かれていた。

木谷美奈子は、声をのんで、ただ目をみはって立ちつくしていた。

「今夜、ここで、私の妻になるのです」

「——」

夢のような気がして、美奈子は、とっさに言葉が出なかった。

「美奈子、新しき愛で、私はあなたを永遠に愛していきたい」

嵐のように、よろこびの感情が、木谷美奈子の全身を襲った。

「はい！」

「美奈子」

微笑して、張は、言った。

「まず教育だ。さあ木馬へ！」

なんという名の花だろう、白と赤の小さな花たちが、輪にゆれて、木馬の首に飾られているのだった。

花の木馬の上に、美しい木谷美奈子のからだ、みじんのためらいも、おそれもなく、さながら幸福感に酔いしれた姿で、伏せて行った。

が揺れる

あべ・さだよし

尾テイ骨と耳

人間の顔についている器官のなかで、耳くらい原始的な動物性を感じさせるものはない。だから、どんな美しい女性の場合でも、じっとそれを眺めていると、気味がわるくなってくる、といった意味のことを、誰かが、どこかで書いているのを読んだことがある。

それはたぶん、芥川竜之介だったかもしれない。

おそらく彼は、いまは退化した器官である尾テイ骨が、まだシッポのかたちをして人類からたれさがっていた時代の遺物として、耳を眺めていたのかもしれない。

しかし、そうした意味で醜怪しゅうかいというのなら、口、鼻、目とおなじことである。生きてゆくための基本的な必要器官である以上、あるていど動物性に直結しているのは、やむをえないことなのだから……。

ここでは、そうした必要器官としての耳ではなく、ひとつの官能的な道具としての耳の役割を追及してみたいと思う。

耳輪のエレガンス

私の耳は貝のから

海のひびきをなつかしむ

—ジャン・コクトー—

という詩がある。

これはまず、耳の抒情性じやうせうせいといったところだろう。

さいきんでは、井上靖の小説で「揺れる耳飾り」というのがあるし、流行歌でも、「じっとそのまましておくれ、動く耳輪がゆれるから」といったものがある。

揺れる耳飾りというのは、情事のアクセサリー、としてはエレガンスである。耳輪が動くからじっとしてしてくれ、というのは、男の殺し文句である。耐えに耐えている官能が、相手の耳輪の揺れ動くのを見たたん、グラスの酒がこぼれるようにこぼれてしまいうだ、というキワどい求愛にもとれる。耳輪のゆれ動くとき、それは、官能のゆれ動くときなのである。

耳輪をはめたり耳飾りをしたりするのは、風俗史的に言って、いつごろからのことか知らないが、金の足輪をかませたり、

耳輪



テン足をしたりして、女性を玩弄物として私有していた時代の名ごりなのもかもしれない。現代にきている風俗でも、その昔をたずねい。

てみれば、意外な動機につながっているものがある。

西洋風の結婚式では、花ムコが花ヨメを抱いたままベッドに運ぶ行事がプログラムの一つとしていまでも行なわれているが、

これが昔の略奪婚の遺習だったりするよ
うなものだ。
日本式の結納
だって「花嫁
を金で買う」
ことの名ごり
と言われている。
る。

耳輪や耳飾
りの起元がど
うであろうと
それは、その
おいたちとは

無関係に、現代の風俗にとけこんでいる。それは、夜会服のキラびやかなハイソサイエティのレディたちの耳で揺れていたたり、銀座の夜の蝶の耳に揺れていたたり、人妻、オフィス・ガールの耳にキラめいていたたりする。

出血幻想

女性に耳輪をはめさせ、それを観賞しようとする男性心理は、本質的にサディズムに通じている。それは、女性にとってはマゾの快感ということになる。征服欲と被征服欲である。

筆者は子供のころ、イヤリングをつけた外国婦人の写真なんかをみると、

「痛いだろうなあ」

ひどく残酷な気がすると同時に、そこに性的な機微が隠されているのを、子供心にも漠然と感じた。

少年の私は、耳輪というのは、まるで切符に改札バサミでパチンと穴をあけるようにして刺しこむものと思っていたので、それには、出血の幻想がつきまとっていたのである。

事実、むかしの中国などでは、それに似た残酷な耳輪の装着法も、一部では行なわれていたらしい。小さいとき、耳に食いこむ程度にきつく耳輪をかませる。耳はどんどん成長してゆくが、耳輪の先端の位置はおなじである。それは、根が地中をほうよに、肉のなかに食いこんでゆく。大人になったころは、それはもう肉体に固着して取ることのできない一つの財産のようなものになってしまうのである。太モモを異常発達させるためと、逃亡を防ぐための二重目的で、テン足を発明した旧時代の中国人らしい着想である。

もともと、女性の肉体のどこかに輪をハメるということは、

「この女は持ち主があるんだぞ」

という対外的な表示のようなもので、飼犬には首輪をハメて野良犬と区別させるのと似ている。

輪は、つまりカセであって、所有と束縛の象徴としての意味をもつ。それは、飼主である男には、所有と征服欲のまんぞくをあたえ、女に対しては屈従と献身と、その反対給付として生活が保証されていると

いうよろこびをあたえる。

やがてそれは、本来の意味をはなれ、しだいに装飾としての役割を追及しはじめるのである。

しかし現代でも、それは装身具であると同時に、所有権のデモンストレーション的な表示の意味をかねそなえている。たとえば、オンリー的な立場の女性のなかには、そうしたものを、これ見よがしにひけらかしている人がある。うすいナイロン・ストッキングの下にチラついている金の足輪。そして、ネックレス、耳輪、指輪、腕輪といったぐあいである。

要するに、からだじゅうカセだらけなのだが、それはとりもなおさず、彼女のパトロンが彼女に対して、いかに高い商品価値を認めているか、ということの証明にもなるというわけだ。

じっさい、男たちのなかには、じぶんの所有する女に首カセをつけ、犬のようにクサリでつないでおきたい、と考えている者がすくなくない。

夫婦関係をはじめ、一対一の所有関係が権威を失いかけている現代のような時期に

は、所有の完全を期そうと思えば、それだけ強烈なクサビが必要になってくるわけである。

サディストの宝石

「胸毛のはえた裸の胸に吊られたペンダントが、私の顔の上にたれ下がったままキラキラとリズムカルに動いた。それは、征服される、しびれるようなよろこびを、さらにかきたてた」

と、ある女性は告白している。

ペンダントが、女の被虐のよろこびをかきたてるちいさなアクセサリーだとすれば、耳輪は、男に対して加虐のよろこびをかきたてるアクセサリーである。

女の全身から、最後のちいさな布がとりのぞかれる。あとに残っているのは、息づいている肉体そのものだけ。それと、耳にキラめくふたつのリングだ。

サディストのムチが、サッとふりおろされる。

「あっ」

とうめいて、女の上半身がのけぞる。ピラピラピラピラとちいさくふるえてキ

ラめくイヤリング。苦痛がたかまればたかまるほど、その光はいよいよ美しく、その動きはいよいよズミカルなのだ。

たとえば、悪者にかどわかされた江戸の町娘が、土蔵のなかですっ裸にされ、柱にしばりつけられているところを想像するといい。

「うぬッ。言うことをきかなきゃ、こうしてやるッ」

あとは、おさだまりの責めせっかん——痛いことをされて、

「ひッ」

と身もだえするたびに、銀の髪飾りがピラピラとふるえるおもしろさ。それが荒くれ男たちのしびれるようなよろこびを掻きたてるのだ。現代では、イヤリングがそうなのである。

光に刺されて

次は、あるマゾの男の告白である。

彼は、あおむけになった上から、女に馬のりにならせ、首をしめさせるのが好きだった。

女も、いつか、彼の好みに感染して、馬

のりになってしめることによるこびを感じるようになっていた。

男は、しめられながら、なかば失神しそうな気もちで、ウス目をひらいて女の顔を見上げた。

女は、股を大きくひろげ、馬のりになったまま彼の首に手をかけ、彼の苦しむありさまを見下ろしていたが、その目のなかには、星のようにつめたく残忍な一点の光が宿っている。

「ああ、あの星」

と思ったとき、男の四肢に硬直が起こり、彼は、一気に陶醉してしまうのだった。

やがて、男がグッタリなってしまうと、女は、口のなかを動かして、ツバをいっぱい分泌させ、それから、そのツバのかたまりを舌で押し出すようにしながら、なかばひらいた男の口のなかへゆっくり落としやるのだった。男は、

「ありがたや。命のおみず……」

と、となえながらそれをゴクリとのみこみ、もういちど女に挑むのだった。

あるとき、男は、フト、女に耳輪をつけさせることを思いついた。やってみたとこ

ろ、すばらしかった。女は、

「やいコノ、やいコノ」

と尻をゆすりながら男の首をしめてくるのだが、その動きにつれて、両耳のイヤリングがピラリピラリと夢幻のようなキラめきで、男の目を刺してくるのだった。その効果があまり強烈だったので、彼は、タイミングを逸してしまい、ほんとうに失神してしまったほどだった。

このほか、耳輪についてさまざまな幻想をもつ男たちがいる。ある男は、二人の女を耳輪と耳輪でチェの輪のようにからませておいたら、二人が完全に一心同体的な動きをしないかぎり、どこへも逃げられないではないか、といったサルタンの妄想にふけっているのだった。

また、ある男は耳輪ではない、耳たぶのところでパチリととめる貝型の耳飾りをしている女を見ると、しきりに妄情を刺激された。それが、白濁したような色の耳飾りであった場合は、なおさらだった。彼自身では意識していなかったが、意識の深層では、女性器に恥垢が付着しているところを連想していたのである。

腸の和解

惠 藤 鶉



X氏の奇妙なはなし

——愛する妻が浣腸マニヤであった喜び——

妻の申し出

あれは、確か二カ月ほど前のことだったと思います。あの日は、朝早くから一日じゅう、うっとうしい雨が降っていました。

その日は、ちょうど日曜日で、ボクと女房は——女房は典子というのですが、その典子と、久しぶりに郊外へピクニックに行く予定だったのです。

季節はいいし、一年ほど前になりますが、新婚当時、一度そこへ行ったことがありますので、しばらくぶりに行ってみようということになり、さいわい、ほかに予定もなかったのも、前日の夜、まあ、そのように決まったわけなのです。

ところが、一週間ほど降らなかった雨が、あいにく、当日の朝早くから降りだしまして、それも珍しいほどの豪雨で、もう郊外散歩どころではなかったのです。

それで、前夜はあんなに喜んでいた典子

は、がっかりして、元気をなくしてしまし、雨はいつこうにやむ気配はないしで、まったく、その日のボクは、ツイてなかったのです。

あまり典子が寂しそうで、可哀想だったので、映画にでも行こうかと誘ったのですが、見たくないと言うのです。

仕方がないので、二人で朝食を済ますと、ボクはまたフツンのなかにもぐりこんで、眠ってしまったのです。

その日はそれで、なんとはなしに一日過ぎてしまったのですが、夕食のとき、ちょっとしたことで、夫婦ゲンカをしでかしてしまいました。

典子といっしょになって一年になります。が、過去に、そんなことなど、たった一度もなかったのですから、二人にとっては、それが結婚以来初めての犬も食わない夫婦ゲンカだったのです。

それも、悪いのはボクのほうではなかった

浣



のです。誰が聞いたって、典子のほうが悪いのは明白なのです。

そこで、ボクは典子に「手についてあやまれッ」

と、何度もいったのですが、さんざん言い争ったあとなので、典子も恥ずかしかったの

でしょう、多少は意地も手伝ってか、決してあやまろうとはしないのです。

ついにボクは、我慢ができなくなり、典子を力いっぱいなぐってしまったのです。その瞬間、結婚以来典子に初めて手をあげたことに、ボクは気がついたのです。シマッタと思ったのですが、まさか詫びるわけにもいかず、そのまま隣の部屋に敷きっぱなしになっていたフトンに、またもぐりこんだのです。しかし、隣室の典子の泣き声をきくと、ちょっと可哀想だと思わないわけでもなかったのです。ですが、ボクは強情に眠ったフリをして、隣室の物音に注意していたのです。

ところが典子は、いつまでもすわったまま泣いているらしいのです。

が、三十分近くもたったころ、突然、典子がボクを呼ぶのです。ボクは、すぐに返事をするのもイヤなので、なおも眠ったふりをしていると、何度も呼ぶのです。それでも黙っている、今度はふすまをあけて入ってくるではありませんか。

そして、枕もとにすわって執拗に呼ぶので、さすがのボクも返事をしないわけにはいなくなり、何の用だときくと、

「お腹が痛いの……」

と腹痛を訴えるのです。

心配にはなったのですが、ケンカをした直後のことでもあり、まだ、あやまろうともしないので、ひと言、

「薬でものめばいいじゃないか」

と言ったきり、また頭からフトンをかぶってしまったのです。

すると典子は、

「あなた、お腹が痛いって言っても、ほんとうは、なんだか、お腹が張って気持ちが悪いの……」

と続けて言うので、

「いつまでも泣いてたから、気分が悪くなったのだろう。いまになおるさ」

と皮肉を言ってやったのです。

ところが典子は、いまの皮肉が通じたのか通じないのか、なおも言葉を続けるのです。しかも、まことにショッキングなことをいうではありませんか。

「あなた、気持ちの悪いのは、便秘のためかもしれないわ——だったら、浣腸かければなおるかしら?……」

たとえば、自分が悪いとはいえ、いまボクになぐられたことなど、まるで忘れてしまったかのように、すがりつくような声で言うので

す。ボクは、自分の耳を疑いました。

(いま、典子は、確かに浣腸と言った。浣腸と——)

「え?」

と故意にききかえしますと、確かに間違いなかったのです。

「もし、便秘のために気分が悪いのなら、そりゃあ、浣腸かければなおるさ」

と言うボクの言葉に、典子は恥ずかしそうに言うのです。

「じゃあ、あなた、浣腸かけて……」

そのときの典子の目には、あのさっきまでの強情な光はありませんでした。そればかりか、黒いつぶらなひとみには、羞恥と、謝罪と、ボクに対する限りない愛情の光だけが宿っていたのです。

妻の目の輝き

やがて典子は、ネグリジエに着替えておりましたが、考えてみれば、浣腸というものはありがたいものですね。

なぜだって? だって、そうではありませんか。浣腸というものが存在するために、ボクと典子の感情のモツレは、完全にとけたのですからねえ。いや、言いかえれば、浣腸が

仲介となって、夫婦間の和解が成立したと言っても過言ではないと思うのです。

もちろん、この場合、ボクがマニヤでなかったら、和解が成立するどころか、かえって怒りが増大したかもしれないのです。

ところが、不思議なことに、典子は、そのころになると、まったく腹痛を訴える様子がなかったのです。もうなおったのかもしれないが、さっきまでは、あんなに気持ちが悪く、さっきまでは、あんなに気持ちが悪く、いと言っていたのですから、どう考えても、典子の態度は不思議でした。

万一、なおったとしても、典子自身が、浣腸マニヤでない限り、恥ずかしい思いをして浣腸など、いくら自分の夫とはいえ、させるはずがないと思うのです。

いま考えると、ボクはまだあのとき、典子の異常性に気がついていなかったのです。異常性というより、いわゆるアブノーマルな面をもった真実の典子をしらなかったのです。

まあ、それはとにかく、典子がネグリジエに着がえているあいだに、ボクは、冷たく光る浣腸器にグリセリンを吸入していたのですよ。

やがて典子は、ネグリジエのまま、ボクのかたわらにくると、ソッと肩に手を掛けてく

るではありませんか。そして、薬液が浣腸器に吸入されている様子を、ジッと凝視しているのです。

そのときボクは、典子の顔を、いや、ひとみを見たのですが、その両眼は、おどろくほどギラギラと輝いていたのです。

それを見てボクは、典子が浣腸に異常な熱意をもっていると感じたことが誤りでなかったと、心の奥で確かめた思いでした。

液体を吸い終わった浣腸器をみて、典子は不思議そうに、きくのです。

「あなた、どうして、浣腸器なんて持ってるの?……」

これには、ボクは答えず、

「さあさあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。そこに早く横になってごらん」

と、質問をはぐらかして、ちょうど典子の下半身のあたる部分に、さっさとビニールを敷いたのですよ。

それでもまだ典子は、モジモジしていましたが、再度ボクが促すと、やがて、たまたまなく恥ずかしいといったふうに、目をツブってそこに横になりました。

そのときのボクの気持ちは、常日ごろユメにみていた行為が、目の前に現実として存在

しているんですから、複雑なものでした。歓喜と、興奮と、そしていくらかの羞恥のまじった、まことに複雑なものでした。

ビニールを敷いたフトンの上に、ネグリジエのまま横臥している典子の肩に、ソッと手を掛けると、細いからだをビクッと縮めて、まるで、ネコの前のネズミのように、哀れなその反面、思わず抱きしめたい衝動にかられるほどの可憐な存在にみえたのでした。

「さあ、典子、用意が出来たよ。いいね」

そういうボクの声に、典子はますますからだをかくさせて、背を向けたまま、かすかにうなずきました。それでも、

「では、いいね」

と念をおして、典子の薄いワインカラーのネグリジエのスソを、腰のあたりまでまくりあげると、彼女は、両手で顔をかくしてしまったのです。

そのとき、ボクは、典子の腰にソッと手をあてていたのですが、羞恥のためなのか、ハチの胴のように細くくびれたウエストは、ブルブルとかすかに震えていました。

ナイロンの手ざわりのよいパンティーに手を掛けても、典子はジッとしていました。

パンティーは、なんの障害もなく典子の臀

部をすべり、美しい、目のさめるような白い二つの丘陵が、ボクの目に映ったのです。白い肌は緊張して、コリコリとかたく引き締まっています。

それを目の前にしたボクの胸の鼓動は、典子に聞こえはしないかと思われるほど、大きく激しくうつのです。

「さあ、典子。お腹の力をぬいて、お尻にもあまり力をいれてはいけません。浣腸のとき痛いからね」

これでボクの口から、典子は、数回「浣腸」という言葉を聞いたわけですが、それは典子にとって、たまたまなく恥ずかしかったことでしょう。浣腸の恥ずかしさは、マニヤであらうとなかろうと、それに違いはないのですから……。

しかし、それは、美的感情を受ける基盤ではないでしょうか。典子にとって、いいえ、典子ばかりじゃない、このボクにとっても――。

限りない陶醉夢

こうして時間をかけているボクの言葉に、典子の緊張は、多少でもとけた様子でした。

そこで、左手を白い臀部に掛けると、用意

の浣腸器を右手にしっかりと握りました。ところが、せっかく緊張が多少とけたと思ったのに、臀部に手を掛けた瞬間、典子は、また、からだをキュッと締めつけてしまったのです。

そのために、左手の指で局部が目映る状態にしようと思ったのですが、かたく締めつけた筋肉は、それをまったく受け入れられないです。そこで、ボクはまた、こう言ってやりました。

「典子、そんなに堅くならなくてもいい。さあ、お尻の力をぬいてごらん。これじゃ、浣腸をかけることができないよ」

すると典子は、小さな声で、

「だって……」

というのです。まだ、そのあと何か言いたそうでしたが、あきらめたのか、ソッとお尻の力をぬいたのです。たまたま恥ずかしい、というふうだね――

もうそのときには、典子の腹痛は、自分の異常な欲望を満たすためのウソだと完全にわかっていたのですが、羞恥だけは、欺瞞でも芝居でもなく、真実恥ずかしかったのでしよう。そればかりか、あまりの羞恥に、かえって浣腸願望の欲求を満たすために、ウソの腹

痛を訴えたことを、後悔していたのかもしれない。

考えてみれば、なんという不思議なめぐりあわせでしょう。

典子は、自身の浣腸渴望を満たすためにうった芝居が、なんとなく成功して、いま、ボクも、夢にまでみた妻への浣腸が達せられる寸前にあるのですから。

柔らかくなった典子の二つのふくらみを、左右に押し開くと、中央に、灰褐色の小さな後庭がみえます。

ボクの目には、それがたまらなく愛らしく映るのです。吸いつきたいほど、可憐で美しいものに見えるのです。

その色は、ボクに、あるものを連想させました。典子の乳房です。いいえ、その先端の小さな可愛い乳首です。その色は、その二つの突起に似ていました。

グリセリンの粘液に光る嘴管が、接触した瞬間、典子は、両肩をビクッと縮めて、なおいっそう小さな両手のなかに、顔をうずめようとするのです。

少しでもボクの目から、細い肢体をかくそうとするむなしい努力をヨソに、一度は緊張のために青白かった清潔なうなじが、局部か

と伝わる恥ずかしい感触に、みるみるまっかになっていきました――

そのときには、不思議にも、ボクの心は、マニヤは自分だけではない、妻だってまたそうだったのだ――という身勝手な先入感に、典子とは正反対に、自分でもおどろくほど冷静でした。嘴管が、直腸に挿入されるさいに起こる快い感触こそ、望んでやまない美への冒瀆の陶酔なのです。

浣腸器のなかの粘液は、次第に典子の体内に消えていきました。そして、最後の一滴までも注入しおわると、静かに先端を抜き、用意の脱脂綿で押えながら、ボクは限らない陶酔にひたっていました。

（典子、なんという偶然だろう。君が浣腸マニヤだったとは……。どうして、一年ものあいだ。それをかくしておいたの――ああ、そんなことをきくのはムゴイことだ。ボクだって、君と同じように、いままでかくしていた



んだからねえ。でも典子、ボクは、これから、君をもっともっと好きになるに違いないよ——浣腸マニヤの君を……」

こんなことを反芻していると、突然、典子が、

「あなた、我慢できないわ、もう……」

と、苦しそうにあえぎながら言うのです。

典子の声が、こんなにも美しいものだったとは、初めて気がついた思いでした。

夢のような喜び

典子がトイレから戻ってくると、ボクは、そのか細いネグリジェの肩を抱きながら、思いついてきたのです。

典子の、あのときのキラキラ光っていた二ツの目。ボクの手の浣腸器を凝視していた異常な目の光。

あれは、正常な人間の目ではない。確かに、そこに異常な光をボクは見た。そして、便秘も腹痛もウソではなかったか。これだけの条件が揃えば、間違いない。あのときの典子の目を見て、ボクは直感したのだ。典子が浣腸マニヤではないかということ——だが、夫だからそう直感したのではない。自分がマニヤだからそう感じたのだ。もしマニヤ

でなかったら、あの目の光には、気がつかなかったに違いない。——

これだけのことを、ひと息に話してしまうと、ボクは、典子の目を見つめたのです。

典子は、黒い大きな目を、ますます大きくさせて、泣きそうな、ゆがんだ顔で、それを聞いていましたが、突然、ボクの胸に顔をうずめると、何回も何回もうなずくのです。

ああ、やっぱり、違っていたのですね。

ボクの想像は適中していました。想像というのは、誤りかもしれません。あまりにも、そこに、真実性をかけていたから——

「典子が浣腸マニヤだなんて、ボクは、ゆめにも思わなかったよ。どうしていままで黙っていたんだい？」

いけないいけないと思いながらも、そうきかすにはいられたかったのです。

「あなただって、隠していたくせに……いままで——」

恥ずかしそうに身をくねらせて、甘い息を吹きかける典子のたおやかな髪を愛撫しながら、ボクは続けてきたのです。

「典子は、ボクがマニヤだということを、初めから知っていたのかい？ それで、あんな

ウソをいって、自分がマニヤであるということとを隠して、その欲望を満たそうとしたのだろうか？」

折れそうなほど、背を抱きしめながら、そうきくと、

「知らなかったわ、全然。だから、あのとききいたでしょう？ どうして浣腸器なんか持っているのって……もし、知っていれば、そんなことかかないわ——」

と、小さな声で答えるのです。

「じゃ、ほんとうに偶然だったんだねえ。典子もボクもお互いに、浣腸マニヤだってことを知らなかったんだから——」

その言葉に典子は、

「ええ、そうよ、そうよ——」

と、何度もうなずくのです。

そして、ボクの胸に、なおも頬をすりつけながら、さらにこんなことを言うではありませんか。

「あなた、典子が悪かったの。さっきのケンのこと……。ごめんなさいね——」

もちろん、ボクも直ぐあやまりました。

いま、ボクはしあわせですよ。筆舌には尽くしがたい、夢のような日々を過ごしているんですからねえ。

X氏の妻典子の告白

——愛するがゆえに浣腸を望んだあたし——

夫の思い違い

あの日は、確かに、あたくし、機械的なものでしたわ。だって、土曜日の晩に決めた翌日のピクニックが、憎らしい雨のためにダメになってしまったんですもの。

そのためにあたくし、つまらないことで夫を怒らせてしまつて……。あのケンカは、あたくしが悪かったのですわ。そのうえ、あやまる潮時を失ってしまったので、なんとかキツカケをつくろうと考えたのは事実でした。

それが、浣腸という思ひつきになったのです。あのときあたくし、便秘でお腹が張って気持ちが悪くから夫に浣腸して、と言ったのでした。そうです。それがあたくしの考えたことなのです。夫はそれを、あたくしが浣腸マニヤだから浣腸されたいばかりに考えたワソだと言いました。便秘でも腹痛でもないくせに、ただ、自分の欲求を満たすための芝居だったとも言いましたわ。

でも、違うのです。夫の考えは、すべて違うとは言いませんが、その大半は違っているのです。

便秘でも腹痛でもなかったことは、そのとおりですけど、浣腸されたい、言いかえれば、自分のいまわしい欲望のための芝居だったわけではありません。

浣腸という言葉聞いただけでも、顔から火の出るほど恥ずかしくイヤなのにいくら夫とはいえ、一人の男性に、そんなことを頼むわけがないではありませんか。

では、なぜ、それほどイヤな浣腸を、夫に要求したのかと思われるでしょう。

あのとき夫は、あたくしに「手をついてあやまれッ」といいましたけれど、あたくし、それでもあやまろうとはしませんでした。

自分が悪かったとは思っても、あんなに強情をはって、いつまでも泣いていたので、恥ずかしくて、詫びることができなくなつてしまったのです。

夫にブタレたときは、痛いより先に、びっくりしてしまつて。なぜって、結婚して一年になりますけれど、夫にぶたれたのは、あのときが初めてだったのですもの。

それであたくし、意地をはつてしまつて、あんなにながいあいだ、泣いていたのです。泣きながらあたくし、自分の悪いことを悟つたのですが……。

もし、このままあやまらなかつたら、二人の仲はどうなるのだろうと考え、何度、詫びようかと思つたかもしれません。

そのときあたくし、フと思いついたことがありました。

それが、あの浣腸のことだったのです。

ノゾいた夫の秘密

あたくし、あの二週間ほど前のある日、さがしものがあつて、夫の机の引出しを調べていたのですが、そのときその引出しの底に、一冊の雑誌があるのに気がつきました。

何気なくそれを手にしますと、ページのあいだから三枚の写真が膝の上に落ちたのです。その写真を見て、あたくし、顔が熱くなつてしまいました。

もし、そのとき、あたくしの顔を他人が見



たら、きつと、まっかになっていたに違いありませんわ。

それは、裸の女性が、恥ずかしい格好で、縄やくさりで縛られて、見たこともないような大きな浣腸器で浣腸されている写真だったのです。全裸のまま四ツん這いにされて、黒

い太いゴム管をお尻に挿し込まれている美しい女性。赤ちゃんがオムツをあてられるときのような、ほんとうに恥ずかしい姿にされて病院でも見ることが出来そうもない大きなガラスの浣腸器で、浣腸されている少女。そんな写真が三枚も、雑誌のページのあい

だからでてきたのですから、びっくりするの当然ですわね。

そればかりか、表紙はカバーがかけてあって見えませんでしたけれど、その雑誌のページを繰りますと、そこにも、いろいろな浣腸の写真や絵が何枚も載っていたのです。

本文にも少し目を通しますと、書いてあることは浣腸のことばかり。小説も随筆も、すべて主題は浣腸なのです。

浣腸に責められる女。浣腸に魅入られた人びと――

知ってはならない夫の秘密を、知ってしまったのです、あたくしは――。夫が、だれにも言えない恥ずかしい趣味の持ち主だと……いいえ、趣味というのは誤りかもしれせん。そうです。趣味ではなく、病気なのです。病気というよりほかに、表現のしようがないではありませんか。

それが、後天的なものなのか、先天的なものなのかは、わかりませんが、いずれにしても、いまわしい病気に違いはないのです。

でも、あたくしは、そのために、夫を嫌悪するような気持ちにはなれませんでした。

そのときは、それで雑誌を元の場所にしておいたのですが、ただ、そんな夫に対し

て、心のなかで願うことは、いくらそのよう
な恥ずかしい病氣をもっていようと、他人
に迷惑をかけさえしなければ、その異常な欲
求を外に向けて発散しなければと、それだけ
を願うばかりでした。

あの雑誌に書いてあるような、恐ろしいこ
とを、他人に実行しなければ、絵や写真によ
る視覚だけで楽しむのなら、それでいいと思
ったのです。

なぜ、自分がマニヤでもないのに、夫に対
して嫌悪感を覚えないのか。

浣腸のようなものに興味を抱く異常な性の
所有者に対して、いくら夫とはいえ、よく平
気でいられるものだ——と疑問を覚えるに違
いありません。

でも、あたくしは、そのような嫌悪などは
感じませんでしたの。恋愛結婚のためなのか
もしれませんわね。

いずれにしろ、そのような事情が、夫は氣
づいてはいませんが、争いの以前にあったの
です。

羞恥に耐えて

もう、ここまで話せば、あたくしの言おう
としていることが、おわかりになったかもし

れませんね。そうです。あたくしは、謝罪の
キッカケがほしかったのです。いいえ、それ
よりも、夫の異常な欲望の対象になろうと決
心したのです。ケンカの原因をつくったの
は、あたくしであり、どのように言われよう
と、自分が悪かったのに違いはないのですか
ら、その罪の代償に、一度だけ、夫の渴望を
かなえてあげようと思ったのです。

そこで、便秘でもなく、どこもからだは悪
くなかったのに、あたくしは、夫に浣腸を要
求しました。

すると、やはりあたくしの思ったとおり、
浣腸が仲介となり、夫の怒りは多少でもとけ
たようでした。

でも、あたくしは、浣腸されることが、ど
んなに恥ずかしかったことか——

想像を絶する苦痛という言葉があります
が、あたくしのあのかのときの恥ずかしさは、文
字どおり想像を絶する羞恥でした。

でも、あたくしは、必死で、その羞恥に耐
えました。

そのとき、夫はすでに、あたくしが浣腸マ
ニヤではないかと疑っていたのですわ。

ところが、実際には、それは間違っていた
のです。

確かにあたくしの浣腸の要求は芝居でし
た。でも、マニヤだからそんな芝居をしたの
ではありません。少し誇大に聞こえますが、
罪の代償のため、謝罪のキッカケを作るため
の欺瞞にほかならなかったのです。

夫が浣腸器を所有していたことも、実は知
っていましたけれど、それを故意にきいたの
も、目的を知られたくなかったからなので
す。しかし、よく考えてみますと、それは不
必要だったのですわね。

なぜなら、最初、浣腸を要求したこと自
体、夫が浣腸器を所有していることを教えて
いたことになるのですものね。

浣腸が終わったあと、夫は、あたくしを膝
の上に抱きながら、初めて自分が浣腸マニア
だということを告白しました。

でも、あたくしは、すでにそのことを知っ
ていたのです。

それを聞いたときあたくしが、あまりびっ
くりしなかったものですから、夫は不思議そ
うな表情をしていました。

初め、あたくし、一度だけ夫の欲望をかな
えてあげようと思い、あんなへたなウソを言
って、それでもそれは成功したのですが、浣
腸が済んだあと、夫があのような誤信をする

とは、思ってもいかなかったのです。

あたくしを見つめながら、

「典子が浣腸マニヤだとは知らなかった」

と言ったとき、その喜びにあふれたひとみを見て、夫がなぜか可哀想になり、真実を告白することができませんでした。

トピック・ロータリー

フンドシー一枚四十二万円ナリ

——有名將軍の身につけたものを集める富豪——

異性の身につけたものを集めて悦に入るのは、もちろんフェチズムだが、この変わり種で、世界のスキモノのあいだで話題となっていてことがある。

フランスのパリ——いうまでもなく「花のパリ」は、芸術や流行の中心であるばかりでなく、いろいろな珍奇な話題の中心地でもある。

このパリで「趣味交換市」という会がときどき催される。さきごろ開かれた、この「交換市」でただ一きれの二尺五寸（約七五センチ）の白布が、なんと邦貨にして四十二万円で落札された。

出品者はマダム・ボンマルシェというご婦人で、落札したのは、イタリアの富豪ロワイヤル氏。

それにしても、たった二尺五寸の白い布きれが四十万円以上もするとは、さすがに花の都と、ウワサのタネになった。

ところで、この白布にはいったい、どんなイワクインネンがあるのだろうか。

タネを明かせば、太平洋戦争で、「マレ

ーの虎」といわれて勇猛をたたえられた、わが山下奉文將軍が身につけたフンドシだというから、二度びっくり。

もっとも、これを落札したロワイヤル氏は、かねてから、有名な將軍の身につけたものを収集しているというから、なるほどとうなずける。

その収集品のなかには、たとえば、ロンメル將軍のサルマタとか、モンゴメリー將軍のクツシタとか、アイゼンハワー將軍（現在のアメリカ大統領アイク）の手ブクロなど、戦史に名高い將軍たちの日常愛用品がずらりという。だから、山下將軍のフンドシが一枚加わって、錦上さらに花をそえた感じというところだろう。

わが国にもフンドシをしめたり、しめた男に興味を抱く手合いは、案外に多いものであるが、まだ、女の下着フェチズムがよく話題になりながら、男の下着に対するフェチを聞かない。となると、ロワイヤル氏などは、さしずめ、異質というか、高度というか、そんなフェチシストか？

そしてけっきょくは、自分をあざむいて、夫の前でだけ、浣腸マニヤになっていたのです。

あの日から夫は、毎夜、浣腸器を手にしませんが、あたくし自身、それはあまり嬉しいことではありませんわ。

夫の前でこそ、マニヤになってはいますけれど、真実はそうでなく、一人の正常な女なのですから——

そうかと言って、死ぬほどそれが苦痛なのでもありません。もし、我慢できないものであったら、真実をすでに告白していたのかもしれないものね。

でも、その日以来、夫はもちろん、あたくしも、毎夜受ける浣腸を除けば、以前にも増して幸福なのです。

なぜか、あなたにおわかりになって？ 教えてあげますわ。

ウフフ、それはねえ、浣腸のとき以外には、過去にないほど、夫は優しくあたくしを愛してくださるのですもの——

あたくし、いま、待っておりますの。いつの日かわかりませんが、あたくしのからだにも、やがて、被虐渴望の血が流れ始めるときを——

責められる女の羞恥

—現代サディズムの心理と風俗—

宮原 静 夫

責めの型と 雰囲気

フランスの小説に「泣き叫ぶ青春」というのがあるが、この小説のなかに、木馬の四肢に少女を縛りつけて責める場面が出てくる。

この木馬はあとあしが高くなっているので、責められる少女は、いきおい臀部が高く突き出てひどく恥ずかしい格好になる。そのエロティックな少女の姿態が、責める者を極度にエキ



サイトさせ、さらに息づまる責めの修羅場が展開されるのである。

日本にも、昔から、木馬責めがあったが、この木馬は、たいてい背中が屹立しているの
で、俗に「三角木馬」といっている。これに
またがせられると、責められる女は、痛さと
木馬から転落しまいとして腰を左右にくねら
せて身もだえるので、その姿態に、西洋木馬
とはべつな色気が見られる。

西洋木馬で責められる女が、黒いストッキ
ングの裸身であるなら、三角木馬の場合で
は、目もさめるような友禅模様の長じゅばん
でなければならぬ。

筆者は、この二つの対照を撮影したことが
あったが、西洋木馬のエロティシズムには、

一種の量感といったものが見られ、なんとなく新味な感覚をうけとることができた。それにくらべると、三角木馬の場合は、凄艶な色調感こそ見られたが、それは、日本画に見る扁平な感じ、西洋木馬のような量感は見られなかった。

昔からいわれているロウソク責め（宗教的な意味が含まれ、女を全裸にして肩や背、手足などに点じ責め



たもの、といわれているが、私刑として肛門や局部に挿入して火を点じて責めたもの、ソロバン責め（三角形のスノコ状に木を並べた刑具の上に、刑罰者をすわらせ、膝へ伊豆石を一枚、二枚と乗せて責める公刑）、松葉いぶし（主として女を責めるのにもちいた私刑で、なま松葉をいぶしてその煙で窒息に近い状態にする）、海老責め（江戸時代の公刑で、股間に首を突っこむくらいに体を折りまげて責める）、薬味責め（指先などを傷つけて唐辛子、胡椒などを塗って苦痛を与える）、駿河責め（駿河の代官彦坂九郎兵衛の考案し

たものといわれ、駿河問いともいう。刑罰者の体に重石を結びつけて空中で回転させる）、水責め（水に顔を突き入れて窒息に近い状態にする）などの拷問の型は、もちろん現代的な感覚とは違って、とうてい現実的なものを感じとれない。

そこで、それら昔の拷問の型を、現代の感覚におきかえてあつかってみたらどうであろうか。

たとえば「松葉いぶし」を例にとってみるなら、パーマネントの洋髪にシュミーズ、もしくはネグリジエの現代娘を対象に、松葉の

かわりに、何十通となくあるその娘の恋文を一枚々々読みあげながら火鉢にくべてゆく、というようにあつかったとしたら、女に裏切られた男の拷問として興味あるプレイになるだろう。

また、木馬責めの場合でも、西洋木馬のそのように、突き出された女のヒップに浣腸責めを併用すれば、こういった責めによりかなり感覚の麻痺した者でも、新しい情熱をおぼえることだろう。

このように、責めの本質には、新しいとか古いとかの区別があるのでなく、責められる女の服装や責め場の雰囲気、昔からの拷問の型もおのずからその様相を一変してしまうのではないだろうか。

責められる女の羞恥心

友人のMは、サディストとしては比較的ノーマルに昇華させて、その愛人（二号さん）とのプレイを満足させているが、彼は、一週に一度の愛人とのおう瀬には、あらかじめ前週にたてておいた計画を実行して、いつも愛人に新しい刺激をあたえているので、八年間の愛交も、このごろようやく白熱の度をたかめるようになってきたといっている。

Mは「女に羞恥心がなくなったら、サディストの夢は半減するし、アブノーマルな破綻を早める結果になるだろう」といつているが、このMの言葉をかりるまでもなく、責めの世界では、女の羞恥心というものがきわめて重要なポイントとなっていると思う。

ごく最近の話であるが、筆者は、すこぶる頭のいい夜の淑女^{レディ}と行きあったことがある。新橋駅付近ですごくあかぬけした洋装の美女に呼びとめられ、好奇心半分にからかつてみると、とくべつおもしろい遊びをさせるからというので、どんな遊びだと聞くと、それはホテルへいっしょに行ってから、と嬌然^{えんぜん}たる仕草で誘うのである。

そこで、彼女にしたがってホテルへゆき、女の望む額の金を渡すと、このいずれかを買ってくれといって、ハンドバッグから錠剤の入った小ビンと赤いしごきを取り出した。つまり、この二つのうちの一つを買ってくれば、おもしろい遊びをさせるというのだ。

いうまでもなく、錠剤は睡眠薬（どうせ中身は胃腸の薬かなんかだろう）で、しごきは縛らせて自由になるというのだ。睡眠薬の意味は、ねむっているあいだにどんなことをしてもよい、というのだが、とにかくこれでさ

らに幾らかの金をフンだくろうというのだ。それは、こちらでも百も承知だったが、このごろの猟奇趣味をおう漁色家にとっては、ちよっと食指のうごく趣向である。

そこで筆者は、彼女のいう額で赤いしごきのほうを買って、それで彼女をうしろ手に縛りあげたのである。ところが、縛ってみて、卒然と興味を失ってしまったのである。というのは、どうせ商売の策^{さく}として考えついたことではあろうが、ただ「縛らせた」というだけで、そこには、一片の色気も見られなければ、そんな雰囲気も感じられなかった。

最も肝心な羞恥心というものがまるでなく、淡々として、きわめて味気ない凡情^{ぼんじやう}なのだ。彼女に多少でもその傾向があつてのことだったら、どんなにたのしいひとときだったろう。

余談がたいへん長たしくなってしまったようだが、要するに、女に羞恥心というものがなかったら、現代的感覚にマッチした責めのプレイなど、とうてい、望むべくもないだろう。

責め場と責め道具

責めの道具としてもちいられるものを、昔

のものと現代のものと比較して、同じ型の責めにもどれだけの相違があるかを考えてみると、まず小道具として、昔の責め場につきものの煙管^{えんくわん}がある。

雁首にまだすいのこりの煙草がくゆり、女の素肌を焼くにはじゅうぶんな余熱がある。それを、がんにがらめにいたしました女の太腿におしつける、それでピシリとなぐりつける、というのが、昔の責め場風景の定石^{じやうせき}である。これをマドロスパイプに置きかえたら、どうだろうか。

まず、マドロスパイプの型態から連想できるように、それが喫煙具^{きつえんぐ}としての用途のほかに、どんな役目を果たすか、ということだが、これは、いうまでもなく、女の羞恥心をねらった一石二鳥の責め道具であることがうなずかれることであろう。

貧乏とっくりと五郎八茶碗も、昔の責め場につかわれる小道具であるが、これも、ビールびんあるいは洋酒びんなどに、コップとかカットグラスなどがくだけ散っていれば、スリルさえともなつて、動きのある場面が現出することだろう。

また、昔の常套手段^{じやうそうしゅん}であるサルグツワも、手ぬぐいのかわりにナイロンの靴下をかませ



るようにすれば、見る者に、むっちりとした足をつつんだ女の体臭まで感じられて、きわめて新味のある場面が見られるだろう。

しどけない長じゅばん姿の女に水をかけて責める折檻せいかんの手段も、芝居などでさんさん見せられてきた情景であるが、これも、長じゅばんのかわりに、薄物のドレスやネグリジェなどを水びたしにすれば、豊かな胸の隆起やくびれた腰の線がくっきりとかびあがって、素肌の場合よりもっと肉感的で効果があると思う。

そのほか、新味のある現代調の責め道具と

しては、画室アトリエの責め場に画架イーゼルに縛りつけた女の肌、赤や青、黄、白などの絵具をベタベタ塗りたくったり、女の恥ずかしがる絵や文字を描いたり、あるいは女の内腿をパレットナイフで突く。また、山小屋を背景にピッケル、登山靴、地下足袋、ザイルなどをあしらうと、さらに斬新な構図が無尽蔵にうかんでくるだろう。

サディストの夢は飛躍

斬新といえば、責めの構想について、サディストは際限なく夢をくりひろげる。筆者の知る範囲で、その二、三の実態をお伝えしてみよう。

Kは、某省の事務官といういかめしい肩書きの人物であるが、その私生活では、明朗なりベラリストで、すこぶる社交性に富んでいる。彼は、三十一歳の独身青年で、気楽なアパート住まいであるが、そのアジトには、彼と交渉のある女性以外は何びとも近づけたことがない。

谷中やなかの天王寺近くにあるアパートは、いまにも朽ち倒れんばかり

の古色蒼然とした建物であるが、Kの部屋へ一歩足を踏み入れると、およそ外部の風景とはべつな、意外な感じに、誰しもびっくりすることだろう。

まず目に入るものに、赤一色の分厚い緞帳どんちやうである。これは、外部との音響を遮断する防音装置であり、そのほか、天井といわず壁にいたるまで、防音装置がほどこしてあるの、かなり大声をたてても、絶対に室内の模様が外部へ漏れるようなことはないといっている。

Kが、なぜ、こんなうすぎたないところをアジトにえらんだかといえば、このアパートの主人は、ほとんど下級の勤め人で、しかも中年の夫婦が多く、彼らは生活に疲れ果てているので、他人の生活などに干渉する気力がないからだ、というのだ。

さて、その赤い緞帳どんちやうのKの部屋には、隅に、古風な、しかも非常に豪華なダブル・ベッドが、部屋の半分を占領している。が、よく見ると、このベッドの四本の脚にはクサリがぶら下がって、その先に鉄の輪が取りつけられている。頭のほうにも、足のほうにも、クサリの輪や麻縄が垂れ下がっているし、さらにベッドの中ほどには、被縛者の胸や腰をしめ

つけるのにつごうのいいように、頑丈なベル
トが二本とりつけてある。

Kにきくと、このベッドは、ふだん、ソフ
ァのかわりにしているので、女がどこにすわ
っても、その位置をかえずに縛りあげること
ができるというのだ。

Kが最近、このベッドで責めた浅草のある
劇場のダンサーで、二日間も縛らせたまま、
Kのあらゆる加虐に陶酔した女があるという
が、彼女は、食事も用便もそのままでとり、
ほとんど半睡の状態でKに加虐をしいたとい
っている。

Yは、丸の内の某商事会社の代表者で、彼
は、その持てる物質にものをいわせ、みずか
ら「白夢荘」とよぶ家を新築して、そこへ若
い女性を片っ端から連れこんでは、同好者間
でも羨望の的である嗜虐三昧に明けくれてい
るというのだ。

筆者は、このYとは交友関係もまだ浅いあ
いだがらだったが、このごろある事情から急
速に親交を深めたものである。

はからずもきょう、この原稿にペンを走ら
せていると、突然、彼からおもしろいプラン
があるから直ぐきてくれ、という電話をうけ

とったのである。前にもいちど訪ねたことの
ある「白夢荘」なる家を、筆者は電話をうけ
とってから一時間後にたずねた。

その部屋の模様は、前にも見ているので筆
者はよく知っていたが、きょうは様子がガラ
リとかわって、ひどく陰気な空気が重たく立
ちこめている。

それでも桃色の電灯がなまめかしくとも
り、サディスチックなドラマの幕あきにふさ
わしい雰囲気をつくっていた。

十坪ばかりのこの洋間の中央に、ポツンと
一つ、およそグロテスクな格好をした頑丈な
椅子が置かれてあるきりで、前にも見た、い
ろいろの調度はぜんぶ片づけられてあった。
が、筆者を出迎えてくれたYの話で椅子一つ
という簡単な調度の意味がうなずかれたので
ある。

まず、この頑丈なグロテスクな椅子に女を
縛りつける。この椅子は、前部が深くU字型
にえぐり取ってあって、女の足は左右に大き
く開かれたまま固定し、さらに、そのまま理
髪店の椅子のようにうしろへ倒れこむ仕掛け
になっている。

そこへ書生にひかれて、コウシほどもある
シェパードがあらわれる。

Yの手から、女の体に、ミルクがすこしす
つ落とされる。そして、シェパードが近づ
く。やがて女の表情にどんな変化が起こって
くるか、さすがに筆者は、かたずをのむ思い
で、このグロテスクな椅子を見守ったのであ
る。

Yは、コウシほどもあるシェパードを飼っ
ているが、彼はミルクの罐の口を切りなが
らも、これからのプログラムをまだ女に打ち
明けていないのだ。

「こいつを知ったら、初めのうちはちょっと
抵抗するかもしれないよ」

といって、やがて幕をあけようとする地上
最大のドラマの筋書きにこころはずませて
か、あぶらぎった顔をつねになく紅潮させて
いた。

それから、ものの十分とたたないうちに、
いったん出ていったYは、上背のある上品な
二十五、六歳の洋装美人をともなつて、この
部屋に入ってきた。

彼女は、ほんとうに何も知っていない模様
である。格好のいい脚を組んで、化粧直しに
余念がない。

書生が、シェパードのクサリを解いている
らしい音がかすかに聞こえた――。

示威サディズム ということ



性的代償障害としてエキジビショニズムつまり露出症というのがある。

この露出症は三つに分けられる。

第一は、精神薄弱な人にみられるもので年とって頭がボケたりして子供っぽい真似をする人に多い。

第二は、テンカン患者に見られるもので発作の代償としてのムリじいな行動としてあらわれたり、発作に伴う無意識の副作用として起こったりする。

第三は、一番よく見られるもので、特殊なモロー状態もなく、あとで思い出してもわからないような強い意識障害もなく

るものである。たいていは強い神経衰弱に悩まされていて、露出癖以外は、ふつうの人と変わらないもので、地位の高い人にもよく見られる。

第三の例としては、ヒルシュフェルトの性科学研究所の報告がある。ある機械工であるが、彼は工場の庭で、何度も露出症的な行動をして人々を困らせたというので、研究所へ連れてこられたのであった。調べると、一種のテンカン症状を示しており、強く尿意頻度に悩まされると、モロー状態のうちにズボンの前をひろげてしまふということがわかった。

第三の例としては、ドイツ国立劇場の有名な俳優がいる。彼は、動物園で、ハダカにならざるをえない発作にとりつかれたために自殺してしまったのである。

こういう人たちが、その特異な欲望をあらわす形式はいろいろである。道路とか、森、ヤブのかげ、鉄道車両などでのことが多いが、着ているものを窓からいきなりほり出してハダカになるときがある。こういった場合、そこに女性、ことに若い娘、ときには子供がいて、それに見せようとの意図によるのはもちろんである。

学者によっては、こういった露出症的な行為をデモンストレーション・サディズムつまり示威サディズムといている。すなわち、サディズムの象徴的な型とみるわけで、これはノルツバッハが主張している。また、サディズムの衰弱型とみたのはブロッホであるし、羞恥の感情を欠いた小児型といているのはフロイドである。

だが、ヒルシュフェルトは、必ずしもこれらの説に賛意を表していない。人をびっくりさせたり、恐れさせたりするこの種の行為は、マゾヒスティックな異性症的なものと考えられた。つまり、露出するということとは、いつでも恥ずかしい感じをもち、屈辱的な感じをよび起こすからである。

女が肉体を誇示するのも、いってみれば露出症で、ミス・コンテストなどは、その代表的なものだといえないだろうか。



利

十六娘の恋

江戸名物のからっ風も、ひとたび日が西に
没するころになると、ウソのようにはたとや
んだ。もう暮れ六ツ（午後六時）もとうに過
ぎた時刻であった。

「ねえ、もっとそばにお寄り……。あら、お
前、震えているのかえ？ ホッホッホ、私が
こわいのかえ？」
そう言っ、若者の手をやんわり握りなが
ら、顔をのぞき、ニツと朱唇（しゆしん）をほころばせた
のは、向島の料亭「松月」のひとり娘お京で

美

女 の 肌 を は う カ ニ

志 乃 田 藤

あった。

「でも、お嬢さま……」

「うん、お嬢さまだなんて。仙吉、お京とお呼び」

お京の手にさらに力が加わった。仙吉と呼ばれた若者は、しょうしんもの 小心中らしく、おじけながら、顔を女のように染めた。

この日、お京は、板前の仙吉を供に連れ、浅草観音へと出かけたのである。お参りをすませ、仲見世を見ながら、家路である隅田川沿いに向島へと、仙吉と肩を並べて歩いていった矢先のことであった。

「……………」

「ホッホッホ、どうしたの。私にだけしゃべらせるつもり？」

家業が料亭でもあり、そのうえひとり娘のわがままから、お京は、この時代には珍しいほどおきやんで、色気があった。お京は、やがて十七の初春をすぐ迎えようとする年ごろだった。

お京の白魚のような手に握られているだけで、仙吉の手から、恥じらいの汗がにじみ出た。ときどきお京の肉づきのよい、弾力ある肌が、仙吉の体に触れる。そのたびに仙吉は、五体をこわばらせたものである。

日も沈み、対岸の浅草の灯が夜を告げるように輝いていた。お京の歩みが止まった。

「仙吉、あたしを抱いて……」

「え？」

一瞬、仙吉は驚愕の瞳をお京に向けた。

「まだ私の心がわからないの」

お京の黒く澄んだ瞳がキラリ、対岸の灯のように輝いた。

「おまえ、私がきらいなの？」

お京の両手に力がこもった。

「いえ、きらいだなんて、お嬢さま……」

「じゃ、どうして私をさけるの」

「お嬢さん、そ、そりゃあ、あたしだって、

お嬢さんが好きです。で、でも、お嬢さんには伊与助さんが……」

仙吉は、そう言っしょうぜんて悄然とした。

「ホッホッホホ。あんた、伊与助のことで気をつかっているの、あれはお父っやツあんがひとりで決めているコトよ。私はきらいよ、伊与助みたいな野卑な男は。それより、仙吉……あたしは、おまえを……」

お京は、くるりとキビスをかえすと、仙吉の肩に手をかけた。真冬なのに、お京の体温が、仙吉の体に快くとけ入った。

「お嬢さま……」

「うん、また。お京とお呼び……」

と、お京が両眼を閉じ、朱唇をつき出したときである。

「ふっふっふ、浅草の芝居でも、こんな濡れ場はみせちゃくれねえぜ」

桜並み木から、ぬっとふところ手をした遊び人ふうの男が、ニヤニヤ笑いながら、二人の前に近づいてきた。

「あッ……」

お京はあわてて仙吉の胸から身を離れた。

「な、なんでえ。遠慮なくひつついていたらどうでえ。それとも、娘さん、その男に代わり、このオレが色の道を教えてやってもいいンだぜ。ヘッヘッヘ、そんな青二才より、年期の入ったオレ様のほうが……」

男は好色にまなざしを光らせながら、お京のふっくらと実った乳房の隆起から、小股のきれ目へとみだらな視線を移しながら、ペロッと分厚い唇をなめ回した。

「せ、仙吉。ど、どうかして……」

お京が、仙吉のそでをつかんで恐怖におののいた。

「あたくしたちを、ど、どうしようというンです?」

仙吉は、お京をかばいながら、ジリジリッ

とあとずさった。

「ふっふっふ。見せつけられたお礼に、その娘をいただくだけよ!」

男は、そう言うのと、やにわにお京の右手をむんずととらえ、引き寄せた。

「あッ、な、何をするンです。は、離してエ」

「お、お願いです。お嬢さんだけは……」

仙吉は、しっかりお京の腕をとらえながら、必死に哀願した。

「うるせえ、おめえなんかに用はねえ、離しやがれ!」

どんと足げりにされた仙吉は、砂ぼこりをあげて倒れた。

「く、くそっ!」

仙吉は起き上がると、男に武者ぶりについていった。

「うるせえ野郎だ、てめえなんかがでる幕じやねえ!」

男は、お京を抱きすくめながら、サッと仙吉の股間をけりあげた。

「う、うう……」

仙吉は、だらしなく、大道にくずれた。

「仙吉……」

「静かにするンだ」

男は、泣きわめくお京に手をやくと、持っていたボロ手ぬぐいをぐいっと、お京の朱唇に割り込ませた。

「うッ、ううう……」

お京が、布を取り除こうともがいた。その手を逆にねじ上げながら、

「ヘッヘッヘ、いくらもがいても、駄目だぜ。おとなしくするンだ!」

ぐっとお京の手首をとらえると、用意してきたのだらう、細紐をとり出して、馴れた手つきで縛りあげた。仙吉は、起き上がると、よろよろと男にすがりついた。

「往生ぎわの悪い野郎だ。それほど命が惜しくはねえのか」

男は、お京を往来に投げ出すと、ピカリ七首のさやを払うと、グサリ、仙吉の脾腹をつき刺した。

「グエッ!」

仙吉がカッと苦悶の目を見開き、男をにらみすえた。

「けッ、薄気味の悪い顔をしやがって。早えとこ往生しな」

男は、仙吉の体を引きずると、ドボン、隅田川へと投げ込んだ。あたりはとっぷり暮れ、人通りはない。

「うッふッふふ、骨を折らせやがって。おつと、まごまごしてちゃ人目につくってコトよ」

ニタリと笑い、やおらお京を抱き起こすと、ピ、ピーと指笛を吹いた。それが合図なのだろう、一丁の駕籠が現われた。

女の取り引き

やがて、お京を乗せた駕籠が川沿いに向島とは逆に、蔵前へと矢のように消え去った。そして、蔵前を抜けると、西両国へと疾走した。

「おう、源太か。待っていたぜ」

駕籠から降ろされたお京は、縛られたまま一軒の商家の座敷に連れ出された。

「へッへへへ、遅くなりやんして。なんしろ、この女の色男ってえ野郎が手間どらせやがったもんで」

源太という遊び人がペコリ、でっぷり肥えた、見るからに精悍^{せいけん}そうな男に頭を下げた。

「いや、ご苦労だった。お待ちかねだ、すぐ土蔵へ……」

と、男は、気を失い、ゴロリと青畳にころがされているお京を見下ろして、アゴで促した。

「へエ、なに、一度でも、二度でも、テヘヘ旦那、こんな別嬪^{べっぴん}を抱けるだけでも……じや、押しこんでめえりやす」

源太は下卑^{げび}た笑いを発しながら、お京を軽と抱きあげると、廊下を渡り、裏庭へと運んだ。そこには土蔵が三つ、黒々と並んでいる。源太は、小脇にお京を抱えながら、片手でその一つの錠前をはずした。

「ふッふッふふ、いまにお前の好きな男に会わしてやるぜ、たんまり可愛がってもらうんだな」

それから半刻――

回漕問屋、庄田屋喜兵衛の奥座敷では、何やら密談がかわされていた。

「ハッハッハハ、そうと話が決まれば、女はあなたへ」

「いや、庄田屋さん、どうも、お手数料をかけた」

と口もとに微笑をただよわせたのは、若い商人風の男である。年のころは二十七、八、身なりこそ商人であるが、眼光が鋭い。

「いや、お互いに、生きているだけに欲がある。あんたは女、わしは小判がほしいのじや。伊与助さん」

喜兵衛がずるそうな目を細めた。商人は、

お京の店の番頭、伊与助だったのである。

「では庄田屋さん、お約束の金子を――」

「伊与助どの、しかと受け取りました。では女はどうぞご自由に。ご案内しましょう」

喜兵衛が伊与助を、さっきお京をとじこめた土蔵に案内した。

「源太、口の手ぬぐいをといてやれ。恋いこがれているムコ殿になろうとする人の前じや、ひと言、あいさつもしたいじゃろうに」

喜兵衛がニンマリ微笑を浮かべ、源太に目で合図した。

「へ、へイ」

源太が、よくれた手ぬぐいをお京の口からとり除いた。

「あッ、お、お前は伊与助！」

お京の朱唇から、怒りの言葉がほとばしった。

「ハッハッハハ、伊与助殿、生きのよい女を料理するのめたのしみなものじゃ、はよう連れて行って、櫛^{くし}の姐板^{まいた}で鮮魚を料理するのめまた一興。では、あっしはこれで失礼いたします」

マナ板しぼり

「伊与助、あたしを、私をどうするつもりな

の

「お京は、土蔵の古畳にゴロリころがされていた。」

「ふっふっふふ、お京さん、あんたもやがて十七歳、つまり立派な娘だ。オレが大金で、あんたを買い入れたことはわかったことだろう……うふふふ、めっほう色っぽくなつたぜ。オレは、前からあんたのその体を、この手でしっかり抱きてえと思っていたのさ。ところがお京さん、あんたはオレをきらい、板前の仙吉と乳くり合っていたんだ。だが、その仙吉は——」

と、ジリジリッと伊与助が、お京の肢体を眺めながら近づいた。

「伊与助、お、おまえが仙吉を殺させたんだね。鬼！ 悪魔！ おまえは人間じゃないわ。さわらないで、さわったら……」

お京は不自由な手足をそらし、あとずさりながら、狂人のようにわめいた。

「ふっふっふふ、わめけ、泣け、叫ぶがい。そのうち悪魔が、鬼が、好きになり、恋いこがれるものだ。うっふふふふ」

伊与助が、無気味な笑い声をあげながら、大マナ板を畳に倒した。それは、ちょうど人間が横になるくらいのもので、白木で作られ

ていた。

「お嬢さん、いやお京。オレがおめえをどんなに思っていたかを知らせてやるぜ。その紅い唇から、色よい返事をするまで、可愛がってやるぜ、ヒヒヒ、ヒヒ……」

「あッ、な、何を！ ヒイッ！」

伊与助は、お京の体を大マナ板にしっかりと縛ると、むんずと黒髪をつかんだ。髪が無残にくずれ、パラリとひたいに乱れ落ちた。

「美しい顔をよく見せるんだ。ほら」

伊与助が髪を手首に巻きながら、グイ、グイッと手もとに引きよせた。

「ヒエッ、あッ、伊与助、ヒイッ！ 許してエー」

伊与助の手に力が加わるたびに、お京の朱唇から悲痛なうめきと悲鳴がもれた。さらに髪が引かれると、お京の豊かな肉体がマナ板の上でそった。伊与助は、お京が下肢を張り、苦痛に耐えながら、背のびをするたびに割れてゆくすその乱れに、狂人のように目を光らせた。

「どうだ、まだ、このオレと夫婦になる気はねえのか。ウン、お京！」

手をゆるめると、伊与助はお京の顔をのぞきこんだ。

「だ、誰がおまえなかと……」

お京がキッと唇をかんだ。

「ふん、オレより板前の仙吉の肌が恋しいとみえるのオ。ふっふっふふ。だが、お京、おめえはマナ板の上に乗せられた人魚、どう料理しようと、このオレのこの手で——」

伊与助の嫉妬心がメラメラと燃えた。獣欲に狂った狂暴な目が、ランランと無気味に光った。

木馬とカニ責め

お京は、痛さと恐怖から失神した。だが、伊与助のお京責めは、次の計画へと、さらに準備された。

伊与助は、土蔵の隅から、古びた木馬を引きずり出した。

「そら、お馬に乗せてやるぜ」

お京の体をマナ板から抱きかかえると、そう言っただけで木馬にまたがせた。お京は、抵抗する氣力を失い、ガックリ顔を木馬の首に伏せた。薄紅色の湯文字が左右に割れ、透くような白い太モモが露出した。

「ウヒヒヒヒ……いい格好を見せてくれるぜ。だがよ、死人同様じゃおもしろくねえってコトよ。どら、そろそろ目を覚まして、い

い声をはりあげてもらうか」

伊与助は、お京の丸く、形のよい臀部を見
すえながら、ニヤリ、残忍な笑いをほおにう
かべると、こんもり盛り上がった臀部をめが

けて、ハッシとムチを打ちすえた。

「ヒエッ！」

悲鳴をあげるお京は、失神からよみがえっ
た。

「そら、踊るんだ……尻踊りを……それ、そ
れッ！」

ピシリ、ピシリ、弓の折れで造られたムチ
がお京の臀部に牙えた音をたてて食いこん
だ。肉づきのよい臀部が左右にゆれた。

「あッ、か、かんにんしてエ」

お京は美しい顔をゆがめながら、伊与助に
哀願した。ひたいには黒髪がたれ、玉のよう
な冷や汗がにじんでいる。

「ふッふッふふ、とうとう音をあげたな。だ
が、色よい返事をするまでは……」

「あ、ああ……ヒエッ、ヒエッ！」

情け容赦もなく、伊与助のムチは振りおろ
された。

「うッふッふふ、お京、お前の体で一番美し
いのは、ほれ、この尻だ！ それ、もっと踊
るがいい。踊るのじゃ！」

伊与助は、狂人のように、豊かなお京の尻
へとムチを打ちすえた。

「あッ、あッ、伊与助、あたしは……死んで
も、おまえなンかに……」

そう言っではみたものの、男の力でうちす
えられるムチの痛さには耐えられなかった。

「ううッ」

お京はうめくなり、がっくり木馬に首をた



れると、ふたたび失神した。

と伊与助がお京の顔をねじ向けた。

伊与助は、湯のみ茶碗を引き寄せると、塩水を口にふくんで、お京の朱唇を割り、口うつしに流しこんだ。そのような仕草が幾度かくりかえされた。ヌメヌメとお京のほおに水滴がたれ落ちた。

「う、ううう……」

お京は、胃の腑に流れこむ塩水のニガさから、よみがえった。目の前に、伊与助の野獣のようなまなざしが、無気味な色で光っていた。男の部厚い唇が、グッとお京の顔に大寫しに近づいた。

「アッ！」

お京は、乙女の本能から顔をそむけた。

「ヒッヒッヒ、いやだといっても、ほれ、こうお手々を縛られては、どうにもなるめえ。さ、おとなしくオレの言うコトを聞くんた。それとも、もっとおもしろい踊りを見せるか」

伊与助のあぶらぎった手で顔をねじ向けたお京は、口惜しさから歯をくいしばり、「あたしの体に手を触れてみな。伊与助、あたいは死んでやる！」

ペッと、お京は、伊与助の顔にツバをかけ

た。

「う、うぬ。このアマ！」

伊与助は、青すじをひたいに立てた。

「ふっふっふ。死ぬもよい。だが、この世の別れに、いいみやげ物をお前の体に贈ってやる。ウヒヒヒ……」

伊与助は、ニタリ、気色の悪いえみをほおに刻ませると、手桶を持ち込んだ。

「お京、カニと戯れるのじゃ。そら、それ、這うがよい。遠慮はいらぬ。もそっと、中へ這いこむのじゃ」

伊与助は、まるで人間に言い含めるように、カニを手桶からとり出すと、小ガニを、お京の柔肌に這いこませた。

モソモソ、ザラザラ、カニは、お京の下肢を這い、湯文字のなかへともぐりこんでいった。五匹、六匹、つぎつぎと放たれたサワガニは、お京の股間でハサミを立てた。

「あッ、あッ、ひ、ひーッ」

お京は、おそろしさから、派手な悲鳴をあげながら身をのたうたせて苦悶した。

「ウッ、ヒッヒッヒ……それ、乳房にも這うがいい」

伊与助は、さらにお京の胸を割ると、幾匹かのカニをふところ押しこんだ。

「ヒイッ！ うッ、あッ、ヒューッ」

カニが女性の神秘的な地帯を這い回るとき、お京は、海老のように五体を曲げ、さらに苦痛の叫び声をあげた。

「どうじゃなお京。そろそろ、オレの意に従ったほうがいいんじゃないか。これ、お京」

と伊与助は、手桶を投げ出すと、ガッと背後からお京を抱きすくめ、お京の乳房を握ったときである。

「グエッ」

伊与助は、奇妙なうめき声をあげると、どっとのけぞった。

と、そこには、血に染まった出刃包丁を握った男が立っていた。男は、隅田川べりで、横腹を刺され、死んだはずの板前の仙吉であった。

「野郎、おめえは仙吉か」

血に染まりながら、伊与助は、苦痛に顔をこわばらせながら、目をむいた。

「よ、よくも、おれを殺そうとしたな。そのうえ、お嬢さままで手籠にしようとは、く、くたばれ！」

さらに、仙吉の出刃は伊与助の腹部をえぐった。

遠くで犬が吠えていた。

女をいじめた思い出



藤 川 潤

初恋少女を虐める

女をいじめてよろこびを感じる心理は、ふつう正常な神経をもっている男にも、多かれ少なかれ潜在しているものです。愛するがゆえに、その相手をいじめるということは、確かに「変態」といわれる行為かもしれませんが。けれども、これは、本能的なもので「征服欲」というものがそうしたかたちをとってあらわれたものです。

私が嗜虐的な感情に目ざめたのは、小学校五、六年の十二、三歳のころでした。もちろんその時は、それがサディストチックな感情であるなど意識したわけではありませんが、私はそのとき、確かにある種の肉体衝動を感じ、隔然と夢ごこちを味わったのでした。

私は、そのころ級長をしていましたので、ちよつとむずかしい予習や宿題があると、女生徒の誰かから、放課後になるときまって「宿題を教えてちょうだい」と懇請され、その生徒の家へ呼ばれて行ったものでした。その日も、副級長のA子の家へ呼ばれ、仲よしのK子やF枝

たちをまじえて宿題の算数をやっていたのです。

この三人の女生徒のうち、K子は、誰よりも愛らしくコケツトな容貌でしたが、勉強になるといえば駄目、理解力も劣っていました。ところが、K子は妙におとなびたところがあって、その姿態や仕草がひどく私をひきつけていたので、クラスの女生徒と勉強をする時などは、必ず彼女を誘うのでした。

この日も次々に宿題が片づいて、あと二題ばかりやればいいのでしたが、K子はとうに勉強に飽きてしまつて、いつものように、あとは私にそれをやらせようとするのでした。

「ねえ、これ教えて」

といって、例のごとく体をすりよせ、甘えた声でいうのでした。

それがどういう動機であったか、私には皆目わかりませんでした。K子のちよつとのおどろいた白い胸のあたりを見ると、何かわけのわからない情感がこみあげてきました。

「駄目だよ。自分のことは自分でやらなくちゃ。次の問題ができないと徴罰にするよ」

私は、K子のその白い胸のあたりをのぞくようにして、いつになく冷たくいい放ちました。そのあとの二題というのが、じつは、私にもむずかしいと思われる問題でしたから、むろん、K子にそれができるはずがありません。

「むずかしいわ、こんな……」果たして、K子は初めから投げだしてしまいました。私が教えてくれそうもないと思ったので、

「あたし、帰るわ」

といって、K子はさっさとノートを片づけ始めました。

「いけない、帰さないよ。宿題ができれば徴罰にするよ」といって、あたしは帰らないか」

私はそうやって、A子に命じて麻縄を持ってこさせ、それでK子の体を縛りつけてしまいました。そして、そして、A子とF枝の見たる前、子供としてはかなり大胆なことをしてK子はいじめたのですが、しまいには、A子もF枝もこれに同調して、さんざんいじめたので、K子はとうとう泣きだしてしまいました。たいいていの子供の場合だったら、相手が泣きだすと、それで

その遊びはおしまいになるのですが、私のお仕置きは、K子の泣きだしたことによって、いっそ興味をあおりたてられ、こんどは手ぬぐいでさるぐつわをかませて彼女の体をくすぐったりしていいじめつけたのです。このとき私は、おぼろげながら、ある衝動を身内に感じたことを、いまでもおぼえているのです。

モデルにも羞恥心

私は、知らずしらずのうちに、自分の好みの女性をこしらえあげて、大学時代には、かなりの女性と交渉をもったものです。が、太平洋戦争のため、鬱勃たる気持ちのまま、青春時代のなかばをブランクにしてしまったのです。

学生時代に収集した東西の文献や絵画もかなりあったのですが、その時代の風潮から、やむなく一応整理してしまったことも原因して、私は、そうした環境からまったく遠ざかってしまったのでした。ところが、それが戦後の、がらりと一変した世相のなかにほりだされてみると、私はふた

たび嗜虐の興奮に陶酔する自分を意識するようになったのです。

まず私の目をおどろかせたものは、性雑誌といわれる一連のカストリ雑誌や、ストリップ劇場などで責めをテーマにした写真や演劇を載せたり上演していることでした。そして、私は、それらの雑誌や演劇に取材される責めや拷問の内容に、ひどい間違いやウソを発見して、どうしても、自分の手づくりだし、たナマの記録写真を発表しようと考えたのでした。というの

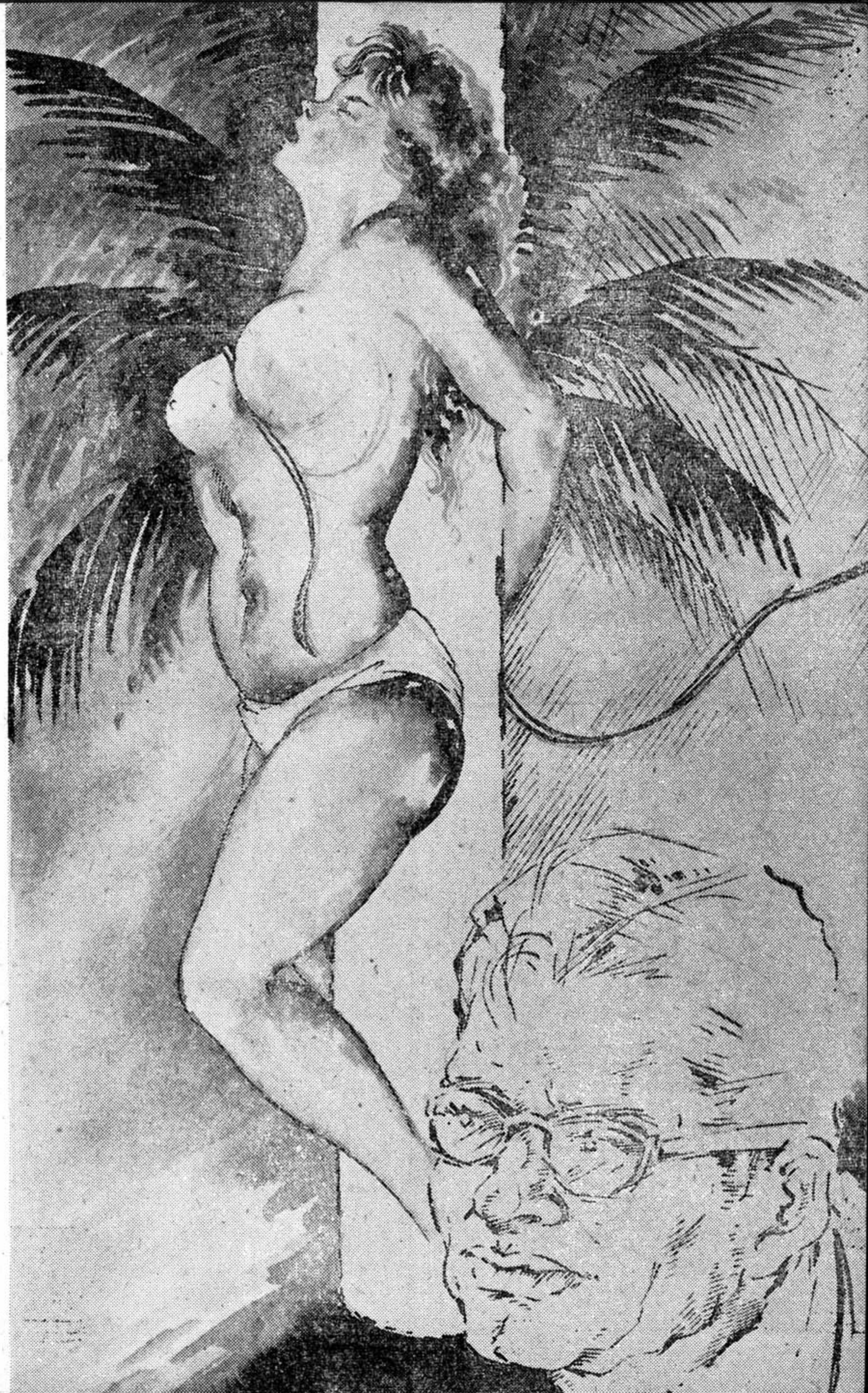
は、こうした雑誌や演劇の、それを売り物にしてひともうけしようとする商人根生（こんじょう）に一矢むくいてやろうと考えたレジスタンスからだったのです。いまでもこそ、責めや拷問の写真をとろうと思えば、東京中に何十軒となくあるモデル斡旋（あつかん）のスタジオへゆけば、専属のモデルはいくらでも捜せるはずですが、戦争前には、そういうモデルなどほとんど皆無（みな）といっていいほど見たらなかつた。だから、そういうモデルを捜すには、特別な交渉をもってからでない、と至難なわざだったの

です。むろん、金銭づくで、初手（はつて）から口説き落とすことはできなかったもので、モデル捜しには血のどろくような思いで苦心したものでした。そのかわり、いったん体の交渉をもつてしまおうと、ウソのないギリギリの記録がカメラにおさめられた。

いうまでもなく、表情もリアリティに、そのままの情感を内包（ほうく）しているし、第一、縄の掛け方などにも遠慮などいらなくて、緊縛感が意のまま見られるのです。もちろん、マゾヒストである相手の女は、縄をかけるにも肉体の苦痛感がともなわなければ満足しないだろうし、シャッターを切る前には、いずれ特別交渉につながる行為があつてのことですから、いきおい表情にも、自然、その感情があらわれ、構図の構成や雰囲気にも、おのずから迫力のあるものがとれることになるのです。そのうち、某スタジオから紹介されたMというモデルが、写真をとって帰ったあとで、撮影用につかつた衣類や下着を片づけていると、下着の一部に女の情感をとどめた痕跡（こんせき）の残されていることを発見したのでした。

男がサディズムの傾向を本能的にもっているのと同じように、女がマゾヒズムのそれをもっていることはいうまでもないことです。初めは「縛り」など経験がないからと、キョトンと目をまるくして、し、う、い、な、しに手をうしろにまわしたモデルも、いくどか縛ったり解いたりしているうちに、いつしかそういう情感にさそいこまれてゆくものです。

しかし、このMというモデルのように、こんなにハッキリとそれを見せたのは、ふつう特別交渉というものをもたない職業モデルとしては、確かにめずらしいことだったのです。そこで私は、もういちどこのモデルを採用して、まずあつさり何枚かのシャッターを切つてから、わざと下ばき一枚にして、さらに強く縄をかけ直し、ある連想を起こさせるポーズをつけて何枚か切つたのです。彼女は、そのポーズに苦痛のともなう無理があればあるほど、しだいに美しい顔を紅潮させて、目にはなんともいえない色気のあるうるおいを見せてくるのでした。



ピシリッ！ 鞭は残酷な音をたて、裸にむかれた女の白い肩先に鳴った。女は悲鳴をあげ、胸がのけぞり、二つの乳房が大きくゆれた。

悦虐クラブの女

青山三枝吉

田上恵子・え

△1▽

週刊「風俗実話」の特ダネ記者、笹木恵一の左の奥歯がまたシクシクうずきはじめた。虫歯だった。酒も飲めなかった。血液にアルコールがまわると、ズキンズキン痛むのだ。

歯の治療なんて、よほど痛くなるまでは、たいてい誰でも放っておき、ひどくなってから、あわてるものだ。

笹木恵一は、左手で左のアゴをおさえ、顔をしかめながら、数寄屋橋フード・センターを歩いていた。相変わらずの雑踏だった。

すると、ぱったり友人の三島に会ったのだ。

「いよう、しばらくだな」

恵一は、調子よく三島の肩をたたいた。

「しばらくだね」

三島はしかし、なぜか弱々しい微笑でこたえた。

「五年ぶりかな。どうだい、その後、仕事のほうは？」

「どうも駄目なんだ。ぼくにはどうも、才能がないらしいよ」

三島は、青白い顔でこたえた。この男は、純粹の油絵描きだった。

が、それでは食えなくて、商業美術に転向した。しかし、交際下手

で、絵画に対してあまりにも純粹な精神をもつ三島が、いまさらコマ

ーシャル・デザイナーになったところで、繁盛するわけではない。

笹木恵一と三島は、近くの喫茶店で三十分ばかり語りあった。

だが、三島は多くを語りたがらないようすで、その顔色には、なにやら生活の疲れのような陰影もみえていた。

話題も尽きて、腰をあげかけた恵一が、また左頬に手をあてていった。

「あ、そうそう、きみ、痛くしないで治療してくれる歯医者者を知らないかなア」

「さあ……痛くても痛みを感じさせない医者なら、知らないこともないが……」

「痛くても痛みを感じさせない？ それはどういう意味だい？」

「つまり、女医さ。きみのことだから、若い女医になら、歯を削られても痛くないと思うんだが……」

「ふうん、なるほど。——で、美人かい、その女医さんは？」

恵一は膝をのりだした。

「まア……美人だろうね」

三島は、また弱々しい暗い微笑をうかべ、細い白い指で、長い頭髪をかきあげた。

その翌日——。

恵一は、さっそく、その美人女医を訪ねた。

東京駅八重洲口を出て、電車通りを突ききり、南へ五分も歩くと、大通りから横に入ったところに小さなビルがあった。いまだき、あまりはやりそうにもない、茶褐色にくすんだ、みすばらしい三階建てだった。

その古ぼけたビルの二階に、めざす歯科医の看板がでていた。

なるほど、美人だった。年は二十五、六。

山本富士子からつめたさをとり除いて、淡島千景の愛嬌を加えたような美貌だった。白衣を着せておくには、もったいないようなお色気があるのだ。

「やア、きれいだなア、こいつはびっくりした。こんなぼろビルの二階へとじこめておくのはもったいない！」

週刊誌の記者なんていうのは、ずうずうしくて無遠慮な人間ばかりが揃っている。恵一は第一印象をズバリといった。

「失礼ですよ。そんなことをおっしゃると、うんと痛くしますよ」

女医は、やさしくにらんだ。女としては成熟しているが、まだ学校をでてからいくらもたっていないらしく、どこことなく医者としての落ち着きがなかった。

——三島のやつ、たいした歯医者者を教えてくれたな。これで当分のあいだ、たのしめる。

白衣の胸の左右が、こんもりと二つふくらんでいた。形のよい白い指が、恵一の唇に触れる。鼻さきをくすぐる、あまい香水。

治療第一日は、やはりすこし痛かったが、口をあけて美人のいいなりになるのは、悪い気持ちのものでなかった。

——まさか、歯医者でたのしめるとは思っていなかったな。

三流週刊誌の特ダネ記者は、どうも女にはだらしがなかった。

△2▽

その夜、笹木恵一は、さっそく銀座で飲んでいた。はじめて入ったバーで、ドアの横に赤煉瓦がやたらと積んである店だった。

歯の痛みがとまると、すぐ自省心のなくなる男だった。ここ十日ばかりの禁酒のあとで、酔いもまわり、すっかりいい気分になった。

と——一人の女が、恵一の横に、すうッと寄ってきた。知らない女だ。この店の女給ではない。一見ファッション・モデルか、化粧品会

社のマネキンといった感じの若い女だ。

「ねえ、あなた、すてきなところへご案内しましょうか。二万円ほどお持ちなら、あなたがいままでに見たこともないような、おもしろいお遊びができますわ」

女は、恵一にからだをすり寄せ、そんなことをささやくのだ。

——おや？

と、恵一は警戒した。この女は、スリの目をもっている。恵一のポケットには、今夜二万円ばかりの現金が入っていた。内職に、よその週刊誌へ売り込んだ実話ものの原稿が、きょう、金になったのだ。

「ふふふ……」

恵一の警戒の目を、すばやく読みとった女は、なまめかしい、ふくみ笑いをした。そして、膝においてある小さなバッグから、一枚の紙片をだして、恵一の前においた。

名刺ほどのカードだった。縄束と皮鞭の絵が、くっきりと凸版で印刷されている。その片隅に小さく数字が書きこんであった。電話番号らしかった。

「こりゃ、なんだい？」

思わず、恵一はきいた。

「そこへ電話してごらんなさい。きっと刺激的な一夜がおすごしになりますわ」

そういうと、女はいきなり立って、このバーをさっさと出ていった。声をかける暇もなかった。

「ちえッ、なんだい、あの女は」

白線組織のセールスマンか、いずれそんなところだろう。

恵一は、カードを指さきではさみ、カウンターの電話まで歩いた。

カードに書かれてある番号をまわした。もとより、いたずら半分の気持ちだった。

すると——

「今夜十一時半に和田倉門前でお待ちください。あなたを、陶酔と興奮の悦虐クラブへご案内します。いま、あなたが手にしておられるカードと、一万円以上の現金をお持ちのうえで……」

電話のむこうで、さびついたように低い、男の声がした。

「陶酔と興奮の悦虐クラブか、フーン！」

恵一に、むらむらと好奇心が湧いた。

——おれのポケットに、二万円入っているのを見ぬいたいまの女、さらに、おれの人相に好色の気ありと見ぬいた女、なんと心にくいじやねえか！

恵一は、思わず苦笑した。

バーのマダムに、いまの女を知らないか、と一応きいてみる。

「さあ……」

と、マダムは首をかしげた。

知っているとしても、知っているとは答えるはずはない。こいつはやボな質問だったな、と恵一は思った。

△3▽

十一時半。皇居前外濠付近は、すでに深夜の静けさだった。

恵一は、言われたとおりに、和田倉門前で待っていた。からだにアルコールが入っていなければ、とても寒くて立っていられただけではない。

と——一台の黒塗り高級車が、音もなく滑り寄ってきた。

——こいつだな。

恵一は直感すると、れいのカードをだしてみせた。車のドアがあいた。

招くままに恵一は乗りこんだ。車内には運転手のほかに、もうひとり、男がいた。

「カードは、こちらへお返してください」

男は、恵一の手から、ひったくるようにカードを取りあげると、自分のポケットにおさめた。これは、あとに手掛かりを残さないための用心らしかった。

——しまった、電話番号をひかえておくんだった！

恵一は後悔した。

「失礼ですが、これを掛けてくれませんか」

男は、恵一に黒メガネを渡していった。いやとは言わせぬ口調だっ

た。なにげなく、そのメガネをかけて、恵一はおどろいた。

ただの紫外線よけのメガネではなかった。なにも見えないのだ。レンズに黒い紙がベッタリはりつけてある。

——くそッ、手のこんだことをしやがる。

つまり、これは目かくしであった。

車は、町の角をいくども曲がりながら走った。同じ場所を、ぐるぐるまわっているようにも感じられる。

恵一は、頭のなかで丸の内銀座界隈の地図を描いた。車の方向をとらえようとした。

しかし、無駄だった。頭のなかの地図は、まもなく混乱し、わからなくなった。

やがて、車がとまった。乗ってから、七、八分。あるいは十分以上だったか。いずれにしても、銀座付近にはちがいがなかった。

車のなかで、恵一は、悦虐クラブの入会金一万円をとられた。

——このまま車から放りだされても、それまでだな……

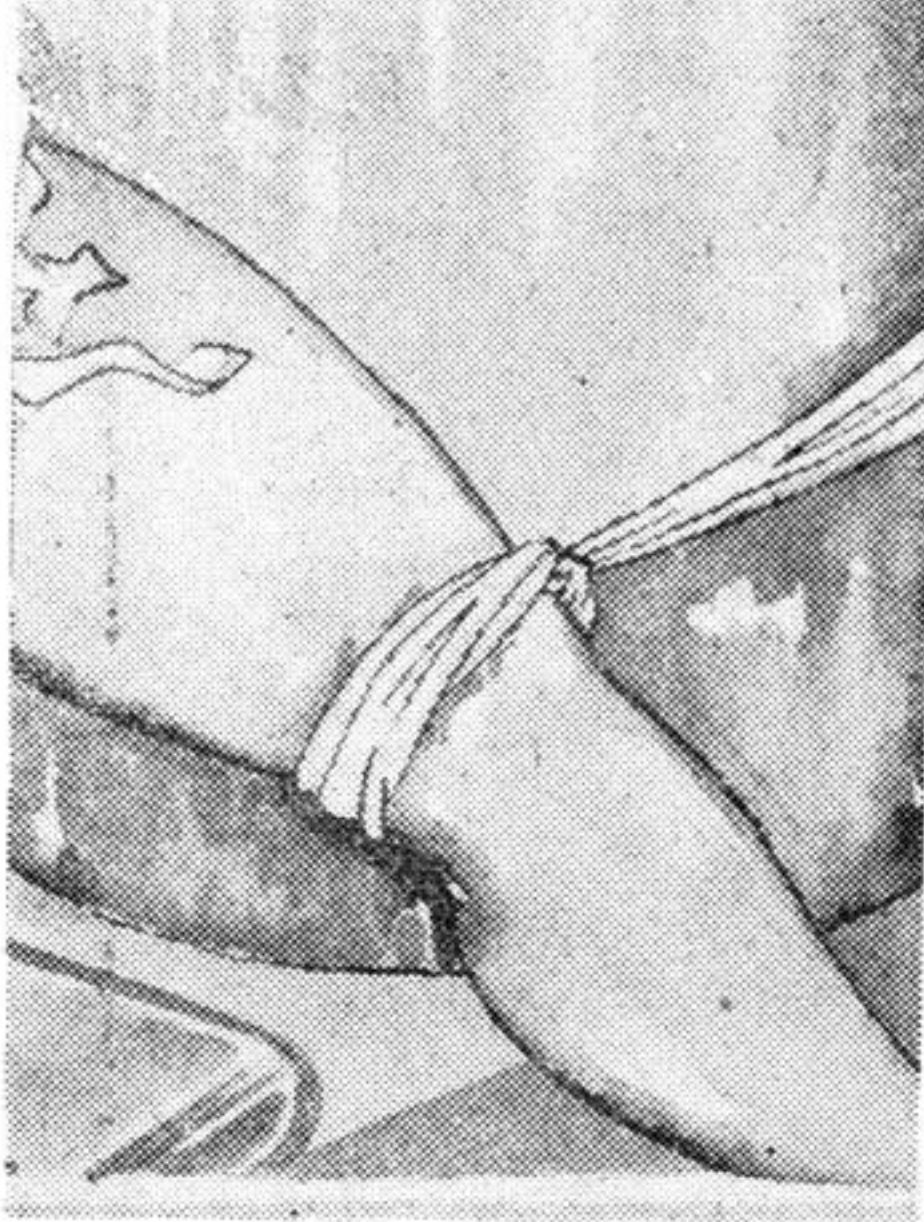
と、恵一は思った。ふと、不安に襲われた。

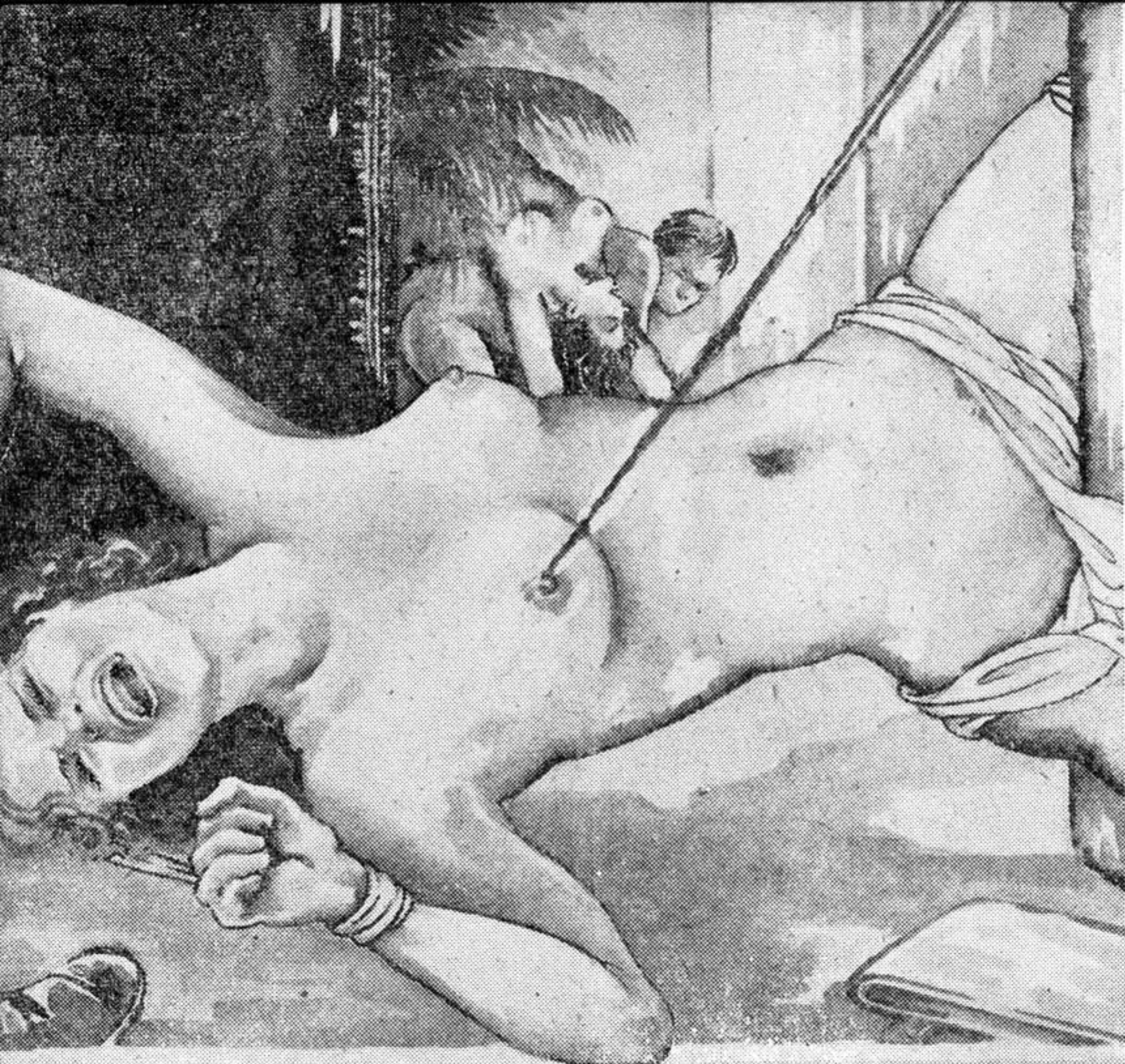
しかし、恵一は、黒メガネのまま、男に手をとられて車をおりた。そして、夜空に黒くそびえるビルの中へ案内された。

コンクリートの、せまい階段を、コトコトと靴を鳴らしおりました。地下室らしい。おりきったところで、恵一はやっと黒メガネをはずすことをゆるされた。

じゅうたんを敷いた廊下があり、ドアがあった。案内の男が、そのドアを押した。

——ここか！





恵一の胸に、はげしい好奇心がうごいた。

かなり広い部屋に、恵一は足を一步踏み入れた。部屋というよりは、ホールといった感じだった。どこか地下室の喫茶店らしい装飾と照明と、椅子テーブルがあった。

そしてこのホールでは、すでに絢爛たるショウがはじまっていた。

客らしい男は、二十人もいるだろうか。立派な身なりの、一見紳士ふうといった客ばかりだった。

——こいつアすげえ！

口のなかでさげび、恵一は息をのんだ。

紳士たちの一人一人が、それぞれ、あてがわれた女と一緒に、その遊戯に没頭しているのだ。どの紳士も、もう夢中だった。恵一のほうをふり返る者は誰もいない。

お客が一人に、女が一人——これは当然の一組といえよう。しかし、ここにはダブル・ベッドも、二人だけの個室もなかった。

ベッドの中におけるありふれた戯れよりも、さらに強烈で、刺激的な交歓が、ここにくりひろげられていたのだ。

当然のことながら、女たちはすべて若く、みずみずしい四肢をもっていた。よくもこれだけ粒をそろえたと思うほどだった。ほとんどが半裸の肌をさらし、なかには全裸の女もいた。

高価な金をだして自分が買い求めた一夜の女を、この遊びに馴れた紳士たちが、いま縄をもって縛りあげているところだった。

恵一の目には、悪夢のような妖^{あや}しい光景に映ったのだ。

△4▽

熱っぽい空気が、このホールの隅々まで充満していた。

およそ二十人の紳士たちが、同じく二十人ほどの女と、ひしめきあって悦唐の遊びにふけているのだ。

女をうしろ手に縛りあげ、椅子にぎりぎりとかくくりつけている紳士。テーブルを逆さにして、女の手足をカエルのようにひろげさせ、テーブルの四本の脚にくくりつけている紳士もいた。

ホールの中には、天井をささえる丸い柱が数本立っている。その柱に女を縛りつけている紳士もいた。

男と女のかわす短い言葉や、縄に力をこめるときに発するかけ声が、ざわざわと入り混じっていた。嘆声、嬌声、うめき、吐息、かすかな悲鳴などが乱れ、異常な情欲的な雰囲気をかもしだしているのだ。

女たちは、よく訓練されていた。

縄でむごたしく縛りあげられても、逃げようとしなかった。くすぐられて「いやッ、いやッ」というような声をあげても、それは嫌悪でなく、なまめかしい嬌声だった。

——女たちにとってこれは商売なんだ。すこしの窮屈さと苦痛をがまんすれば、一夜でかなりの収入があげられる、割りのいい商売なんだ！

恵一は、そう思った。全身に職業意識が燃えあがった。これはネタになる！

去年封切られたイタリア映画の傑作「甘い生活」の日本版が、いま

ここに展開しているのだ。

「もしもし、お客さま。この女性が、あなたさまのお相手をつとめます」

恵一の背後から、男の声がかけられた。

「そうだった、おれも客だったんだ」

恵一はふりむいた。さっきの案内係の男だった。男の横には、一人の若い女が立っていた。

うすいナイロンのガウンをつけていた。輝くような桃色だった。そのガウンのかけから、すすくとのびた白い肉体が溢れるようにのぞいていた。目の大きい現代的な容貌で、あきらかに美人の部類に属した。

「よろしく」

といって、その女は微笑した。その笑顔に暗いかけは一片も見えなかった。無邪気に美しかった。恵一はなんだか、とてもうれしくなった。

「縛るなり打つなり叩くなり、あなたのご勝手です。ただし、肌に血のどるほどの傷はつけないように気をつけて——。では、これを受けとってください」

といって、男は、恵一の手に、縄の束と一本の皮鞭を渡した。

「さあ、なにをなされてもいいのよ。あたしの名は千春。どうぞよろしく、お手やわらかにね」

女は軽く頭をさげ、また微笑した。

「縛ってもいいのかい？」

恵一はきいた。

「ええ、もちろんよ、どうぞ」

千春はこたえた。そして桃色のガウンを、するりと肩からすべらした。

ブラジャーとパンティーだけの、まぶしい肉体が、恵一の鼻のさきにひろがった。

張りきった艶のある肌をしていた。若々しい肉づきは、齒をあててかぶりつきたいほどだった。

——たまたねえ！

恵一はうなった。縛る、ということは、この女の自由のすべてが、まちがいなく自分のものになる、ということなのだ。

一本の縄——生のない縄にこめられた、なんという魅惑的な魔力。サディズムの遊びについて、恵一はとくべつに深い感覚も関心もないが、いざそれが手の届くところに現われると、その妖しい刺激に圧倒された。

△5▽

恵一の理性は、しかし、かろうじてその誘惑に耐えた。

——なにしろ、資本がかかっているんだからな。せめて、二、三倍にして返していただかなくちゃ、特ダネ記者のめんぼくがたたねえ！

いつのまにか酔いはさめていた。恵一は女の手首をとって、ホールの壁際にあるソファに腰をおろした。

「ねえ、千春くん、今夜はきみにラクをさせてあげよう。こうしてぼくに会ったのも、なにかのインネンさ。きみを縛らなくなったって、ぼくはこうして、きみとソファに並んですわっているだけで満足なんだ」

恵一はいった。

「まあ、お口がうまいのね。でも、それじゃつまんないわ」

千春が、鼻を鳴らしてこたえた。

「縛りたいのかい？」

「うん」

千春は少女のようにこたえた。

「縛られて、痛くないのかい？」

「そりゃ、痛いことは痛いわ。でも、キモチいいこともあるわ」

「ふうむ」

ここにいる女たちは、みんなマゾヒストにしたてられているのか

——恵一は感心した。

「ねえ、千春くん、ちょっときくけど、このすてきな悦虐クラブを経営しているのは、どんな人物？」

しかし、この恵一の問いに、千春は微笑して無言だった。

恵一は、この異常なクラブの内情について、つぎつぎに質問を發した。

千春は、巧みにその返答をはぐらかし、ごまかした。特ダネ記者の執拗な追究をはぐらかすのだから、相当なものだった。

——ううむ、よく訓練されていやがる！

恵一はまたうなり、舌うちした。

そのとき、恵一の目が、なにげなく前方を見つめて、ぎくりと光った。

中央の丸柱に縛りつけられた女が、いま重役タイプの老紳士から、鞭を受けるところだった。女はパンティー一つの裸身だった。

びしりッ！

鞭は、残酷な音をたてて、その女の裸にむかれた白い肩さきに鳴った。

「ひいッ！」

女は悲鳴をあげた。胸がのけぞり、二つの乳房がゆれた。その悲鳴のなかに、歓喜のひびきも混じっていることが、恵一にもはっきりわかった。

恵一が、ぎくりと目を光らせたのは、その残酷な鞭打ちのためではなかった。

この悦虐クラブに雇われている女たちのなかでも、ひととき美しい容貌と肢体をもつその女に、見覚えがあったからだ。しかもそれは、遠い記憶ではなかった。

「あッ、あれは、あの歯医者じゃないか、あのきれいな女医さん！」思わず腰を浮かし、声をだした。

だが恵一は、すぐに首をふって否定した。

まさか、あの女医が、こんなアブノーマルの組織に……

否定しながらも、恵一は夢をみているような錯覚におちいった。似ている！ 他人の空似そっくりというには、あまりにもよく似ているのだった。

——おれは、まだ酔っぱらっているんじゃないだろうか？

恵一は、自分で自分の頬を叩いた。痛かった。

「あら、あなた、なにしているの？ おかしな人ね」

恵一の肩にもたれている千春

が、けたたましい声で笑った。千春の盛りあがった乳房が、重たくはずんだ。恵一の手が、思わずそこにのびた。千春のからだだが、やわらかくくずれてきた。女の体臭に、恵一はむせた。

△6▽

翌朝——。

ふたたび黒メガネをかけられて車に乗せられ、ぐるぐると走りまわったあげくに、恵一は皇居前の広場へおろされた。

まだ早朝だった。

必死の坎を働かせたが、どこをどう走って戻ってきたのか、どうしても思いだせなかった。

まったく巧妙だった。あの地下室の悦虐クラブは、銀座丸の内界隈かいの、いったいどの辺にあるのだろうか。

——特ダネ記者の笹木恵一も、どうやらヤキがまわったらしいな。あきらめて苦笑し、恵一は自分のアパートに戻った。

ちょっと遅刻するからと社に電話をかけ、寝不足をとりもどすために、ベッドへもぐりこんだ。



十一時を過ぎると、目がさめた。昨夜のことが、また悪夢のように思いだされる。

——そうだ、まず、あのきれいな歯医者のところへいくんだ！

恵一は、勢いよくとび起きた。八重洲口でおり、都電通りを突っきって五分。茶褐色にくすんだ古ビルの二階。恵一は、看板の下に小さく書いてある女医の姓名を読んだ。

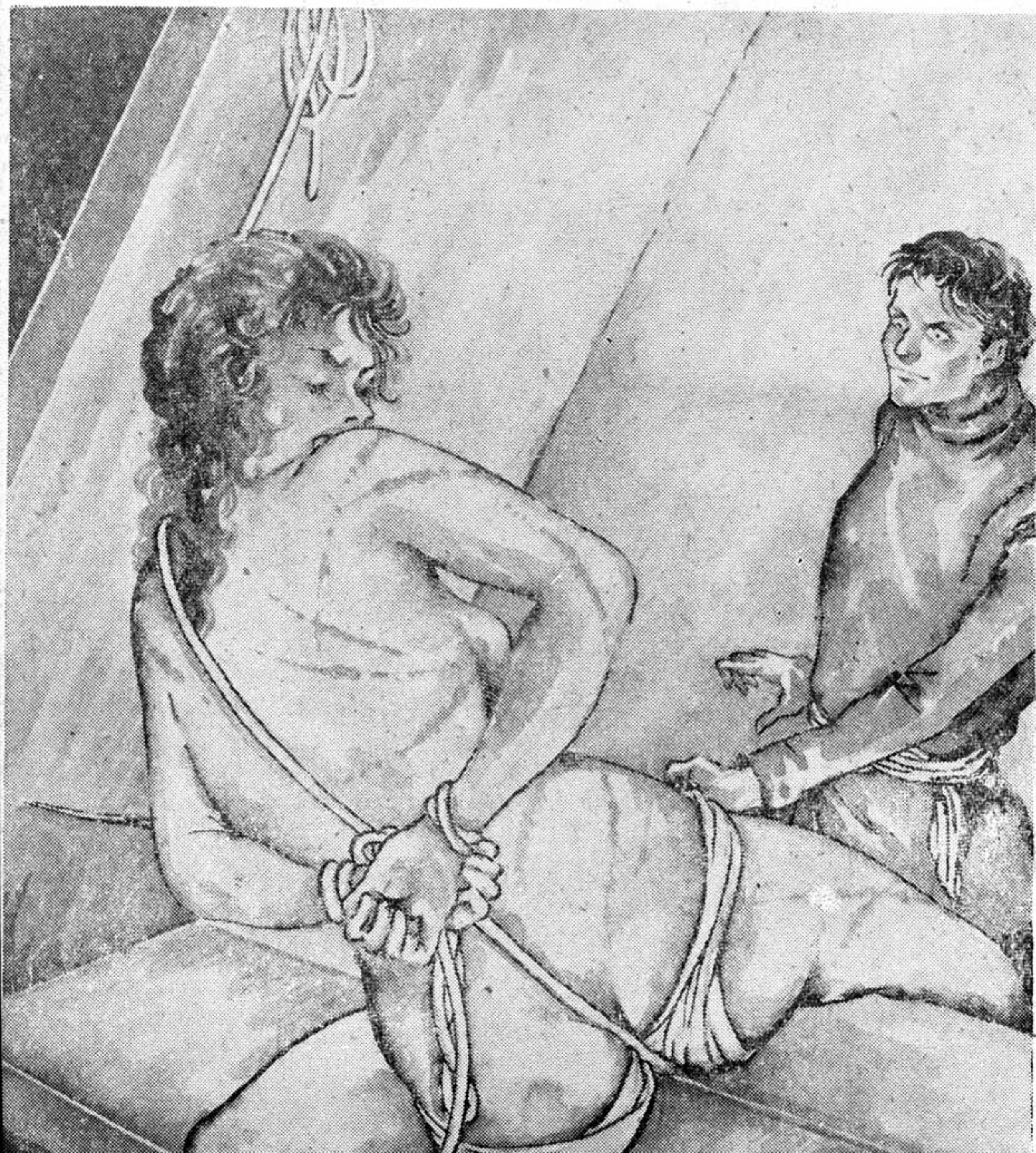
菊村正子——とあった。

その菊村歯科のドアを押すと、白衣をつけた美しい女医が、きのうと同じポーズで、患者を待っていた。

「こんにちは、先生」

頭をペコリとさげて、恵一はまっこうから女医の顔を見つめたが、やっぱり昨夜の、あの柱に縛りつけられ、歓喜の鞭にうめいていた女に似ているのだ。そっくりなのだ。

「ねえ、先生。ゆうべ、ぼくはね、先生にそっくりの女性に会い



ましたよ」

恵一は、つとめて軽い調子でいった。しかし視線は、注意ぶかく女医の表情をうかがっていた。

「どこですか？」

「それがね……残念なことには、どうもその場所がよくわからないんですよ」

「なんだかおかしなお話ね。ゆうべはわたくし、早くから自宅^{うち}で寝ていましたわ。ちょっと風邪気味だったので……」

つめたい微笑を頬にうかべて、女医はいった。

さすがずうずうしい週刊誌の記者も、彼女にむかって、昨夜の悦虐クラブの話をする勇氣はなかった。

菊村女医は、恵一の口をあけさせ、虫歯の治療を熱心にはじめるのだ。

——このセンセイと、あのマゾヒストの女とをダブらせて考えるのは、どうも飛躍しすぎる推理かも知れんな。……もしかすると、このセンセイに、よく似ている妹か姉がいて、それが墮落して……

恵一の空想は、果てしなく発展した。

「ねえ、先生。先生には妹さんか姉さんがいるでしょう？」

口にだして、恵一はきいた。

「おりません。そんなことをきいて、どうなさるんです」

そっけない返事だった。美しい女医は、気むずかしい表情になった。

二日目の治療は終わった。

その足で恵一は、神田にある、週刊風俗実話社へ出勤した。

そしてすぐに、三島が勤務している、新橋の商業デザイン社に電話

した。どうも気がかりでならないのだった。

「ああ、もしもし、やあ、三島君か。じつはね、きみがおととい紹介してくれた女の歯医者さんね、あの人はいったい、いかなる過去をもつ女性かね？」

「歯科医としての腕はどうだった？ 痛くはなかっただろう」

三島は恵一の質問をはぐらかした。

「うむ。少々は痛くとも、なにしろ彼女は美人だからね。——ところで、あの女医さんはどんな……」

「ぼくは、くわしいことは知らない」

さえぎるように、三島はいった。

——おや、こいつ、なにか知ってるな？

恵一はいぶかった。三島とあの女医とは、なにか関係がある……職業的なカンだった。

「おれが誘惑してもいいかね」

ガラリと質問の調子を変えて、恵一はわざとおどけていった。

「さあ、どうかなあ……。でも、きみの手におえるような女性ではないかも知れないよ」

三島の声には、嘲笑に似たひびきを感じられた。あるいは、自嘲とも思えた。

——変だな、なにかある、どうもなにかありそうだぞ。

恵一は、受話器を置いて首をひねった。

△7▽

それから、一週間ばかりたった夜。

恵一は、三島の家を訪ねる決心をした。

おもてむきは、彼に、週刊誌へのせる小さなカットを頼むためだった。

しかし、真の目的は、三島とあの美しい女医との妖しげなつながり確かめたいための、記者根性がうごめいていたのだ。

池袋から私鉄にのって、二十分ばかり行った郊外。まだひらけきってない閑静な土地に、三島の自宅があった。五年ほど前に、恵一はこの家を訪ねたことがある。

木造のバラック建てだが、絵かきの端くれらしく、小さなアトリエがついていた。

玄関に立った恵一は、ドアを叩こうとして、ハッと手をひいた。

家の中から、女の悲鳴がきこえたのだ。

ただの悲鳴ではなかった。ほとばしろうとするうめきを、無理に押し殺したような、異様な声だった。

不審に思った恵一は、足音を忍ばせ、玄関の横から庭へまわった。アトリエの窓から、一筋の光線が、暗い庭へもれている。窓のカーテンに、五センチほどの隙間があるのだ。

恵一は息を殺して、窓ぎわへ忍び寄り、その隙間から、室内をのぞきこんだ。無気味な悲鳴は、その中からきこえるのだ。

——あッ！

恵一は口をおさえた。

淡い螢光灯の光に照らされた室内に展開している、怪奇の光景！

全裸にむかれた女が、うしろ手に縛りあげられて、虫のようにうごめいているのだ。白い巨大な虫のように……。

縄は、その女の豊満な乳房の上に、左右の腕に、ぎりぎり食いこ

んでいた。

その女のそばに、細い竹のムチを握った三島が、悲愴な表情でつ立っていた。

「あなた、もっと、もっと打って！」

縛られた女は、髪をふりみだし、肩をもたえさせて三島にいった。おし殺した悲鳴は、この女の咽喉からもれているのだった。

「もう、いいじゃないか。ぼくはもう疲れたよ。寒くなった。風邪をひくよ。ガウンをかけてやろうか」

三島は、やさしくなだめるようにいうと、床に捨ててあるガウンをひろおうとした。

すると、女は狂気のように首を左右にふって、ヒステリックな声をあげるのだ。

「いや、やめてはいや！ あなた、お願い、もっともっと打って、あたしを打ちのめしてちょうだい！」

まるで、わがままに育った駄々子が、欲しいものをねだる時のようなポーズだった。

うしろ手に縛られたまま、立っている三島の膝へ、すがりつくように身をすり寄せるのだ。

その肩にも背中にもムチの痕があった。

「だっきみ、それ以上打ったら、からだに毒だよ」

三島は苦しげな顔になった。床の上にムチを投げ捨てた。それを見て女は狂乱した。

「あ、あなた、いじわる！ お願いよ、あなた、もうすこし、もうすこし！」

アゴを天井にのけぞらせて、三島にとりすがった裸女の顔が、その

夫婦和合の秘器

NEO

ワゴリソグ

(新案特許出願中)

本器を使用すればアナタの
悩み即日解消ノ専門家御推薦

悩む
男性に朗報!!

★勃起不全に対して

本器使用数分内に完全隆起し、射精後も萎縮しません。

★短小の方に対して

本ワゴリソグ使用数分内に局所は驚く程膨大します。

★早漏の方に対して

本ワゴリソグを(併用)により絶対に30分以上持続し効果絶大ノ

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響、話題を呼ぶ新製品ノ本器は(取付けたまま使用)する

るので効くのは当然ノ而も長年月使用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。

アナタの性能を即時10倍にする新製品ワゴリソグをスグ御使用下さい。

ハガキで申込次第カタログ無代進呈
▼定価送料共一組Ⅱ一、三三〇円
(個人名で急送します)

名産 肥後ずゐき 手芸品

☆好評新発売ノ
特製品七種組一函…850円で急送ノ

短小の永久療法に!

各賞受賞、専門医家激賞ノ
★画期的構想による
最新式

原増大器の発明ノ

男性器發育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「ラージ増大器」の出現により局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよノ

●送料共
定価一組Ⅱ一、四五〇円

東京都杉並区神戸町128

株式会社 療養の友社

電話(398)4679 振替東京118443

(高田馬場より西武線井荻駅下車~徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車)

ラージ
真空
増大
器

とき、窓の隙間からのぞいている恵一の目に、ハッキリと映った。

— あッ! あれは菊村女医!

ムチ打ちをせがんでいる裸女は、たしかにあの美しい女医だった。

そして、嗜虐と淫蕩に濡れているそのまなざしは、まぎれもなく、あの悦虚クラブの柱に縛られて、恍惚のうめきをあげていた女のものだった!

— やっぱり!……だが、これはいったい、どういうことなんだ!

現実感から遠のいた地獄の図であった。

恵一は錯乱した。もしやと思いつつも、この奇怪な事実につつて頭が混乱した。

— それとも、おれは気がちがってしまったのか、おれの目は狂ってしまったのか!

恵一はわれを忘れて、その窓を叩きはじめたのだ。拳から血がでるほど激しく叩いた。

「おい、三島、三島! おれだ、どうしたんだ、ここをあけてくれ!」
大声でわめいた。もう夢中だった。

三島と裸女は、愕然とし、みるみるうちに蒼白な顔色と変じて棒立ちに立ちすくんだ。

A8V

「——いや、まったく、たいへんなところをきみに見られてしまった。……じつは、菊村女医は、ぼくの愛人だったのだ。そうだ、きみが経験したという、あの悦虚クラブの女も、じつは正子……菊村正子

だったんだ……」

三島は、語りだした。

はじめは、蒼白になって、恵一の失礼な盗み見を激怒した三島だったが、やがて落ち着きをとirmどすと、逆に羞恥に顔を赤らめながら、恵一に告白するのだった。

——菊村正子の家は、貧しかった。彼女は大学を卒業するために、からだを売って学資をかせいだ。

収入も多かったが、精神的肉体的苦痛のはげしいこのアルバイトに、彼女は目をつぶり、歯を食いしばって耐えた。

そのうちに、馴染み客の男から、強烈なマゾヒズムを植えつけられたのだ。

学校を卒業するまでは、どんなにつらいことでも、と、いやいや男に身をまかせつづけた心理が、そもそも被虐的なものだった。その屈從的な心理が、客に教えられたマゾヒズムの技巧と一体になって、彼女の異常な病癖を形づくっていったのだった。

マゾヒズムを教えこんだその男の熱意と努力も、驚嘆すべきものであった。

三島と知りあい、愛しあって同棲するようになったのは、彼女の卒業間近のころであった。精神的な愛情は激しくとも、正常で気弱な三島の愛撫は、彼女のすべてを満足させることができなかった。

三島という愛人がおりながら、悦虐クラブにみずから身を売ったのも、その異常な欲望のためだった。

さらに、三島の手にも縄をもたせて、自分の腕を緊縛させ、ムチを握らせて打たせ、被虐のよろこびを求めた。

しかし、彼女は懊悩した。朝になると、人間が変わったように、み

ずからの行為に恥じ入る正子なのである。

三島の前に両手をつき、刺激のワナから這いあがることを約束するのだった。

そして、ふたたび夜がくると、執拗な嗜虐の虫が体内にうごめきはじめ、彼女の心とからだを七転八倒させるのだ。縄と鞭との誘惑にたえきれず、憑かれたように、サディストを求めて怪しげなクラブにはまりこむ正子だった。

「——だがね、ぼくは、かならず、正子の病癖をなおしてみせるよ。そして、きっと近いうちに、正式の結婚をするんだ……」

これが三島の悲痛な決意の言葉だった。

「ううむ……」

恵一は腕ぐみをして、ふかいためいきをついた。

恵一は知っていた。

これほど強度のマゾヒズムにはまりこんだ女が、容易なことでは脱けだせない事実を……。

どんな快楽でも、ものには程度というものがあるからなあ……なんでも、度をすごしちゃいけないんだ。適当にたのしむだけの、理性つてものがなくちゃいけないんだ……

恵一は胸中でつぶやいたが、三島にはこういった。

「大丈夫だよ、きつとよくなるよ。きみらの結婚式には、おれも招待してくれよな」

そして、恵一の脳裏に

「美貌の女医、じつは秘密の悦虐クラブに身を売る嗜虐の女……」

というきわめて効果的な、見出しの文句がうかんだ。

しかし彼は、この事件を発表しなかった。

読者サロン



★さし絵に工夫を

「風俗奇譚」十二月号拝見いたしました。内容が号を追って充実していくのは、うれしき限りです。十二月号では、伊藤晴雨緊縛写真集が圧巻でした。さすがに第一人者だけあって、実に妖艶な写真、ソクソクするほどすばらしいものでした。こういう古い写真のほうが、なんとなく縛り方、縄の扱い方が巧みで、迫力があるような気がします。

本文にはいって「女レポの拷問」「耽美荘の恐怖」がおもしろいものでした。ことに「耽美荘の恐怖」は構成が巧みで、まるで映画を見ているような生き生きした描写で、迫力がありました。本誌はともマゾの記事が多すぎるような気がします。

ので、こういうサド読物をもっとふやしてくださるようお願いいたします。

それから最後に、貴誌のさし絵は、どうも好きになれました。（表紙はよくなりましたが）さし絵さえよくなれば、貴誌の「品」はもっとよくなるのではないのでしょうか。その点が愛読者として残念でたまいません。妄言多謝（東京・東京一郎）

★「立石さま縁起」補足

拙作「立石さま縁起」の結末を、もう少し書いたのですが、ページ数の関係からか、カットされました。しかし、これは、無実の罪で処刑された若侍が男根神として祭られる意味が不明となり、どうしても必要なものでここで補足させてもらいます。――堂守の話はそこで終わっ

た。私たちはお家騒動の発端にありそうな話だと思いつながら聞いていた。が、さすがに無実の罪の若侍の最期のいたましさにそぞろ哀れを催した。

「それはそうとして、その若侍を縛るのに、どうしてこのようなりんがを祀ったのですか」と、学生の一人が質問した。すると堂守は、ちょっと考えていたが、

「それがどうもむごいことで、怒りに燃えた内膳正は、堀帯刀に命じて菅井俊之介を、非人の竹槍で突かせる前に、男根を切断させたのです。」

それも、ただ垂れさがったままではおもしろくないというので、醜い女非人たちの手で、その個所をなぶらせ、もてあそばせたのです。多数の群衆の見ている面前です。お滝の方はカンジとして、このありさまを見ていたそうです。十分隆起したと見るや、帯刀は抜く手も見せず、腹すれすれに白刃を斬り下ろしたのです。

「うッ」という声と鮮血とが同時に四散し、彼の若々しく逞しい一物は消え失せて、ボタンの花のような鮮血が噴出したので

す。

彼の死骸は三日ほどさらされてから、肉身の者に下げ渡され、菩提寺に葬られました。が、ふしぎなことに、その時斬られた一物が、どうしても見当たらないのです。それが一里も離れたこのI郡のヤブの中に落ちていたのを村人が拾い、ねんごろに埋めたのがこの塚です。その時に村人の発議でこの巨大な立石さまを刻んで、冥福を祈ったのです。何しろ美男の侍でしたから、若い女のひそかな参詣が多かったそうですが、それがいつか、子種をさずける神になって、石女（うまずめ）の神信仰を集めるようになったのです。

真野内膳正はその後ますます悪政がつり、ついに幕府から改易（かいえき）を命じられ、弟筋の酒井内膳頭が相続することになり、晩年は正室のぬいの方とともに真珠院で廃人のような生活を送ったそうです。

お滝の方は、内膳正の種をみごもったのですが、いざ分曉となると、妙な、えたいの知れない形のものが生まれました。お滝の方はそれを見るや逆上して血が上り、あらぬことを口走り

ながら狂乱したそうですが、これまでもとで狂死したそうです。どうも、そのものと申しますのが、こちらのご神体と同じ形のものだったそうで、こうなりますと、なんですか因縁話のようになりまして、今のお若い方は信じにないかも知れませんが、

★禪姿に感激

(芦立鋭吉)

毎月出版されるたびに貴誌のファンです。

初めてお便りいたします。十一月号、第六集はことにうれしく拝見しました。というのには、

第六集のなかで、組み写真「禪姿二人プレイ」が載っていたことです。これは、われわれファンが長い長いあいだ心から渴望しておりながら、かなえられることが貴誌によって始めてかなえられたからです。女性の緊縛およびヌードなどは、どの誌でもいやになるほどあり、いささかうんざりするほど溢れておりながら、男性の緊縛の皆無のうち、貴誌がついに取り上げてくださったことに深謝いたします。若さが溢れる二人の男性が、キリりと締めた六尺禪。それだけでも美しいのに、さらに

種々の縄が、クサリがからみ、高手小手に縛られた男性、この場合、禪を締めていなければ価値は半減されてしまいます。さらに欲をいえば、縛られた男性は、横またはうしろ姿でいますので前面からも堂々と撮ってくださるようお願いします。

今後は、必ず毎月、緊縛された男性の禪姿を載せていただきたく、出来れば「男性緊縛特集号」を発行していただけません。また僕も、あんなプレイをしたら、どんなに楽しいだろうと思います。

どうか、同性の同好の方のお便りを待ちます。

★六尺禪礼賛

(東京・KT生)

僕は浅草で働いている22歳のパーテンです。上京してまだ一年ですが、今年の三社祭りの時、みこしをかつがされ、そのとき生まれてはじめて六尺禪を締めました。締め方がわからないうので、先輩に教えてもらいましたが、それ以来、股間をつりあげ、それにぐいとくい込んでくる六尺禪が好きでたまらなくなり、ずーっと締めています。三社まつりの時だけは、全部

揃いの半てんにサラシの六尺一本のスタイルになります。このごろでは、銭湯などでも、六尺禪をしめてる人はみられなく、僕の店でも、何人の先輩や同僚のなかで、六尺禪を締めている男は僕一人です。

それで、ときどき、人にもひやかされ、禪が好きなのは流行おくれなのかナと思っていたところ、先日、古本屋で「風俗奇譚」の画報に、六尺禪を締めている男の写真があるのを見て、大いに喜びました。

それ以来、毎月たのしみにしています。読者サロンに六尺禪マニアの便りがあるので、とても心強くなり、銭湯でも大いばりで鏡の前に立ちゆうゆうと禪をしめます。

これを機会に、禪マニアの人と友だちになり、機会があれば愛禪者の人が集まって、禪一本で酒をのんだり、角力やレスリングをして、写真を写したりして、楽しい一時を過ごしてみたいと思っています。いかがですか。

★女装マニアの私

(浅草・六尺禪狂)

つたない文ですけれど、同好の皆様読んでいただけました

ら幸いと思い立ちました。どんな原因かしれませんが、いつの間にか女装することに喜びを感じるようになり、女性の下着その他、女性が身につける物に愛着を覚えて、もう何年になるでしょう。かなやかなショールウインドや、洗濯物に色とりどりのものを見ますと、胸の高鳴りを押えることが出来ないほどです。このことは、以前は「風俗草紙」今日では「奇譚クラブ」「風俗奇譚」などにも時々記載されており、大変うれしく思っており、専門的にも紹介されておりましたようですが、わたくしがいまこうして、これから書きつづりますことは、本当に、何というか、はずかしいと申しましようか、耳まで赤くなってしまうようなことです。

今のわたくしの姿は、ブラジャーとコルセット、濃い茶のストッキング、ウエストには金色の鉄板で出来たウエスト・ニッパが締めつけていて、ちょっと苦しいんです。

ここでわたくしのサイズを紹介しておきましょう。身長一六二・五センチ、体重五五キロ、バスト八八センチ、ウエスト五

六センチ、ヒップ九六センチ、腿五三センチ、股下七九センチです。

自分でいうのもおかしいですが、完全に女性の体つきで、肩幅よりも、いくらかヒップの幅があるように感じますが、ほとんど同じくらいで、顔は口唇の下が短く、丸く可愛らしいアゴで、お化粧した時は、自分でもほれぼれするくらいです。色は白いほうで、お風呂上がり時の肌はすき通るように全身がすべすべしております。

サイズのなかにウエストが五六センチと書きましたが、今はウエスト・ニッパをしており、幅が七センチで、長さは四五センチ、したがって、私のウエストは四五センチしかありません。背中の部分にカギがかかっているのですが、自分でははずせません。このことはのちほどおわかりになると思います。

バストはどうなんだった。バストだって本物よ。いま、ブラジャーを取りますからね、乳首は女性と比べると小さいけれども、乳房はだいたいふくらんでおりますのよ。これもきつと書きましょう。

鏡のなかで、おかしな、わたくしがほえんでおります。細い首筋、可愛い乳房、不自然といてもよいほど急に細くくびれたウエスト、そこからまた急に盛り上がるように広がる腰高なヒップ、それを支えている二本の大理石のようなまん丸な太腿、ウエストよりも太いの。下に流れる曲線が、指先の赤い爪のところで止まっています。歩きますと、腿と腿とがふれ合っ、ヒップが左右にゆれて、はち切れそう。本当の女性よりもスタイルがいいので、いつも優越感にひたっております。以前は、こんなじゃなかったわ。

ズボンをはくと、いやにお尻がつき出てしまつて、背広なしでは人のなかへ出られないくらいです。から、コルセットはどうしても使うようになってしまいました。

でも、お風呂なんかで、人からじろじろみられたりして、とてもいやだった。わたくしの生活が、より以上にそうさせたのかしら。ガール・フレンドもない孤独な生活が続き、アパルトでひとり住まいのわびしさか

らでもないでしょうが、女性の肌着が欲しくてたまらなく、お仕事も手につかないことがたびたびありました。そんな時は、必ずといってよいほど古本屋の店先をあさって本を買い、ベッドにもぐり込んで読みふけた。いい布地を買って来て、パンティーやブラジャーを自分で作りました。だが、ミシンがあるわけなし、一針一針手で縫って、時間の過ぎるのも知らないで夜を明かしたことが何回となくありました。

そして出来上がったパンティーをはいては、夢見る心地で出勤したり、勤め先でトイレに入り、そつと指先でその感しよくに陶醉するうちに、歳月は過ぎてゆきました。

浣腸のことも本で知り、激しい衝動にかられて、最初は万年筆なんかで恐る恐る楽しんでおりましたが、これもたび重なるうちに、浣腸器具を買い集めるようになり、苦しみながらも、そのエクスタシーを感じて、徐々に成功するようになりました。現在では、ちょっと時間がかりますが、ソーセージ

がどうにか使えるようになっております。

それから、自分で自分を縛る方法もいろいろ考えた結果、一人でするのを楽しめるようになりました。その一つをご紹介しますと、仰向けL型大の字しばりの方法ですが、弾力のつよい太いゴムを、左右の柱または壁などから一メートルぐらいの長さにしかりと取り付け、その先端に足首を縛れるように紐か輪をつけます。このゴムの中間は、いったん切り離し、紐の輪によって中継してあります。その輪を左右から、中央へ引っ掛けておいて、紐で止めます。その紐にロウソクをセットして火をつけまして、そうしておいて垂れ下がったゴムの先端に、片足ずつ足首を止め、両手をうしろへまわし、あらかじめ輪を作っておいた紐を使って手首を縛ります。もちろん、この縄の先端は固定して、余裕のないようにしておきます。

これで完了、ロウソクの火がだんだん下へ移ってきて左右の輪を止めに紐が焼け始めます。その時のきなくさいにおいに、たまらなく、これから縛られる

感激の嵐がおし寄せようとするとき紐が焼けきれるでしょう。わたくしの形のいい両足は左右いっぱい、いいえ股がさけやしないかというくらいに開かされて、そのうえ、ロウソクの涙がポタポタと下腹部に落下します。

手首の縄も、その原理で、装置しますと、なおいっそうの緊縛感が得られます。

このままですと、永久にこうされていなければなりません。火事でも起こったら、いいえ泥棒が侵入したら、いいえ、アパートの管理人が合鍵を使って入って来たら、破滅があるばかりです。

あたくしは、そこでもだえ苦しみます。でも誰も縄を解いてはくれません。でも、これは時間が来ると、また縄がゆるむようになつております。でなければ、一度プレイを楽しんでも、二度目は出来ません。というのには、もう一カ所ロウソクが火をともししています。全部で三カ所です。このロウソクの火の燃え加減で時間を調整するのです。これは、ほんの一例に過ぎないものです。いかがでしょうか。

★密偵秘話 (東京・波田優子)

日本の密偵が捕えられて乗馬服の女の拷問を受けている。女は魔窟の日本人であり、売国奴である。眉目秀麗な密偵が日本人だと白状しないので、そのボロの支那服をはいで裸にする。と、真新しい六尺褌をしていく。女は勝ち誇ったように「いくら日本人でないと強情張ってもご覧、その六尺褌がいい証拠じゃないか」

男は細引きでうしろ手に縛られ、冷たい床の上にころがされている。

「言わなきゃ言わずようにしてやるからね」

女は、靴のカカトで男の腰を蹴って、仲間の女四、五人を呼ぶ。みな日本の私娼上がりの女である。

「マア、六尺褌だわ」「こんなところで珍しいわ、六尺褌の男って」「立派な日本人よ、かくしても褌が物を言うわよ」男は無念の歯ぎしりをして、なおも頑強に否定するが、女の一人が「姐さん、太いわこいつ。こいつはふだんから六尺褌をしている男よ、どうしてわかるって。

布の回し方やうしろの結び目を見りやわかるのさ。ね、そうだろう」

と男へ言う。

「尋常の責めじゃきかないよ、じっくりと責めつけるから、みんな支度おし」

六尺一本の男は、この地下室で凄絶な責めにかけられるのだった。宙吊り、鞭打、水責め、さかさ釣り、果ては踏み付けられて焼け火箸で腰から尻へ十文字に焼きつけられる、褌も焼け千切れて全裸になってしまふ。三日三晩の責めでも男は白状しなかった。

——日露戦役前、奉天市街の一隅にあったことである。魅力あるスパイ責めと、時々思いつくのである。(東京・百田生)

★獅々村裕さんに

本誌十一月号の獅々村裕氏のひっぶ・えんど・はいひーるの異常な耽美にひかれました。ねっとりとした文章もさることながら、氏独自の素材には全くおそり入ります。創刊以来愛読していますが、アブ・ストーリーとしては初めての傑作ではないでしょうか。つきましては、一、二考えた

素材もありますので、できましたら、獅々村氏にご執筆ねがいたいと思います。

①耳飾り——イヤリングも単なるアクセサリーとしてではなく、ある男が考え出した責め具として用いられる。たとえば、十分間に一度ずつ耳たぶにチクリと針の刺さる仕掛けのもの、または分銅つきの重いイヤリングをつけて苦痛を与えるもの。

②ドーム——女性のからだに表われた丸い部分をこよなく愛撫し、果てに破壊してゆく過程を描くもの。

以上が獅々村氏におねがいたいテーマです。(千葉・N)

★撮影会を開催して

小生は、女体緊縛に関心をもっているものですが、そういう撮影会に参加させてもらえないものでしょうか。

じつは、かねてから、自分でも、女性をしぼってみたいし、写真をとってみたいと思ってるのですが、そういったモデル嬢を知らないのです。いつも歯がゆい思いをしているのです。そこで、御社で、そういう機会をつくっていただけないでしょうか。(東京・高須生)

本誌「風俗奇譚」の在庫お知らせ

既刊号の本社在庫分が残り少なくなりました。お取り揃えになるにはいまが好期です。お申し込みはお早めに！

創刊臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (一四〇円)

多色刷口絵・かぎや店先(春信)
写真口絵・肌の十字架ほか
特集・サディズムの種々相
死体に処女を捧げた娘の話
現代女性の变态心理を衝く
蛇淫の怪(現代怪奇物語)
刑罰人の縄の掛け方(江戸時代)
白人女性を征服した黒人男性
縄で縛った歓喜の抱擁
仮面舞踏会(伊国・四畳半)
王妃マユラの虐殺(インカ悲史)
変態演出考(ドサ回り告白記)
妊婦を殺す変質魔
犬により快楽を求める女
春の臨時増刊号(二〇〇円)
妖異・猟奇艶笑特選読物25編
多色刷口絵・老女村岡
写真口絵・捕われの白肌ほか
二色刷口絵・小田利美画集
グラビア・責められる肌ほか
変態性欲考(ある性犯罪の分析)
死体を溶かす(科学者の犯罪)
女に奪われた処女
獣婚・女と犬(異常性欲)
舌を噛み切られた男
悪魔に肌を許した人妻の話

猫の怨霊(怪奇小説)

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブほか

悦虐特集四月号 (売切れ)

多色口絵・五彩のサタン

小田別美責め絵集

グラビア・美女緊縛ほか数十葉

の嗜虐編(変態の緊縛圧巻)

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理(ムチ打ちの極致)

鞭打の歴史ムチ打たれる女

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死(異常性愛)

人間と蛇との交情

地獄尼僧院(おそろべき実態)

火あぶり台の女(回教徒綺譚)

縛りあげた女の可愛さ

情事の部屋のサド・マゾ

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔(夏の夜の犯罪)

明治性的珍聞史③

女の死体に憑かれた男ほか

耽美法悦特集五月号 (一四〇円)

折込み口絵・空中人魚

口絵・女と動物ほか

グラビア・捕われの人魚ほか

特集・同性愛

同性愛の種類と実際

女性相男子の恋慕手記ほか

マゾッホの被虐待契約書

野獣の夜(写真物語)

女の切腹その心理の分析

女だけに加えられる拷問

ハレムの残酷物語

女の肉を食べた男

明治性的珍聞史④

吹上佐太郎の性の異常遍歴

性的イレズミ考ほか

嗜虐陶酔特集六月号 (一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇

喜多川歌麿の艶画より

鈴木春信吾嬬土産より

グラビア・足づり裸女ほか

特集・フェチズム(淫物症)

フェチズムの実態

フェチズムの源泉は嗅覚

片輪男に性欲を感じる女

排泄物に発情するほか

浣腸に魅入られた女(告白記)

八十七個の洗濯バサミ(サド記)

マゾ妻二代目・矢作ヨネの話

マゾヒストの手紙から①

刑罰はどのように変態的か

レスボスの日、ほかアブ小説

夏の臨時増刊・薫風特別号 (二八〇円)

多色刷口絵・無残石燈

アト口絵・鞭をふるう女たち

蛇責め・穴蔵さかさ吊りほか

グラビア・デヴァンの狼籍・荒

縄と岩・ベッドの愉楽・哀美

の白肌・裸女無残絵ほか

特集・世界怪奇残酷秘話

十代の悪の女王(米国暗黒街)

白肌責め絵図(江戸無残帳)

花嫁を突き殺したサドの夫

人食い人種の太鼓ほか

特集・変態性欲犯罪実録

尼僧強姦魔・大米竜雲

俺のモノをなめろほか

写真物語 責め写真家とモデル

絵物語 無法狼・娘しばり

怨差無残特集七月号 (一四〇円)

多色刷口絵・落花図絵

口絵・女のプリズムほか

グラビア・恋慕受縛・処上の白

魚・肌もあらわにほか

海の怪物・山の怪物

特集・食人癖

サディズムの極食人症

中国における食人奇譚

人間料理を食べた人々

死を賭けた遊戯(裁判記録調書)

鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め

ソドム族(あるソドミアの告白)

若い女を硫酸で溶かす

ムチの下で陶酔する女

女忍者(戦国忍者の残酷秘話)

白肌をばう毛虫(時代小説)

幻妖異虐特集八月号

(一四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏

口絵・荒れ小屋の残虐・お針子の受難・ウインチづり

グラビア・スタンドの美女・柔

肌しぼり・竹責め・落花の闇

・亀甲しぼり・地獄に落ちた

男・両手づり・嗜虐の白肌・

こぼれる妖美・二つ折りほか

特集・レスピアンの実態

東西レスピアンの実態

サディストとマゾヒストの往復

書簡(あなたの犬になりたい

馬になります)

あたしの悦虐プレイ

妖怪変化とセックス

化粧室談義(トイレット考現学)

明治性的珍聞史⑦

少年の臀肉切り・野口男三郎

若い女についた死霊ほか

艶美悶悦特集九月号

(一四〇円)

多色刷口絵・空中鞭打

原色写真・巖頭の裸女・つるさ

れた白魚・女のポーズ

グラビア・裸女無残・落花の景

柔肌責め・投げ出された女・

どうとでもして・サルグツワ

をはむ女・静かなる地獄ほか

特集・女装する男たち

男が女装するということ

女装する男たちの生感ほか

マゾヒストの手紙から③

浣腸のいけにえ(告白実験)

若年における異常の生感

奇妙な両会(アブ・ストーリー)

おこの殺し(猟奇殺人事件)

男へ復讐のため男装した女賊

暗黒街の処刑室(本格サド小説)

恋虐呪縛特集十月号

(一四〇円)

多色刷口絵・女体知恵の輪

色彩写真・美しき囚虜・あかり

も淡く・はなやかな受縛

グラビア・白衣の佳人・石だた

みの無残絵図・長椅子と女・

禪をした男・浴衣も乱れて・

亀甲にしぼられて・ほか

特集・サディストの群れ

残虐なるサディスト達

あるサドやくざの告白

ネクロフィリーの男

犯罪から見たサディストほか

アブチック秘画展

今やスリル第3世紀・ほか

地下室の吊り責め(浣腸記)

生きながら焼かれる女

マゾヒストの手紙から④

男性に加えられた珍刑

全身くまなく刺青した男

明治性的珍聞史⑨

復讐鬼(サド小説)

裏切りの決算(サド小説)

凌辱無残特集十一月号

(一四〇円)

多色刷口絵・水地獄

女体責め絵・丸太小屋の惨・岩

場ハリツケ・竹しぼり責め・

射撃のマト

グラビア・艶麗無残・はなやか

な足つり・恋縄の姿態・犬の

首輪のブラジャーほか

特集・戦争残虐の記録

拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇)

憲兵狩り(終戦残虐秘話)

伊予富士の地獄地帯

人食い人種を食った兵士

写真・戦争残虐の記録

百十二人の集団ハリツケ

水責め火責めにされた姉妹

ビルケナウのたそがれ

男をいじめる女・写真集

マゾヒストの手紙から⑤

あたしの乗馬日記

女の下着に憑かれて(告白)

冷房用女体ベッド(秘境怪奇)

死美人館潜入記(香港魔術)

少年愛の人びと(ホモ禁秘帖)

ひっぶ・えんど・はいひる

(アブ・ストーリー)

縛虐悶悦特集十二月号

(一四〇円)

特集・伊藤晴雨自選傑作集

多色口絵・野ざらし

責め絵スケッチ集

責め絵名作選・駿河責め・し

すと責め・引きずり責め・死

体責め・すり鉢責め

晴雨女体緊縛写真集

グラビア・浴室の悶姿・廃墟の

とられわびと・捧しぼりほか

マゾヒストの手紙から⑥

立石さま縁起(男性の責め)

女レポの拷問(告白小説)

白い蝶(水車緊縛の幻想)

美しきムチの下で

木馬責めと滑車吊り

顔のない足クラブ(アブ小説)

耽美荘の恐怖(サド小説)

譚奇俗風報画

バックナンバ
ーのご注文は
書留か振替が
確実でご利用
です。送料は
当社で負担し
ております。

画報・風俗奇譚第2集

(二八〇円)



多色口絵・池畔の愉悦
写真口絵・陶酔する女体八景
第1グラビア・鴨居づり・海老責め・水にひたされてほか
第2グラビア・椅子しぼり・美囚六態・白い人魚のもたえ他
第3グラビア・犬になれ・暗闇のよろこび・冷たいタイル他
マゾヒスチック絵画館
乗馬服の女たち・ほか
アブノーマル秘画展
鞭打する人々・奇妙な連中他
凄惨・目を覆う殺人現場
フォト・ストーリー・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
海外残虐譚・人間ステッキ他

画報・風俗奇譚秘蔵版

(二一〇〇円)



多色刷写真・まひるの艶肌ほか
多色刷口絵・空中ハリツケほか
責め絵画集・被虐のロープほか
第1グラビア・二人無残・格子にはりつけられてほか
第2グラビア・白肌のデュエット・裸女キリストほか
第3グラビア・格子責め・異虐図絵・嗜の虐ポーズほか
アブチック絵画館
コルセットをする女たち・浣腸される女たち・亀裂へのあこがれ・レスボスの歌ほか
男をしいたげる女たち
人獣交歓の野外彫刻
乗馬する女たち
小説・永遠の美と若さの泉
(ザッヘル・マゾッホ)

画報・風俗奇譚第4集

(二八〇円)



多色刷写真・五輪石塔の前で・水辺の小屋で・緊縛落花ほか
アート口絵・白肌針責め・納屋の中・焼きゴテを乳房にほか
第1グラビア・水車に縛られて水責め・ローソク責めほか
第2グラビア・青い無残縛巻・変わったエビ責め・ほか
第3グラビア・お灸責め・縛られた肉塊・活魚料理ほか
世界名作秘画誌上展覧会
サルダナパールの死・ほか
リチャード・ミューラー画集
女体緊縛考(その方法と分析)
絵物語・悪徳の栄え(サド)
絵物語・町の野獣たち
絵物語・野盗と女たち
裸女緊縛30態(迫真総集版)

画報・風俗奇譚第5集

(十月号)

(一八〇円)



多色刷口絵・白い肌のいけにえ
首輪しぼり・暗黒の世界ほか
アート口絵・熱気むし・ハナ責
め器・さかさ養子りほか
第1グラビア・首つり人形ほか
第2グラビア・変わった木馬他
第3グラビア・静かなる苦悶他
奇妙な絵画展覧会
アブチックなアルバム
五十万人の大虐殺
トリックによる残虐写真
死にまさるアヒル行進10マイル
生きながら射撃の的にされた男
サソリ谷の死の戦い
絵物語・続・悪徳の栄え
絵物語・ワナにかかった令嬢
絵物語・女密輸船
フォト・ストーリー・奇妙な娯楽
その他満載

画報・風俗奇譚第6集

(十一月号)

(一八〇円)



多色刷口絵・石橋の上に・緊縛
置き物・受縛絢爛ほか
責め絵・吊ってくすぐる・アリ
責め・肌を巻くベルトほか
第1グラビア・壁上の受縛・浴
室の責め・縛愁のひとほか
第2グラビア・長椅子さかさ姿
態・露台の白魚・ほか
第3グラビア・華麗なるハリツ
ケ・残虐を運ぶ自動車・ほか
画集・ソドムの額縁7景
アブチックな写真集
演劇・緊縛ア・ラ・カルト
ジョン・ウィリー画集
フォト・ストーリー・恐怖のド
ライブ
絵物語・サリィの体験
絵物語・マミの正体
絵物語・悦虐の天国ほか

画報・風俗奇譚第7集

(十二月号)

(一八〇円)



多色刷口絵・海老責めの女ほか
女体責め絵七景・土居啓子・田
上恵子・江馬美久画集
伊藤静雨傑作責め絵責め写真集
人弓・しぼり責め・しりを焼
く・ヒル責めほか女体責め
グラビア・船と女・竹やぶのし
いたげ・股裂きしぼり・皮ひ
も十字・うしろ方形縄・首輪
につながれて・板の間は冷た
い・お灸で責める・首ひし縄
縛愁のひと・ちごなわほか
絵物語・男をいじめる女たち
絵物語・ビット・ゲーム
絵物語・電流責めの私刑
絵物語・責められる女忍者
女をしいたげる7景
緊縛フォトと拘束絵画集
その他多数

秘蔵版風俗画報

風俗画報第1集

全巻総グラビア百五十余
ページの豪華大冊！集
録した累縛フォト二百枚
九人のモデル競って熱演
妖麗凄絶のオール迫真場
面集！正に決定版中の
決定版の強力第一弾！
(五〇〇円)



風俗画報第2集

座右に一冊備えれば、望
みのときにその異常美の
世界にあなたを導き、い
つでも心から堪能できる
境地を現出する緊縛フォ
ト。加えて一流画伯によ
る責め絵の絢爛たる絵巻
(三〇〇円)



特写緊縛責め写真を分売します

このたび弊社では、読者の皆さまのご要望におこたえして、「代理部」を開設、特写写真を分譲することと致しました。緊縛、責め、マゾ、ホモ、浣腸、切腹など、あらゆる部門を揃えつつあります。どうぞ、ご利用ください。

▼吊り責め無残(略A3)

三枚一組三〇〇円
羞恥と悦虐にもだえる美女の全裸の吊り責め地獄絵巻

▼華やかな緊縛ポーズ(略A4)

三枚一組三〇〇円
思わず息をのむ強烈凄絶、しかも絢爛たる緊縛女体美

▼クサリ縛り(略C5)

三枚一組三〇〇円
乳房と桑肌をがんじがらめに締めあげる冷酷なクサリ

▼豊満なる緊縛女体(略C6)

三枚一組三〇〇円
はちきれんばかりの肉体にくい込む縄こそ嗜虐の極致

▼女囚緊縛ポーズ(略A6)

五枚一組五〇〇円
江戸時代の刑罰資料から女囚縛りを再現の妖美哀歓譜

▼海老責め地獄(略C7)

三枚一組三〇〇円
死一步手前の海老責めに絶叫する決定的瞬間のポーズ

▼凄絶切腹六態(略A8)

六枚一組八〇〇円
豊満な腹部への嗜虐、噴き出る鮮血、女体悶悦の極致

▼臀部責め(略A10)

三枚一組三〇〇円
豊満な臀部への加虐、ムチがとび、赤い蛇がはい回る

▼禪姿二人プレイ(略B18)

三枚一組三〇〇円
サド・マゾ・コンピの男性二人の禪姿による迫真緊縛プレイ

▼禪姿ひとり男(略B17)

三枚一組三〇〇円
まっ白い六尺ふんどしにみる男性特自の魅力横溢姿態

▼眼帯の女(略C8)

三枚一組三〇〇円
片目をふさがれた女の魅惑がにじみでる、におい出す

▼さるグツツ艶姿(略C9)

三枚一組三〇〇円
呼吸をせきとめられた責め苦のなかから生まれる艶美

編集だより

★：一月号をおおくりする。小誌としては第二年目を迎えたわけで、まず最初に、読者の皆さまの、よりいっそうのご支援をお願いする次第である。

★：本号の口絵に紹介した「血を好む大公妃」はAZの傑作としてヨーロッパでは珍重されているものである。じゅうぶん注意して原面の味を再現することに努めた。こういった名画は、これからでもできるだけ紹介していきたいと思うから、ご期待願いたい。

★：本号の写真ページは二人プレイや皮フェチシズムを加えて、従来欠けていた面を補った。アブチックな分野は多種多彩であるので、そのへんにも意を用いている証左とご助言をお待ちしている

★：読者の方から、撮影会を開けというご希望が多い。目下検討中でいづれ詳細を発表するゆえご了承ください。

月ぎめご購読の方法

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月(一冊)	一四〇円
三カ月(三冊)	四二〇円
六カ月(六冊)	八四〇円
一カ年(十二冊)	一六八〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月(一冊)	一八〇円
三カ月(三冊)	五四〇円
六カ月(六冊)	一〇八〇円
一カ年(十二冊)	二一六〇円

本社直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確実便利です。

風俗奇譚 一月号

定価一四〇円

昭和三十五年十二月二十日印刷
昭和三十六年一月一日発行

編集人 高倉 一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一三五
発行所 文献資料刊行会
振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番